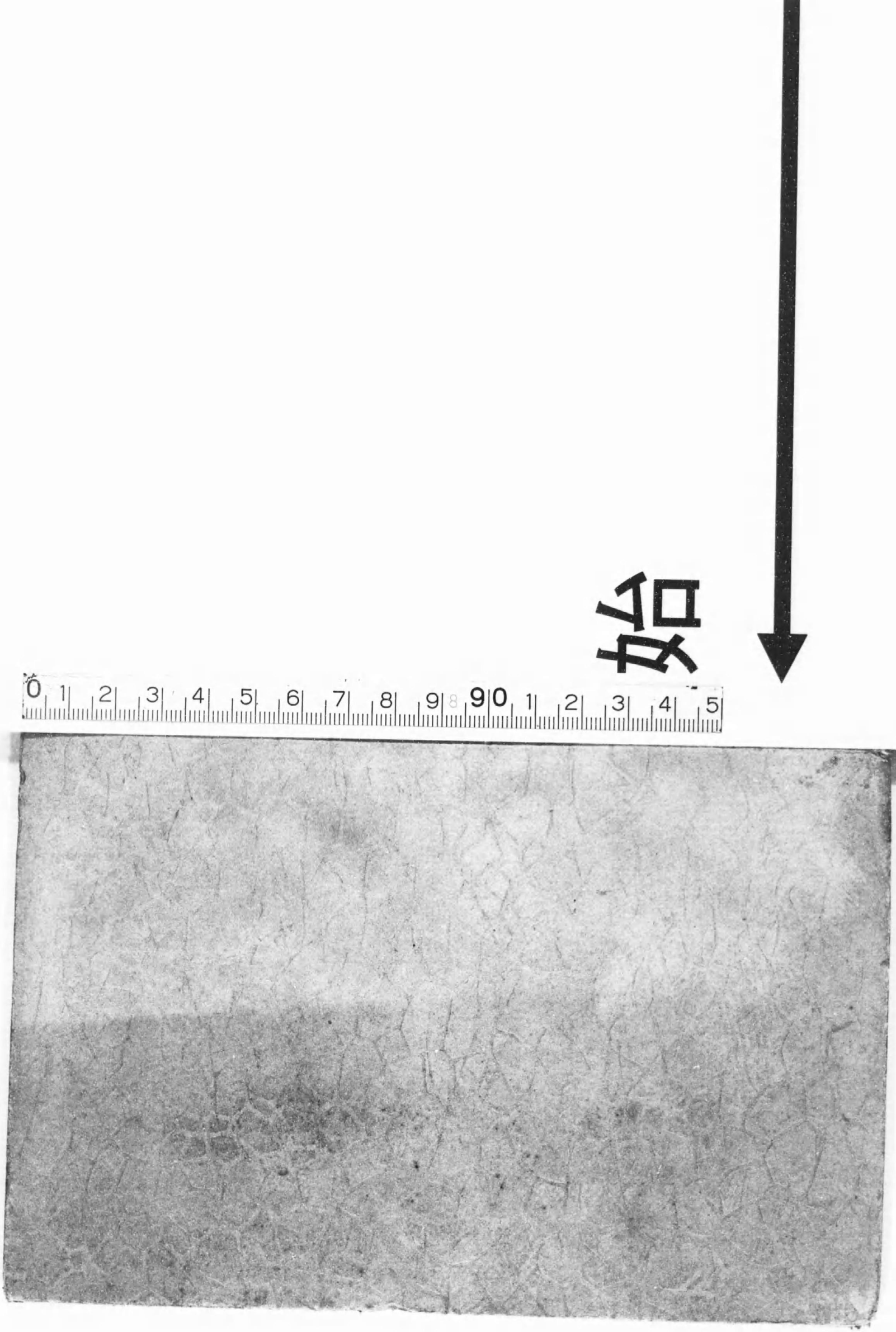
品女

特218
752

帝國圖書館藏

聖書講義

山上垂訓

工學博士 佐藤定吉 著

靈響山道場

帝國圖書館藏

序

山上垂訓は靈界の眞理を明示する公式である。原理を代表する公式である以上は時代と場所とを超越して、如何なる難問題にも普遍的に之を當て篏めて成立する筈である。問題を解き得るか否かは一つにその公式を正しく機に臨み變に應じて活用し得るや否やの一點に歸する。

聖書に書き誌るされたこの山上の垂訓は二千年昔ガリラヤ湖畔で當時の民衆に向つてイエスによつて說かれたものであるが、これがまた同時に非常なる廻轉時期に立つ今の日本の國民に向つて新しく敎へられてゐる天來の聲である。

故に私は今、日本の現代社會に於ける混亂狀態の世相を靜かに凝視しつゝ、丁度數學の難問題に對して公式を當て篏める時のやうな心持ちで、今吾等日本國民に提出されてゐる社會の難問題を解釋するために、この靈界の公式を當て篏めて見たいと思ふのである。

故に本書は山上の垂訓に對して從來の歐米の聖書學者がどう研究したか、また彼等が如何なる見解を持してゐたかなどとの古典的解釋を學ぶのではなくして、イエスが示した靈界の公式を現代の日本人が如何に活用すべきかを學びたい。而してこの山上垂訓の中に如何に尊い靈界の寶庫が伏藏してゐるかを東洋一流の直觀的筆法によつて透見して見たいのである。然も日本固有の傳統の思想に生きつゝ科學を修め、信仰に生くる著者の立場から見ればイエスの垂訓が如何に見ゆるか。聖靈の指導に從つて示されるまゝを毎朝の研究所に於ての祈禱會に於いて試みた聖書講義を取り纏めたのが即ち本書である。

故に本講の内容を過去に於ける歐米の聖書專門學者の意見と比較參考して見れば隨分異る見方の數々か見出されるに違ひない。けれども、この山上垂訓が靈界の公式である以上には、應用する時代と場面とが異なればそれだけ活用の道が各自異なるのが正當である。それを無理にも歐米の傳統のまゝに從はねばならぬかの如くに拘泥する處に折角の活きたこの公式が死んで了ふのであらうと思はれる。これまで

私は歐米學者の手になつた多くの聖書講解を讀破したが、どうしても靴を隔てゝ搔く如くぎこちない或るものが兩者の心を遮ぎり、心の琴線を振ひ動かす何物かが介在して物足らなさを感ぜずにはおられなかつた。その結果は人体を解剖台上に載せてメスを當てる度毎に折角の生命が失はれて、冷たい死骸が殘されるばかりの時のやうな實感を與へられて致方がなかつた。

かくて、聖書は自己の全靈をあげて心讀体讀すべきであることを敎へられ、それ以來、私は常に深い祈禱の準備の後、聖靈に導かれつゝ、神御自身の光に照らされながら日毎に聖言を學ぶことにしてゐる。この山上垂訓も毎朝の祈禱のうちに啓示さるゝまゝを研究所員と共に學んだ餘滴に過ぎないものである。

かくして成り立つた本書が、從來歐米人の手になつた聖書講解の直譯的解釋から受けてゐた或る種の偏見と誤解とを祖國同胞の心より取り去るに何らかの役に立ちまた何物か直接に神よりの聲にふれつゝ、この驚くべきイエスの敎訓に直面して、滾々と湧きて止まぬ生命の泉を日本人自らの盃にて飲むことに幾分でも貢献する處

があり得れば、著者の歡喜は之れに過ぐるものがない。

今や、特別に祝福の聖手もて導かれつゝある吾が愛する祖國八千萬の同胞の一人々々がこのイエスの山上垂訓の靈泉に汲みて枯渇せる靈魂を潤ほし、滅亡の生活より永遠の生命の中に甦生されん事を私は祈つて止まないものである。

昭和三年十一月十日御大典の日

佐藤定吉

目次

序

山上垂訓（マタイ傳第五章―第七章）……一―一三

山上垂訓序論……一三―一六

山上垂訓環境……一七―二〇

心の貧しき者は幸福なり……二一

（一）初兒の心……二一
（二）人の心は天與の眞空管である……二二
（三）クルックスの眞空管放電に學べ……二三
（四）人はラヂオの受話器である……二四
（五）傲慢不遜は天國の寶を蔽ひ隱す石である……二五
（六）天國の扉を開く鍵……二五

悲しむ者は幸福なり……二七

（一）人は何故に悲しみの心が生ずるか……二七
（二）人は常に何物かの欲求にかられて動く……二七
（三）三種類の欲求の中に人は生く……二八
（四）悲しみの起る原因……二八
（五）刺戟は生命へのパンである……三〇

(六) 悲しみを感じ得ざる生活は死である……三一
(七) 悲しみ得る者は幸福なり……三二
(八) 愛の神は全人類が眞に悔改むるまで愛の鞭をあて給ふ……三一
(九) 悲しみ得ざる人は狂人である……三三
(十) 悲しむ者の特權と勝利……三四
(十一) 苦難は神の授け給ふ尊い學課である……三五

天國の八憲法……三六
(一) 地上の幸福と天國の幸福……三六
(二) 光の焦點と宗教の眞理……三七
(三) 天國の八憲法……三七

柔和なる者は幸福なり……三八
(一) 眞の柔和なる姿……三八
(二) 水の如く謙遜柔和にして萬物の母となれ……三九
(三) 眞の偉大な人物とは誰か……四〇
(四) 神と偕に歩む生活、これ最も柔和な人である……四〇
(五) 眞の愛は神に從ふ心より湧く……四一

幸福なるかな義に飢え渇く者、その人は飽くことを得ん……四二
(一) 飢え渇いた時の聲は人間本性よりの叫である……四三
(二) 正義と愛は最後の勝利者である……四三
(三) 正義の人の歩みは大瀾の流れであ る……四六
(四) 祖國を吾れに與へよ。然ずんば死を與へよ……四八
(五) 第一に神の正義を求めよ、さらば第二に世のものは與へらるべし……四七

一

幸福なるかな、憐憫あるもの、その人は憐憫を得ん……四八
(一) 天國の第一條件、『愛』……四八
(二) パウロの下した愛の定義……四九
(三) 受くるよりも愛を與へ得るものは幸福なり……四九
(四) 愛は天國の扉を開く鍵である……五〇

幸福なるかな心の清さもの、その人は神を見ん……五一
(一) 清き心とは何か……五一
(二) 見神の絶對必要條件……五三
(三) 信仰の極致は見神の體驗に歸着す……五四
(四) 清い心が『信』を與へてくれる……五四
(五) 信仰の對象を何處に求むるか……五五
(六) 見神と心の統一狀態……五六
(七) 日本の救と國民精神……五七

幸福なるかな平和ならしむるもの、その人は神の子と唱へられん……五九
(一) 平和の源泉……五九
(二) 社會人としての責務……六〇
(三) 心の動搖を赤面するほどに恥ぢたい……六一
(四) 平和な姿、神人合一……六二

幸福なるかな、義のために責められるゝもの、天國はその人のものなり……六三
(一) 最も祝福されるもの……九三
(二) 人は二次式電池である……六四
(三) 與へんが爲めに受けよ……六五
(四) 最大の幸福は死に場所を發見せる人である……六六
(五) 人生の幸福は迫害を突破する進軍にあ……六七

り……六七　一（六）殉職者の勝利と幸福……六九

天國の八憲法綜括……七一

（一）天門を開くべき八つの鍵……七一　（四）八條件の奥に隱されたる中心點……七六

（二）汝一つをも缺ぐな……七五　（五）十字架の力は八條件を實行せしむる原動力である……七七

（三）人の歩みと神の道……七六

愛と義……七九

（一）愛の引力、義の軌道……七九　（四）人生の根本要素たる愛と義……八三

（二）宗教と道德法律との關係……八〇　（五）日本帝國の根本的救濟とイエスの宗教……八三

（三）愛と義は左右の足である……八一

イエスの宗教と宇宙の眞理……八五

（一）太陽系の八星と天國の八憲法……八五　（三）八要素の相互關係……八九

（二）八つの靈星は四軌道に還元さる……八七　（四）宇宙の眞理とイエスの宗教……九一

人生の目的……九四

（一）汝等は地の鹽、世の光なり……九四　（三）世の光とは何を意味するか……九八

（二）地の鹽とは何を意味するか……九五

社會改造の根本方針……一〇三

（一）愛つにあらず成就せよ……一〇三　（三）善より最高善へ……一〇五

（二）處生の金科玉條……一〇四

社會改造の實現の基礎原理……一〇七

（一）怒は殺人と同罪である……一〇七　（三）形式より生命の奥へ……一〇九

（二）現代社會の病根……一〇八　（四）現代日本は空家の文化……一一〇

罪惡に對する態度……一一一

（一）罪に勝つ道……一一二　（三）互に愛を負ふの他何物も負ふな……一一五

（二）罪より聖められること……一一三

社會に對する態度……一一七

（一）汝自らを知れ……一一七　（三）神と人との分限を知れ……一一一

（二）言行一致……一一九

人類生活の標的……一一三

（一）親心の愛……一一三　（三）第二里の人……一一五

（二）愛の勝利……一一四

人生最高の理想……一一七

(一) 仇を愛せよ……一二八
(二) 全人類の神……一二八
(三) 最高の理想……一二九

僞善を避けよ……一三二
(一) 僞善を避けよ……一三二
(二) 神を見よ……一三三
(三) 善は善なるが故に……一三四

靈交……一三六
(一) 祈禱……一三六
(二) 密室の祈り……一三八
(三) 靈と眞とをもて拜すべし……一四〇

主の祈り……一四一
(一) 天にいます我等の父よ……一四二
(二) 願はくば、御名の崇められんことを……一四五
(三) 御國の來らんことを、御意の天の如く地にも行はれんことを……一四九
一、人生の尊さ……一四九
二、人間の價値……一五一
(四) 吾等の日常の糧を今日も與へ給へ……一五二
一、富とは何ぞや……一五二
二、一切を神に委ねよ……一五四
(五) 我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ……一五六
一、他人の罪を赦せ……一五六
二、神より赦さるゝ者……一五七
(六) 我らを誘試に遇せず、惡より救ひ出したまへ……一五九
一、君子危きに近寄らず……一五九

二、社會改善の要……一六二
(七) 國と權と榮とは窮りなく爾の有なればなり アーメン……一六三

過失を赦せ……一六七
(一) マタイの今昔……一六七
(二) 赦す者の歡喜……一六八

僞善的行爲を慎め……一七〇
(一) 大賢愚に近し……一七〇
(二) 神の見る善事……一七一

天に財寶を積め……一七二
(一) イエスと生活問題……一七二
(二) 朽ちざる寶……一七四

光明の人生……一七六
(一) 人生の明暗分岐路……一七六
(二) 光を求めよ……一七八

二人の主に兼仕へ得ず……一七九
(一) 二兎を追ふ者……一七九
(二) 神と富……一八一

生命の絶對的價値……一八三
一 神よりの委託物件……一八三
二 アーメンの意義……一八六

(一) 無盡の泉……一八四
(二) 神第一の生活に生きよ……一八四
(三) 人間建築第一、機械文化第二……一八六
(四) 體驗の宗教に生きよ……一八八
(五) 生命は糧にまさる……一八九
(六) 生命は目的、糧は手段……一八九
(七) 神は肉を犧牲にして靈の救を望み給ふ……一九一
(八) 地上に溢るゝ神の愛を感謝せよ……一九三
(九) 一輪の花に學べ……一九五
(十) 健全なる精神は健全なる肉體を生む……一九六
(十一) 神と偕なる生活こそ眞の安心立命の境地である……一九六
(十二) 神の前の一日は罪の千年に勝る……二〇〇

先づ神の國とその義を求めよ……二〇二
(一) 言外の言を直觀せよ……二〇三
(二) 聖靈に導かれて讀め……二〇四
(三) 神へ信從者の特權……二〇五

己が目より先づ梁木を取り除け……二〇八
(一) 聖句は深遠なる哲理の結論……二〇八
(二) 人を審くな……二一〇
(三) 己れを抓つて人の痛さを知れ……二一二
(四) 氣付いた缺點は自分が進んで補充する義務がある……二一三
(五) 善をもて惡に勝て……二一四
(六) 己れの眼の塵を先づ顧みよ……二一五

眞珠を豚に投ぐるな……二一七
(一) 與へる立場に立て……二一七
(二) 神は肉體の救よりも靈魂の救を望み給ふ……二一九
(三) 先づ神の愛を感ずる心を作れ……二二〇
(四) 靈的感受性と信仰……二二三

求めよ、さらば與へられん……二二四
(一) 先づ求めよ……二二四
(二) 求むる者の絶對必要條件……二二五
(三) 求むる心なき者は死者に等し……二二六
(四) 共鳴しつゝ求めよ……二二六
(五) 宇宙は人體、人は血球……二二七
(六) 天は父、地は母、人は子である……二二八
(七) 光は天より、恩寵は神より……二二九
(八) 神は我等に全靈を求め給ふ……二三〇

黄金律……二三三
(一) 靈界 理と科學的原理……二三三
(二) 黄金律と社會生活原理……二三四
(三) 黄金律は何を意味するか……二三五
(四) 黄金律と靈的受話器……二三七
(五) 宗教と道德の根本的相違……二三七
(六) 受くる生活より與ふる生活に一轉せよ……二三九
(七) 黄金律と宗教眞理……二四一
(八) 黄金律と實生活……二四三

狹き門より入れ……二四八
(一) 生命に至る門……二四八
(二) 門とは何か……二四九
(三) 生と死は一つの狹い門である……二五〇
(四) 狹き門より入れ……二五二
(五) 滅亡に至る門は大なり……二五五
(六) 生命の門に入る條件……二五七

その果によりてその樹の善惡を知るべし……二六〇

（一）惡魔の手段……二六〇
（二）判斷の誤りより來る失敗……二六一
（三）その結ぶ果によりて樹の善惡を知るべし……二六二
（四）正しき信仰と迷信との覆破法……二六三
（五）イエスの敎訓と科學的眞理……二六四
（六）眞理は普遍的にして萬人に當一篏る二六六
（七）一個の信者は一個の證人である……二六七
（八）惡き樹は伐られて火に投入れられる二六八

審　判……二七〇

（一）生命界の原理と審判……二七〇
（二）天國に入るべき資格……二七二
（三）宗敎は思索にあらず愛の體驗にあり二七三
（四）神は人の全身全靈を求め給ふ……二七五
（五）富める者の夢……二七五
（六）口讀にあらず、體讀せよ……二七七
（七）宇宙は神の工場、人はその一勞働者二七八
（八）天國入門の三條件……二七九

山上垂訓の價値……二八〇

（一）靈界の公式……二八〇
（二）公式を人生に應用せよ……二八一
（三）靈的數理學の成立……二八二
（四）靈界の合鍵を活用せよ……二八三
（五）言の奥の靈流に觸れよ……二八五
（六）山上垂訓の價値……二八四
（七）イエスこそ天より地に來りし光そのもの……二八六

山上垂訓結論……二八八

（一）山上垂訓と十字架の奥義……二八八
（二）人生を天より鳥瞰せよ……二八九
（三）山上垂訓大觀……二九〇
（四）イエスの言葉こそ神の言……二九五

目　次　終

山上の垂訓

マタイ傳　第五章

イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給へば、弟子たち御許にきたる。イエス口をひらき、教へて言ひたまふ、

「幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。
幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。
幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。
幸福なるかな、義に飢ゑ渇く者。その人は飽くことを得ん。
幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。
幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。
幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。
幸福なるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。我がため

に人、なんぢらを罵り、また責め、詐りて各樣の惡しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。喜び喜べ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし預言者等をも、斯く責めたりき。

汝らは地の鹽なり。鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき。後は用なし外にすてられて人に蹈まるのみ。汝らは世の光なり。山の上にある町は隱るることなし。また燈火をともして升の下におかず、燈臺の上におく。斯て燈火は家にある凡ての物を照すなり。斯のごとく汝らの光を人の前にかがやかせ。これ人の汝らが善き行爲を見て、天に汝らの父を崇めん爲なり。

われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり。誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一畫も廢ることなく、悉く全うせらるべし。この故にもし此等のいと小き誡命の一つをやぶり、且つその如く人に敎ふる者は、天國にて最小き者と稱へられ、之を行ひ、かつ人に敎ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。我なんぢらに告ぐ。汝らの義

學者、パリサイ人に勝らずば、天國に入ること能はず。

古への人に「殺すなかれ、殺す者は審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。然ど我は汝らに告ぐ。すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟に對ひて、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。また痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。故に汝もし供物を祭壇にささぐる時、そこにて兄弟に怨まるる事あるを思ひ出さば、供物を祭壇のまへに遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、供物をささげよ。なんぢを訴ふる者とともに途に在るうちに、早く和解せよ、恐くは、訴ふる者なんぢを審判人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。誠に、なんぢに告ぐ、一厘も殘りなく償はずば、其處をいづること能はじ。

「姦淫するなかれ」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ。すべて色情を懷きて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり。もし右の目なんぢを躓かせば、抉り出して棄てよ。五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられ

ぬは益なり。もし右の手なんぢを躓かせば、切りて棄てよ。五體の一つ亡びて全身ゲヘナに往かぬは益なり。また「妻をいだす者は離縁狀を與ふべし」と云へることあり。されど我は汝らに告ぐ、淫行の故ならで其の妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむるなり。また出されたる女を娶るものは、姦淫を行ふなり。

また古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と云へる事あるを汝らきけり。されど我　汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。地を指して誓ふな。神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髪一筋だに白くし、また黑くし能はねばなり。ただ然り、否否といへ、之に過ぐるは惡より出づるなり。

「目には目を、齒には齒を」と云へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頰をうたば、左をも向けよ。なんぢを訟へて下衣を取らんとする者には、上衣をも取らせよ。人もし汝に一里ゆくことを

強ひなば、共に二里ゆけ、

なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。

「なんぢの隣を愛し、なんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝の仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父はその日を惡しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取稅人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。

第六章

汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。

さらば施濟をなすとき、僞善者が人に崇められんとて會堂や、街にて爲すごとく

己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり、汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手にしらすな。是はその施濟の隱れん爲なり然らば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。

なんぢら祈るとき、僞善者の如くあらざれ。彼らは人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。なんぢは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて隱れたるに在す汝の父に祈れ。されば隱れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思ふなり。さらば彼らに效ふな汝らの父は求めぬ前に、なんぢらの必要なる物を知りたまふ。この故に汝らは斯く祈れ。

天にいます我らの父よ、
願くば、御名の崇められん事を。
御國の來らんことを。

御意の天のごとく、地にも行はれん事を。
我らの日用の糧を今日もあたへ給へ。
我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。
我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ。

汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。もし人を免さずば汝らの父も汝らの過失を免し給はじ。

なんぢら斷食するとき、僞善者のごとく、悲しき面容をすな。彼らは斷食することを人に顯さんとて、その顏色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。なんぢは斷食するとき、頭に油をぬり、顏をあらへ。これ斷食することの人に顯れずして、隱れたるに在す汝の父にあらはれん爲なり。さらば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。

なんぢら己がために財寶を地に積むな、こゝは蟲と銹とが損ひ、盜人うがちて盜むなり。なんぢら己がために財寶を天に積め、かしこは蟲と銹とが損はず、盜人う

がちて盗まぬなり。なんぢの財寶のある所には、なんぢの心もあるべし。身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。人は二人の主に兼事ふること能はず。或はこれを憎み、かれを愛し、或はこれに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事ふること能はず。この故に我なんぢらに告ぐ、何を食ひ、何を飲まんと生命のことを思ひ煩ひ、何を着んと體のことを思ひ煩ふな。生命は糧にまさり、體は衣に勝るならずや。空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に收めず、然るに汝らの天の父は、これを養ひたまふ。汝らは之よりも遙に優るゝ者ならずや。汝らの中たれか思ひ煩ひて身の長一尺を加へ得んや又なにゆゑ衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何して育つか思をへ。勢せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ。榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れらるゝ野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして汝らをや。ああ信仰うすき者よ。さら何を食ひ、何を飲

み、何を著んとて思ひ煩ふな。是みな異邦人の切に求むる所なり。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。まづ神の國と神の義とを求めよ。らば凡てこれらの物は、汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな。明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。

第七章

なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。己がさばく審判にて己もさばかれ己がはかる量にて己も量らるべし。何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや、僞善者よ、まづ己が目より梁木をとり除けさらば明かに見えて兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

聖なる物を犬に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐くは足にて蹈みつけ、向き反りて汝らを嚙みやぶらん。

求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれ

ん。すべて求むる者は得、たづぬる者は見いだし、門をたたく者に開かるゝなり。汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、魚を求めんに蛇を與へんや。然らば汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。

狹き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし、生命にいたる門は狹く、その路は細く、之を見出すもの少し。

僞預言者に心せよ、羊の扮裝して來れども、內は奪ひ掠むる豺狼なり。その果によりて彼らを知るべし。茨より葡萄を、薊より無花果をとる者あらんや。斯く、すべて善き樹は善き果をむすび、善き樹はよき果を結ぶこと能はず。惡しき樹は善き果を結ぶこと能はず。すべて善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投入れらる。然らば、その果によりて彼らを知るべし。我に對ひて主よ主よといふ者、ことごとくは天國に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなふ者のみ、之に入るべし。そ

の日おほくの者、われに對ひて「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、汝の名によりて惡鬼を逐ひいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を爲しゝにあらずや」と言はん。その時われ明白に告げん「われ斷えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我を離れされ」と。

さらば凡て我がこれらの言をききて行ふ者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬へん。雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐の上に建てられたる故なり。すべて我がこれらの言をききて行はぬ者を、沙の上に家を建てたる愚なる人に擬へん。雨ふり流漲り、風ふきて其の家をうてば、倒れてその顚倒はなはだし』

イエスこれらの言を語りをへ給へるとき、群衆その敎に驚きたり。それは學者らの如くならず、權威ある者のごとく敎へ給へる故なり。

山上垂訓序論

聖書は人類にとつて最も古い書物の一つであると同時に最も新しい書物であり、亦永遠の未來に迄人類を導く神の言である。

信仰ある者にとつては。聖書は人の書き誌るした言でなくて、實に言々句々神の言葉であり、神より人への手紙であると信ぜられる。

特に罪に惱む人々にとつては聖書に示された神の言は、げに救の大舟である。

殊に山上の垂訓は聖書中の聖書にして、言々句々委くが靈界の金銀珠玉であり、神の王宮の寶庫が全人類の前に開かれたやうに見える。

山上の垂訓はあらゆる時代、あらゆる民族を永遠に指導すべき天よりの燈明臺である。人生の大海原にあつて狂亂怒濤の中に舵折れ途方に惱む時、暗夜の中に燦然たる一道の光明を舟人に投げかけ彼等に行く手を明示してくれるものがあつたとすれば、それこそ實に此の山上の垂訓の光である。

イエスの福音の結晶であり、神の生命の心臓部は正にこの山上の垂訓であると言つても過言ではあるまい。イエスの説かれた福音の要諦は四福音書に説き盡されてゐるが、その根本義はこの山上垂訓

中に凝縮して、恰も天來の旭光が葉末に宿る一滴の朝露の中に輝くが如く奇しき神の靈光がこの短い垂訓の中に輝いて居る。

世界地圖が全地球の縮圖であり、また星座圖表が宇宙の縮圖であるとするならばこの山上垂訓は正に靈界眞理の縮圖である。故にこの山上垂訓にて啓示されし眞理を實際生活に當て欲めて味へば味ふほど、愈々益々生命の泉は滾々として溢れて盡くる處を知らない。

この山上垂訓はまた地下幾千尺の深所に潜む石油の鑛脈の如きである。一度鶴嘴をハツシと打ち當てゝ伏藏せる寶庫を開くならば、忽ち世界を動かす驚くべき力が大瀧の如く無盡藏にその狹い坑から湯然として噴出して來る、之をその性に應じて巧みに活用すれば恰もガソリンが原動力となつて全世界の飛行機を飛翔せしめ、またあらゆる自動車を疾驅せしめる如く、山上垂訓の中に伏藏せる靈鑛より噴出する靈力はよく全世界に於ける全人類を動かすに足るであらう。

（一）

山上の垂訓に於てイエスは人生の根本意義を宣言なし給ふた。

第一に、地上五十年の生活と天國との關係を八祝福を通して敎へられ、第二に何故に人は地上に生れ來りたるや、人生の目的を彼の有名なる世の光、地の鹽の名句を通して明瞭に訓へられた。更に第三にイエスはこの地上生活の目的を貫徹すべき根本方針を敎へられ、第四に人生の諸問題に對する處世

の大綱を明示なし給ふた、斯くしてイエスは全人類に向つて人生に對する根本的指導原理を短刀直入極めて明快に敎へ給ふたのである。

由來、多くの人々の陷り易い共通の弊害は人生の目的と手段の位置を轉倒し、往々にして手段を目的であるかの如く考へ違ひする一事である。世人の迷の一切はこの錯誤より端を發する。

富も地位も事業も學識もみなこれ人生の目的を完ふすべき一手段たるに過ぎない、然るに世人の多くは何の爲めに生くるやとの人生に於ける根本の目的を打ち忘れて、たゞ手段たる富、名譽、地位にのみ囚へられ、永遠に再び會ひ得ざる地上五十年の人生をあたら惜しくも醉生夢死に終らしめる者の余りにも多すぎるのが現代の實情である。

人生の目的は神の前に絶對價値の生活をなすことである。即ち朽ち果つる肉體を持ち乍ら永遠に朽ち果てざる神と偕なる永生の生活に入ることである。

人生の根本方針は天に神の聖心のなる如く地上に神の聖意の成就せられん爲めである。而してこの處世訓の核心は、形式に囚へられずして一切の事物の奥に流るゝ眞理の光にふれる一事に歸する。人生凡百の諸問題解決の根本原理は見ゆる形式の奥に潜む神の力を洞見して、神の御旨成就の爲めに一日〳〵を永遠より見て價値あらしめることをイエスは多くの實際問題を取扱ひながら懇切に敎へてられる。

イエスは更に進んで、人生が靈的進化の一道場なることを教へ、吾等の思考の方針は常に結果より原因の世界に入るべきを示し、神は外面の行爲よりも内的なる心の狀態を凝視してゐられることを警告し、眞の幸福とは何ぞやとの問題を徹底的に訓戒されてゐる。

（二）

イエスは先づ山上垂訓の始めに當り第一に「人生とは何ぞや」との問題を快刀亂麻を斷つ如く明快に解決し、第二に神と人との關係を說き、「宗教とは何ぞや」の問題を敎へ、天の父なる神の愛を說き、祈を敎へ、罪を敎へ且つ救の道を極めて明確に指し示してゐ給ふ。而して第三に救はれたる者の社會生活に說き及ぼし、實際に於ける日常生活と衣食住の經濟問題と信仰生活の一如を野の百合、空の鳥の譬喩をもて說き明かされ、玆に實に深い〳〵眞理を吾等の前に垂訓しておられるのである

最後にイエスは處世の黃金律と生命界の眞理を示して所論を結ばれ、なほ進んで死後の審判、天國と地獄について權威をもて吾等に臨み、永遠の生命に至る根本道を明示しておられる。

（三）

現代日本の外形的形式たる法律制度文物は一通り整つた。然しながら世人は制度文物の外形的形式に拘泥してその根本精神を忘れてゐるのが現代人の陷れる通弊である。容器は既に完成した。然しながら盛らるべき生命の水は空虛である。住むべき家は落成した。然しながら、その家に住むべき主人公

は今や假死の狀態にある。空家の文化、夢死の人生は、如何に物質文化が完備しても、その價値は零である。形骸の佛は出來た。今やたゞ活ける靈魂の注入を待つのみである、

生命の注射に勝りて現代日本の救に急務なるはない。然り、而してイエスの山上垂訓は正に吾が國民にとりては生命の熱血を注入すべき一本の注射器である。天來のこの靈的注射を心を開いて受け入れる者のみがよくも懊惱と迷妄とより解き放たれ、罪の滅亡より永生へと救ひ上げられる。

「世の與ふる水を飲む者はまた渴かん、されど吾が與ふる水を飲む者は永遠に渴くことなく、汝の腹より活ける水となりて湧き溢るべし」とイエスは叫ばれた。こは實に眞實間違のなき日每の體驗である。

願くは、吾が愛する八千萬の同胞の一人〳〵がイエスに來つて滾々と溢れて盡きぬ靈泉に汲み、死の影にさ迷ふ物質苦の懊惱より驟然として甦生せられん事を切望して止まぬ。

山上垂訓環境

（一）

山上垂訓は山紫水明なるガリラヤ湖畔に於て二千年の昔イエスが山上の巖角に腰打ちおろして眼下

に美しき湖面を見おろしながら數千人の群集を前にして述べられた天來の神の福音である。仰げば雪を頂くヘルモン山は高く雲表に聳へ、眺せば鏡の如きガリラヤ湖は千古の碧を湛へて神祕の靈響を岸打つ波に通はせてゐる。

當時のユダヤ人は羅馬の虐政に耐へ兼ね、極度の彈壓と暴虐より脱せん事をのみ全國民は熒望してゐた。彼等の唯一の願望は物質的貧苦より救はれ、精神的自由境を見出さんことであつた。

斯かる群集をイエスは靜かに見守りつゝ暫くは口を喊して沈默の中に時は過ぎた。群集の瞳は一齊にイエスに集中される。イエスは群集の心が異狀なる緊張と統一の下に靜まり返るのを待つて、靜かに口を啓きて一言、また一言敎へ始め給ふた。「心の貧しき者は幸福なり、天國はその人のものなればなり」と。

（二）

こゝに山上垂訓の記者なるマタイは特別に「イエスロを開きて敎へて言ひ給ふ」と書きしるしてある。この一句を見てもイエスが口を開いて敎へ給ふ前に嚴肅なる沈默の數刻のあつたことが親はれる。また同時にイエスは平生言葉のみにあらずして無言の行爲をもて敎訓してゐ給ふた事をも推知しうるのである。イエスの敎は實に單なる理論の宗敎にあらずして、實行の宗敎である。バプテスマのヨハネが「この人を見よ」と叫び、またイエス自らが「來つて見よ」と叫び給ふたのを見ても、如何にイエ

スの宗敎が一片の理論にあらずして、實行と體驗の宗敎であつたかをよくも暗示してゐるではないか。

然も開口一番イエスは『幸福なる哉〳〵』と幸福なる哉を繰り返すこと八回に及び、天國に入るべき夫々の八條件を敎へられたことを見ても、如何に彼が全人類を祝福せんとの一念に燃えてゐたかを窺ひ知られる。

この全人類に對する彼の祝福の言葉により、人生目的の根本義が如何にもよく明瞭に示されてゐると思はれる。

天國の八憲法（八祝福）とは即ち左の八條件である。

（一）幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。

（二）幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。

（三）幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。

（四）幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者。その人は飽くことを得ん。

（五）幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。

（六）幸福なるかな、心の淸き者。その人は神を見ん。

（七）幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。

（八）幸福なるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。

以上の八祝福は所謂天國の八憲法と稱せられる有名なる教訓にして、人間が人生の目的を完うして天國に入る爲めには是非とも遵守せねばならぬ大切なる條件である。

然るに、こゝ八條件を見るとき常識的判斷にては一見矛盾に見ゆる事柄が甚だ多い。

こゝにこそ、イエスの說敎の幽玄にして意味深遠なる妙味が存するのであつて、所謂有名なる逆理がこゝに成立する處である。

イエスの說敎には非常に逆理が多い。地上を標準として見たる人生觀と更に視點を逆轉して天なる神の御座より地上を見おろしたる人生觀との間に天地の差を生ずるのは理の當然である。斯くして逆理の成立するに何の不思議もないことである。

迷妄の中に住む人々は自已を中心とし、また物質生活をのみ中心とする。然しながら、信仰に生くる人は神を中心とし、靈的生活を中樞軸として物質的生活を靈的生活の手段として活用する處に彼と此との間に根本的見方の相違がある。神中心の生活を基本としての考察方法が完全に悟入し得られたる時、その時こそこの八祝福の中に存する逆理の一切が釋然氷解し得たる時である。更にこの逆理の中に潛在せる眞理の實在性を確實に把握し得るならば、その一事が山上垂訓全部の背後に横はる靈界の眞理を明瞭に照してくれる大なる光を發見し得たる時である。

心の貧しき者は幸福なり

（一）幼兒の心

「心の貧しさ」をイエスは天國に入るべき第一條件となした。こゝには深い〳〵眞理がある。ある一人の高慢な青年が或る時高德の禪僧を訪ねて敎を乞ふた。然しこの青年は自已の智識に誇り、機會あらば難問題を吹き掛けて禪僧を詰問せんと企てゝゐた。禪僧は青年を一目見るやその心中をすつかり察して了つた。そこで先づ座蒲團を勸め、御茶を饗てなした。青年が茶碗を取り擧げて茶を半分も啜らぬ中に、僧は『サアおあがりなさい』と再び注ぎ入れた。追ひ掛け〳〵茶を注ぎ入れるので、青年は『まだ茶はあります。そう注ぎ込まれては溢れます』といつた。そのとき禪僧は一喝して『汝の心亦如此。汝須く心を空虛にして來れ』と叱つたといふことである。心を空虛にしなければ、どんな尊い話でも受け入れられるものではない。古い思想、古い罪を盛つた心では新しい福音、新しい恩寵の注ぎ込まるべき餘地はない。須らく虛心にして來れである。イエスが、その深奧な眞理を說く前に、第一に『心の貧しき者』と提唱された點に、甚深の妙味がある。この心の貧しき者、言ひ換へれば、虛心恒懷、些の邪念妄想なき、天眞爛漫の稚兒の心持になつて信仰を求めなければ、宇宙の大生命は吾が所有とはならぬのである。大いに反省すべきことではないか。

天國入門の八條件中の第一に位する『心の貧しき者は幸福なり、天國はその人のものなればなり』との一句の意味を徹底的に味得しうるならば、他の七つの祝福の意味もおのづから容易に解けてくる。

代數に於ては第一の方程式の答を求めるに成功すれば、次の式の答をも知ることが出來る。またその後から續いて來る問題を解く鍵ともなるのである。この第一句は山上垂訓の寶庫の全部を開くには最も重要なる第一の鍵である。新しい天來の清水をコップに注ぎ入れるには、舊い水を捨てゝ置かねばならぬ。山上に押し寄せて來た群集の心には、舊い腐つた樣なものを詰め込んでおつたに相違ない。イエスの新しき福音を受け入れるには、先づ各自の心を空虛にせよ、古き一切のものを拋擲して、無一物となつて來れと、民衆の急處を衝かれたのである。心高ぶり傲慢なる自己中心の人は永久に神を發見する事の困難なること恰も目蔽を取り除かずしては天の星の光を發見し得ぬのと同じ[illegible]

（二） 人の心は天與の眞空管である

『心の貧しきものは幸福なり』とは眞理であるが、我々は眞理を知らんとする時には、その反對を考へると分り易い場合が多い、心の貧しき反對は何であるか。心の傲慢、自己中心主義である。心傲りて天國に入り得る資格ありや。

更に靈界の眞理は、自然現象に就いて一考し自己を反省すると明瞭になつて來る場合が多い。人の心には不純な多くの分子を殘す。けれども自然程神の心が卒直に現はれてゐるものはない。自然の裡に事實の眞實相を發見するならば、それが眞理への道であることを知るであらう。『心の貧しき』とは心の眞空狀態をいふ。赤貧でも尙ほ一物を有するかもしれぬが、眞空には何物もない。

人の心は一つの眞空管である。人は人生と云ふ一つの研究室內に於て振らるゝ一個の試驗管である。管中に貧困、病苦、失望の苦き藥品を盛られて、赤熱の上に翳され、誤解、迫害の中に置かれる。若しそのときに心の試驗管が眞空狀態を保つならば、如何なる光が現はれて來るであらうか。

黃金萬能論者は、金錢を無上の寶とするが、世には金錢にて購ひ難き多くの寶がある。キリストは人一人の靈と全世界の富とを比較し給ふて、前者は遙かに後者よりも貴いと仰せられた。

ラヂウム放射能の發見及クルツクスの眞空管の現象は、遂に物質觀の革命を起し、見ゆる一切の物質は凡て電子といふ力の集團であるといふことになり、物質の自然觀を根本より覆した。我々は明治大正の物欲に滿たされた社會の中にあつて朧ろ氣ながら神の光を仰がんとして努力して來た。然しなほ雲を隔てゝ月を觀る如きではないか。

（三） クルツクスの眞空管放電に學べ

此際物質の根源を鮮明ならしめたクルツクスの眞空管を用ひた研究法を我々の心の中にも應用して見たい。眞空內に起つた電氣の放電が電子の本質を敎へて吳れ、宇宙の最も深遠なる眞理の眞髓を發見することが出來た。玆である！　人生の眞相に觸るゝにも亦心を眞空狀態にする必要がある。

イエスは仰せられた『我れは眞理なり』と、自ら眞空狀態の實驗をなし、イエスの靈的體驗を味ひ得るならば、おのづから眞理を握りうる筈である。そこに滾々として汲めども盡きざる生命の泉を見出す。

聖書は一つの電子論である。四十五年前クルツクスが暗室内にて電子を實驗せし如く、キリストの眞理を體驗せんと欲せば、他なし。吾れ自ら眞空狀態となる事である。心を眞空となさずしてキリストの言葉を聞くとも馬耳東風、豚に眞珠である。心を眞空にせずしては、神よりの靈的ラヂオの放送の聲を聞き取ることは不可能である。心を空しくせぬ傲慢なる者は神を見るべき資格を失ふ。

心の中にある一切の物欲を棄てよ、而して一切の汚れと疊りを拭ひ、全く心の眞空狀態となつて、然る後イエスの言を聽くべきである。心を貧しくせよとは此の事ではないか。『さらば天國は汝のものだ』とイエスは仰せられる。天國に來れといふのではない。天國その物が汝のものだといふのである。富や地位がその人のものと云ふのでない。天國その物が與へられると約束し給ふのである。何と云ふ有難いことではないか、心の眞空なる人にし[illegible]神人合一の境に住むことが出來る、是れ宗教最高、最深の眞理である。

（四） 人はラヂオの受話器である

近頃盛んになつた無電放送も、遠方から聞くためには、眞空管の受話機で聞かなければならぬ。この眞空管に故障があつては、何事も聞き取ることが出來ない。若し我々の心中に不遜、驕慢、利己等の塵があるならば、眞空管の作用を妨げられ受話器の用をなさぬ。天よりの靈波が幾度その人の胸をうつても、これを聽くことが出來ない。

（五） 傲慢不遜は天國の寶を蔽ひ隱す石である

サンダーシングの著書の中に面白い話しがある。或印度の町に於て、市民が怠慢で困るので、國王が一策を案じ市中の最も繁華なる地點の辻の中央を擇び、其處に往來の邪魔になる程の大きな石を轟かしめた。王の考では、此邪魔石を町の者の誰か一人位、義俠的に取り除くであらうとの下心からであつた。然るに王の計畫は裏切られて、誰一人これに觸れる者もなく、皆其石の左右を通り拔けて終に手を下してこれを取除ける者は一人もなかつた。王は止むなく、その石を臣下に命じて取り除かせた。處が、その石の下から寶の一杯滿ちた箱が出た。そしてその上に「此の寶玉は此石を取除いた者に與へん」と記してあつた。町の者共は是を見て、いたく後悔したが、追つかなかつたといふ話しがある。

これと同時に、我らの心の中に大いなる石が横たへられてゐる。この下には全世界の富にも優る寶が置かれて、石を取り除くものに與へられると約束されてゐる。而も、これを知らずして、取り除かずに左右を通りぬけてゐる場合が多い。傲慢といふ石、不信といふ石、物欲といふ石、これは取除かねばならぬ大きな石である。一切の邪魔物を取り除いて、貧しき心になるとき、そこに天國の寶を見出すことが出來る。この眞理をイエスは開口一番、敎へられたのである。

（六） 天國の扉を開く鍵

この短かい初めの一句の中に天國その物の扉を開く極めて大切な鍵が潜んでゐる。またこの一句は聖書全卷の教の秘義を開くべき重要な第一の鍵である。

若しこの一句の眞意が體讀出來ないで、横道にそれたならば、丁度登山者が山麓の入口で迷路に踏み込んだと同樣、遂に神の宮に達することは永久に出來ないであろう。之と反對に幸福にもこの一句を眞に體得し得るに至らば、恰も完全な眞空球のラヂオ受話機の所持者の如く、天より放送し給ふ神の靈話を直接に聞き得るに至り、宗教上の最深とする見神の實驗を明確ならしめ得るであろう。

更にそれのみでない。クルツクスが眞空管中の放電に依つて、宇宙の物質その物の本質の闡明を可能ならしめた如くに、靈的眞空放電の實驗者は、遂に人間に投げかけられた最大問題である靈の本質をも闡明すべき秘密の鍵がこの一句に依り授けられることが豫想され得る。

實に聖書と云ふ書物は不思議な書である。始めは矛盾と無價値に見えたものが、味へば味ふほど、體驗が積めば積むほど、眞理と生命とに滿ち滿ちた、實に驚くべき神秘の泉である事が分つて來る。「心の貧しき者は幸福なり、天國はその人のものなればなり」と。この一句は實に神の國全體を窺ふべき望遠鏡の眼鏡(アイグラス)である。この一句さへ良く視つめて、祈の靈をもて導かれて行けば聖書全體が理解されて來ることは必定である、先づ初めの第一歩に甚深の注意を拂はねばならぬ。

悲しむ者は幸福なり

(一) 人は何故に悲しみの心が生ずるか

『幸福なる哉悲しむ者、その人は慰められん』人は悲しむ時に不幸を感ずる。然るにキリストは悲しむ時に、幸ひであると云はれる。我々は此の教の内に深き眞理を見出し、それによつて人生の奥義をも知る事が出來る。此眞理を知らざる故人生の皮相のみを見て僅かの苦痛に出遭ふても歎き悲しむのである。

元來日本人は哲學的乃至宗教的方面に深き思索を進める性質をもつた國民である。この點では歐米人より遙に優つてゐる。或人は世界中で日本人は最も宗教的な國民であるといつた。或はさうかもしれない。それにも拘はらず、現代の日本人の思想は、餘りに皮相でキリストの教をさへ解し得ぬようになつてゐる。私はこの悲しむ者は幸福なりとの言を科學的の立場から、人は何故に悲みの心を起すかとの問題を考察してみ度いと思ふ。

(二) 人は常に何物かの欲求にかられて動く

御互は人生に處して誰でも欲求をもつてゐる。欲求なしに生活する者は無い。必ず何等かの望みを

有してゐる。その欲求が人を狩り立てゝそこに毎日の生活が起つて來るのである。人は四六時中何物をか求め、夢にさへこれを見る。一切の人生問題は此欲求より生れ來るのである、此欲求なしとせば、その生活は死そのものである。

人の欲求は千差萬別である。同一人にしても毎日求むる處には變化がある、否欲求は刻々に變つて行く。然るに、その千差萬別の願、又時々刻々の願の變化も一度その奥に入り、これを科學的に觀察するならば、そこに不動不變の共通點のある事を見出すのである。

（三） 三種類の欲求の中に人は生く

私はこれを、左の三種に分類して見たい。

一、自己保存。二、自己擴張。三、自由獲得。以上の三つである。

自己保存とは、卑近なる例で云へば、衣食住の問題の如きもそれである。此欲求が原動力となつて、人生の三分の一を支配する。第二の自己擴張は、他を征服しても自己の範圍を擴張せんとする名譽利達の如きものである。子孫の繁殖もさうである。即ち、生物學的の擴張である。一は空間的擴張、二は時間的擴張である。即ち所と時とに對する一種の欲求である。而して第三は我らが如何に衣食足り、地位權勢を得るとも眞の自由なくしては生活は爲し得ない。そこで自由を求める。金殿玉樓に住み、出入馬車に駕するとも、自由なくしては滿足し得ない。米國人の絶叫した、「自由を與へよ、然

らずんば死を與へよ」といふのは即ちこれである。現今の勞働問題、廢娼問題、思想問題の如きは歸する所皆此の「自由」の欲求である。

却説、第一第二の欲求は、動植物と雖も有してゐる所のものである。唯第三の欲求に至つては獨り人類にのみ最も著しく表はされてゐる。植物でも多少は自由の欲求はある。地球引力に逆つて天に天に伸びんとしてゐる。

自由とは何乎。これ靈的欲求である。第一、第二は肉的欲求である。以上三つの欲求から人生凡百の事實が現はれて來るのである。此の欲求は、求め求めて其底止する處を知らない無限の要求である。一蜀を得て隴を望む」は人の本性であらう。我々は有限のものを棄て、無限の物を得たいと欲求する。これ宗教心の起る所以である。物慾、性慾、名譽利達は有限である。これら有限の物はその度多きに過ぐれば忽ち其身を傷ふ。食も過ぐれば腹痛を起し却つて生命を絶つ事がある。

（四） 悲しみの起る原因

抑々人は物欲以上に靈的の欲求があり、無限に無限にと伸びん事を欲するのである。此要求が一度挫折するや、大いに失望する。青雲の志を懷いて中途に、是れを棄てるのは大なる苦痛である。その反對に、多くの苦痛伴ふとも伸び得る事のためには忍ぶ事が出來る。伸びんことを望んで立つは幸福である。將來に大に伸びんがためには、これまでの物を斷ち切り、古きものを捨て去つて進まねば

ならぬ。その爲には自己の不甲斐なさに泣き、世の罪を悲しみ、自分の靈魂の罪に泣き悲しまんければ、心の中から罪を悔ひ改め舊き醜惡な關係から斷然絶ち切れるものでない。この場合には悲しむ心の強く深ければ深いほど、完全に罪から救ひ出される。實に悲しむ心を與へられてゐることが、げに〳〵何と云ふ幸福なことであるか分らぬと私はつく〳〵敎へられる。

此の眞理が解つてくると、始めてキリストの「幸福なるかな悲しむもの」と仰せられた言葉が、なるほどと首肯されるではないか。

（五） 刺戟は生命へのバンである

生物學に於いて生命が伸びるために、最も必要なる條件は刺戟である。刺戟は輕度に與へらるれば快感となるが、過大となれば苦痛艱難となる。艱難は人を玉成する。

草木の生長に最も必要なものは光線の刺戟である。生命の存する處には、必ずや、外界に順應すべき內的力がいつでも潜むでゐる。外界の刺戟に感ずることなくして生長はなし得ない。例へばピラミットの墓下に王のミイラと共に埋められた麥粒は幾千年の間地下に葬られてゐた。然るにこの麥粒を溫室に移し、光線に當て、水を注ぐとき生氣ある芽生えが出たといふ。これは學者の實驗したる事實である。如何に罪のどん底に沈む人でも、愛の光と熱に依つて始めて誕生し、新生の歡喜に入り得る希望をつなぎ得るではないか。

熱帶地方の強い光線は大なる苦痛であり、草花はその爲に燒かれて枯死する。けれども、若しも草花の內部にその強い光線の刺戟に順應してなほも餘裕ある水分が備へられてゐるならば、熱帶の植物は寒帶では夢想だに出來ない發達を遂げる。內的に順應する力さへ用意されてゐるならば、枯死せしめられるかと悲しんだ強い熱帶の炎暑が却つて大なる天與の恩寵として感謝して受け入れられるではないか。內的に信仰の力を持つものには、一切の悲が大たる恩寵と化する眞理を玆に學び得るこはないか。」

（六） 悲しみを感じ得ざる生活は死である

我々が何かの悲しみに遭遇するのは變化のあるときである。最も大なる悲は、最も愛する者を奪はれた時である。私はこれを自分の小供の死に就いて味はされた。けれども、其眞相を探る時に、恰もそれは太陽の光線や、雨露や雪その他四季の變化の時の如くに、かくしていつも忘れ易かつた大きな神の恩寵を發見し得る道となるのである。假りに此世より一切の悲しみを取り去つたとすれば、その結果は果してどうなるであらう乎。人類の生活は恐らく停止して了ふであらう。先に述べしピラミットの麥の如く三千年を經るとも何の進歩も發達も見られぬに違ひない。恰も昏睡狀態である。悲しみを感じ得ない生活、それは死に等しい。

玆に至つて始めて、イエスの「幸福なる哉悲しめるもの」といふ事がわかつてくるのである。

（七） 悲しみ得るものは幸福なり

御互が惡を行ふ。其結果は當然その罪に泣く、而して苦しむ。此罪の苦痛、悔改めの念を有する人は幸である。惡るい事をなして悲しまぬ人は救濟の見込みはない。御互はもつと、もつと罪に泣き、自分の不明を悲しむものとなりたい。

昔、水戸黄門の時代に、實母を殺害して刑吏に捕へられた者がその事を罪惡と氣附かず「他人の母を殺したならば罪はあらうが、自分の母を殺したのに何の罪があるか」といつて罪に服せなかつた。そこで黄門は儒者に命じて彼れに經書を三年間敎へしめた。遂に彼は豁然と悟り、その罪を悲しんで自ら願ひ出て服罪したといふ逸話がある。

罪を犯して罪の觀念なき者は、眞に憐む可き者である。これでは動物と何の選ぶ所がない。罪を悔い罪に泣くは大いなる人間の特權であると言はねばならぬ。

天の父は、地上の人が罪を自覺し、悔改めの祈りを捧ぐる時、如何に喜び給ふであらうか、どんなに慰めの手をのばして呉れる事であらうか。『幸なるかな悲しむもの、その人は慰められん』である。

（八） 愛の神は全人類が眞に悔改むるまで愛の鞭をあて給ふ

愛の神は、我々の靈を醒まさんとして、屢々大なる針を刺し入れて注射を行ひ給ふ。舊譯聖書の到る處にこの事實を見出す。近くは大正十二年の大震災もその一であつた。この際國民が、眞になげき

しみ悔ひて立ち上らないならば、愛の神は全國民が胸を打つて眞に悔ひ改むるまで、天の火を續いて降らしめ給ふであろう。恬として悔ゆる處なく、迷夢より覺めず、罪に罪を重ぬる者は、實に、災いなるかな。

自ら裡に省み、悲しみ、眼醒め、永遠の光を望みて進む者は幸福である。そこに生命の躍動がある。春の草木の育つ如く、人の心も伸び、そこより芳しき人生の花は開き、生命の果を結ぶ事が出來る。我々は自己のもてる罪に泣き、その罪より如何にしても遁がれんかと、もつと、もつと悲しみ、更に民族全體の爲に愈々深く悲しむものとなりたい。孔子は「君子は人に先んじて世を憂ひ、人に後れて樂しむ」といつてゐるではないか。自己のためのみならず、世の救のために悲しんでこそ、眞の幸福は得られるのである。人の憂を我憂とする人こそ、眞の憂國の志士と云ふべきではないか。

（九） 悲しみ得ざる人は狂人である

電氣の種々のメーターや溫度をはかる寒暖計がその使命を果すは、夫々感應度があるからである。然もその感度の鋭敏なるを以つて第一とする。若し感應度がなくなれば棄てられる丈である。人に若し不正、不義等に對して悲しむ心がなくなれば、人の價値は零になる。計量器にしろ、寒暖計にしろ見えぬものを見ゆるやうにするのが使命である。人の使命も見えぬ世界をよりよく正確に示す所にあると言へる。心に悲しむ事の出來なくなつた人は、メーターのこわれて針の動かなくなつたと同樣で

ある、ブロークン、ハート（Broken heart）の人を狂人といふが、こは心のメーターの狂へることを云ふ。罪を犯して悲しまぬものは、一種のブロークンハートの狂人である。

（十）悲しむ者の特權と勝利

ほんとうに神の前に足らぬ所を泣き求むる人は、ほんとうに神の心に入りうる人である、若し神を見うる人ありとせば、そはこの人である。

そこで大なる悲觀は、大なる樂觀になるのである。悲しみなくして、慰めも歡びもない。悲しむこと、苦痛を感ずるといふ事は、地上にありて人間に開かれた唯一つの天國への道である。一切の喜びはこの苦しみ悲しみを入口として入ることが出來るのである。詩編第百二十六篇に、ダビデがその氣分を歌つて「涙と共に播くものは歡喜と共に穫りとらん、その人は種子をたづさへ、涙を流して出で行けど、禾束をたづさへ、喜びて歸り來らん」といつてゐる。百姓が涙と共に粒々辛苦して育てあげてこそ、垂穂の稻を感謝もて刈り取りうるのである。

ジョン、バンヤンが十幾年間かの牢獄生活中に「天路歷程」を書いたが、その中の「愚龍あふるる記」の序文に「子供達よ、ほんとうの人生の喜びは苦の中に得られるのである。例へば一度かみつかれた獅子の恐ろしい口中から遁れ出て、後にそのときを顧みた時、獅子の口の中になんとも言へぬ他で得られぬ甘い露が滴つてゐたことを思ひ出すでせう、それと同じである」といつてゐるが、この事實を

私共は始終經驗するのである。ローマ書に於て「今のしばらくの苦しみは、後に來るべき榮光に比すべくもあらず」とパウロもいつてゐるのもそれを言ふのである。

（十一）苦難は神の授け給ふ尊い學課である

悲しみや苦しみは、神が人に授けらるゝ學科である。生徒が學課によつて力づく如く悲しみの試驗に及第してこそ、主の御許に近づく事が出來るのである。この喜びに到る道がそなへられてゐるにかゝはらず、この道から逃げ去らんとする自らの愚さが、ほんとに恥しくなる。悲しみを不幸として迎へるのでは斷じてない。愛なる神樣からの天與の學課として喜んで受け入れるものとなりたい。

本間先生は「苦しみや悲しみは神樣が自分丈に下さる賜物である」といつてをられるが、先生の像い所はこゝにある。時々私にも「佐藤さん、幸福は神の前に大きな月謝を出さねば得られぬよ」と言はれるが、眞實そうであると共鳴せずにはおられない。謙虛の心になることを第一とし自ら罪に悲しみ、世の罪を歎き、只に自らの救のみならず、世の救のために立ち上り、愛國の志士となる事がほんとうの人生を最も有價値に送るべき道であることを忘れてはならぬ。我ら常に深く自らを省み、現在だに足らざるを悲しみ光より光に進むものとなり、更に、更に、深刻に自分の罪に泣き、世の罪の爲に神樣の前に泣き悲しんで、訴へるものとさせて頂きたいものである

天國の八憲法

（一）地上の幸福と天國の幸福

山上の垂訓の始めに八つの幸福が教へられてゐる。我々は地につける幸福の數々を知つてゐる。而して之を求めようとして焦心するのである。富を得んために寢食を忘れ、激しては人を斃すのもこれがためである。地位名譽を得んとしてあらゆる犧牲を拂つて奮鬪努力するのもこれがためである。けれども生活難就職難は、益々加はり、失望、困憊、悲哀、遂に人生の行き詰りを來すのが常である。

私共はこの事實を幾度か體驗し承知したが、こうした苦き經驗も、其奥に更に深き神の御言を伺ふことが出來る。こゝに山上の垂訓當初の八つの幸福を見出すのである。成程、地上の名譽榮達は、これ又天國の喜びをうる一つの門である。ジョンバンヤンは其著『天路歷程』に書いてゐる。天國には門がある。人家にも、寺院にも門がある。「柴の折戸を開いてその中に入れば庭は廣い、天國を仰ぎ見ることが出來る」我々は地上の幸福を否定するものではない。地上の幸福も亦固より神の祝福であつて、感謝して享くべきである。乍併本を忘れて末に走り、度を逸して自己の滿足をのみ追ひ求めて軌道を外す事を恐れる。地上の幸福が幸福の一切ではない。人はその奥に潜む幸福の泉に浴せざる限り

心の渴きは滿たすことは出來ない。人生眞の幸福は何か。其惠みは何乎。問題は此處に落ちつく。

（二）光の焦點と宗教の眞理

此點に就いては古來の哲人が久しく考へ來つた事である。佛教儒教の中にも大いなる眞理と生命がある。乍然眞の天國の喜びそのものは、恰も光が空間に滿つる時は擴散されて、光そのものゝ眞價を認め難ねる如く、天國の喜びも見遁し易い場合が多い。太陽の光はレンズを通して一點に集むれば紙を燒き金屬をも熔かす力をあらはすことが明らかに認められる。哲人の教乃至佛教にも光はある。併し焦點の合はぬレンズではその大なる力を發揮することは出來ない。窮屈も煩悩が合はなければ偉は出來ない。幸福の焦點を我々の心の中に注ぎ込むものは、この山上の垂訓の八つの幸福のレンズの組合せである。この八つのレンズを通して初めて神の光それ自身を見ることが出來る。

望遠鏡の玉一つでも肉眼で見えぬ天體を見ることが出來る。然し、より高いより遠い天體は見ることは出來ぬ。世界第一の稱ある米國のウイルソン山天文臺に百インチの望遠鏡があるが、之れには幾枚かのレンズが組合はされてある。これらの幾枚かのレンズを調節すると、肉眼でもまた一二枚のレンズ丈でも見えぬ天體が明瞭に見えてくる。

キリストは八つのレンズを私共に與へて天國の幸福の眞の姿を見せてくれるのである。

（三）天國の八憲法

八つの幸福の條件は卽ち天國の八憲法である。その中の一つにても缺くならば、我らは天國に入る資格を失ふのである。この八つの憲法を解せずして聖書の意味はわからぬ、眞の幸福を握ることは出來ないのみか、神樣よりの幸福をうくることも出來なければ、亦人生の幸福を眞に味ふことも出來ない。

私共はこれまで二つのレンズから光をうけて來た、從つて天國を四分の一丈知ることが出來たわけである。又天國の憲法を四分の一丈知ることが出來た。尙も進んで未知の姿を與へられたレンズを通して求めて行き度い。

柔和なる者は幸福なり

（一） 眞の柔和なる姿

「幸福なるかな柔和なる者、その人は地を嗣がん」。柔和とは他の意味で曰へば堅くなでない、自然のまゝといふ事である。天體の運行の如く圓滑に廻轉してゐる狀態を謂ふ。宇宙の法則のまゝに無理なく運行せる大自然の姿が柔和そのものである。庭の草木が太陽の光めがけて伸びて行く、これも柔和なる姿である。自然の姿、これ柔和である。

水が高きより自然のまゝに低きにつく姿は柔和そのものである。細い所では細く流れ、廣い所では

廣く流れ、丸き器にありては丸くなり、四角の器に盛られては四角になる。こゝに水の柔和な姿を見出す。自分の堅くなゝ心のまゝでない大自然の神の道のまゝに自己を改造し、神に從つて行く、之れ眞の柔和である。

自らの心をなすにあらず、御旨のまゝになさせ給へと祈つたイエスのゲツセマネの園に於ける祈禱はこの柔和なる姿である。神を信じその御旨に從ふ信仰生活、これは柔和なる人の姿である。我々は水の如く柔和でありたい、イエスのゲツセマネの祈禱が我々の心の祈禱であり度い。

（二） 水の如く謙遜柔和にして萬物の母となれ

葉末に結ぶ露の一滴が、大地の引力に引かれて地に落ち、木の葉の下をくゞりくゞつて下へ下へと流れて行く。然も人の見えぬ地下にまでも貫き行く。これは決して卑屈な姿ではない。軈て萬物に生命を與へ、凡ての草木はこれによつてその生命を支へ、動物は渴きを醫やしてゐる。水は低きについて然も萬物の母たる尊い務めを果してゐる。

東洋に於ては古來「水は万圓の器に從ひ、人は交る友による」とて水の姿の中に環境による心の變化の敎訓を見出した。またギリシヤ哲學の鼻祖、タレスは水は萬物の根源であるとて天地生成の哲理を考察した。然し、今私共は水に於て眞の愛の姿を發見することが出來る。生きとし生ける者水なくしては一刻もその生命を保つことが出來ない。水は實に生命の恩人である。自らを他に與へて他を生

かしめる。これより大なる愛はあるまい。柔和なるものとはこの水の生涯を云ふのである。イエスの生涯はこの生活であつた。「我來りしは、人を使はんためにあらで、使はれんためなり」とは眞の柔和な姿そのものではないか。

（三） 眞の偉大な人物とは誰か

幾回も大英帝國の首相になつたロイドジョージも斯く言つてゐる。「眞に偉大な人物とはナポレオン、シーザーの如く天下に覇を唱へるものでない。またロックフェーラーやカーネギーの如く巨億の富者になることでもない。人々は自分のことを英國の首相に幾回なつたから偉いと言ふ人もあるがそれは誤つてゐる。眞の偉大さと云ふものは如何に神と人とに愛の奉仕を完ふしたか、その愛の奉仕の度合で定まるものだ」と言つてゐる。明言ではないか。柔和にして神の愛に生くる人物の偉大さを眞に發見し得るではないか。「柔和なる者その人は地を嗣がん」とは實にこの眞理をあらはしてゐるのである。

（四） 神と偕に歩む生活、これ最も柔和な人である

宇宙、自然、草木、森羅萬象が大調和のうちに柔和な姿をあらはしてゐるに、人のみ何故にかくもかたくなにして　自己中心と自己冒瀆の罪の生活をいつ迄も續けてよいものであらうか。

一滴の水でさへ萬物の下に謙り下りつゝ、萬物を生かしめる力の泉となつてゐるではないか。萬物

の靈長として宇宙大生命の水の一滴たるべき人の子は、愈々その特性を抜きん出でて宇宙萬象一切の生命の大道に立ち返り、水の如く神の生命の本流のまゝに從つて偕に流れ流れて進みたい。神の心を心となし我心をなさせ給へとにあらず、神の心をなさせ給へとの祈りの生涯に入りたいものである。これが人にゆるされたる最高最貴の道ではないか。

人間一個は宇宙の縮圖である。肉體の微妙な調和、內臟器官各自が全體のために働き、各細胞が心の命のまゝに極めて素直に、柔和に從つてゐるではないか。然るに人の心のみ、などて神に調和した柔和な心になれぬのであらうか。神に從はず、反逆の行爲をなすが故に困苦と重荷が、不安と失望とを招くのである。

大自然の中に一緒になつて働く處に肉體の安定がある、神の中に一緒になつて働く處に心の安定がある。神と共に歩む生活、これ程自然な歩みはない、これ程柔和な姿はあるまい。そこに永遠の生命が來る。神はそのものを祝福して神の造りたまふ凡てのものを支配する權を與へたまふ。その人こそ眞に幸福なめぐまれた人ではないか。

（五） 眞の愛は神に從ふ心より湧く

心が柔和になつて神の御心に從ふことが出來ると、その結果として人を愛する心、惡に對する戰ふ力が湧然として起るのである。

この柔和な心があるから義に飢え渇く如く神の正義を慕ふのである。道を外したものを神に歸さんとする愛と忍耐の力が起るのである。イエスは、幼兒の如くならずんば天國に入る能はずといつてゐるが、柔和な幼兒の心それは神を信じ神に從ふ心である。斯くして責められるときにも、責めるものゝ心を思ひやる心が起り來るのである。ありのまゝの姿、幼兒の如き心、神に從ふ心、神と共なる生活、これ柔和なる者の姿にして、このものこそ地を嗣ぐ權を與へらるゝにふさはしいのである。義と愛との生活へと全人類を導くこと、これはこの柔和なるものゝ進む方向ではないか。

幸福なるかな義に飢え渇く者その人は飽くことを得ん

イエスは敎ゆるに先づ第一に、心を貧しくして天來の清水を受け入れよ。第二には罪を悲しみ、內省して自己と社會の穢れに泣け。第三には心を柔和にして神の心のまゝに進めと敎へられた。以上三つの心の準備が整つた上は正義を求むること飢え渇くが如くせよと敎へられるのである。

（一）飢え渇いた時の聲は人間本性よりの叫である

何事によらず求め方は、この眞劍さでなければならぬ。私共は飢えたるとき食物を求むる如く、正義を求むのでなければ、心の眞底からの滿足は見出し難い。

飢え渇く如くとは止むに止まれぬ思をもて、何が何でもやり拔かねばならぬとの非常な勇猛心をもて實行に着手することである。飢え渇いた時の心の要求は理性の限界線を遙かに越へた奥から溢れ出づる。善は善なるが故に行ふのであり、正義は正義なるが故に迫害をも突破して斷行するのである。決して利害關係の打算から割り出された御都合主義の正義であつてはならない。ルーテルが法王の非を鳴らして奮然として立上つたあの雄々しい姿。あれは正義を飢え渇く如く求めた力が彼を斯くも偉大ならしめたのである。日蓮の獅々吼もそうであつた。古來人類の歷史はかうした人々によつて動かされ、新生命が躍動し來つた。正義は遂に全人類をその軌道の上に引きもどさではおかぬ偉大な力である。正義を斷行する前にはいつでも山なす難關が待ち構へてゐる。けれども正義を飢え渇く如く求むる人の前には大いなる瀑布の前にいつかは谷川の道が開け遂には大海に達する如く、必ずや道が開ける。最後の勝利は確實である。一時は四面楚歌の聲にて何れへも免るべき道がないかと見ゆる時にも大龍が不斷に滾々と流れ注がるゝ時には遂に溢れて河流に合する。げに正義の人と瀑布の前には必ず道が生ずるとは間違ひなき眞理であると云はねばならぬ。

（二）正義と愛は最後の勝利者である

昔しイスラエルの六十萬の民族が、エジプトに於て苦しめられたとき、モーゼは此民をカナンの故鄕に連れ歸ることは神の御旨であり、神に從ふ正義の道であると確信したから奮然として立ち上つた。然し、モーゼ自身には如何にして海を超え、砂塵飛ぶアラビヤの砂漠を渡り、ヨルダンの畔まで連れ

行くべきかに就いての正算はなかつた。けれども正義のためには左顧右盻することなく、猛然として指揮者として立つたのである。彼が六十萬の民を率ゐてエジプトを遁れんとしたとき、已にエジプトの軍勢ほ早くもこれを知つて紅海まで追跡した。前に紅海を控へ、後にエジプトの大軍を負ふて進退谷つて了つた。彼は人力を盡して天命を待つの腹がきまつて、一心に神に祈り求めた。彼は示されるまゝに、鞭を上げて水を打つた。不思議である。海中に一道の路が開け、六十萬の大勢の民は無事に紅海を渡り切ることが出來た。このとき追ひ來りしエジプトの大軍はモーゼの軍隊の最後が渡り切るや否や、道を蔽ふた海水中に溺れ死にをしたといふ奇跡的な話しがある。

彼モーゼが、更にアラビヤの野に至つて食盡き、水に渴けるとき、岩を打てば忽ちにして泉あらはれ、地を打てばマナ（今日の一種の菌）が降り、奇跡的に養はれて苦心慘憺のうちに、六十萬の民を引つれてヨルダン河畔のピスガの岡に辿り着くことが出來た。彼はこゝで僵れて了つたが、ヨシヤが彼に代り民を率ゐて、今日のユダヤ民族を彼處に救ひ出すことが出來た。モーゼ、ヨシヤをしてこの大任を全うせしめたものは神の正義を求むる切なる心より湧く力であつた。神様は必ず正義に組し、これを助け給ふ事實をこの記事を通して知ることが出來るではないか。凡ての事、何が何んでも正しい事なら是非やり拔いて行けば、必ず成功があるものである。只正義のために、軍旗を押し立てゝ惡魔に對して奮鬪する處に、おのづから大仕事がやつてのけられるのである。救世濟民の爲に旗鼓堂々

と立ち上り、神の正義をして勝利者たらしめん爲に粉骨碎身せんとするものに、神は自らの力を注ぎ地上の人物を御心のまゝに用ひ給ふ。

世の中に二種の事業家がある。一つは人間の智慧分別を唯一の據り處として企畫し、少しでも不明の點があれば研究調査の上ならでは事業に着手しない人々である。第二は神の側から人間社會を見おろして、何が何でもやらねばならぬとの信仰に動かされて背水の陣を敷いて斷々乎として立ち上る人物である。世界歷史の最も目覺ましい創造の事業は後者の人物によつて開拓せられ、且つ成就せられてゐることを見出す。我々は正義の爲めには、何が何んでも忍耐と希望を以て求めに求めて邁進すべきである。斯くして、人の誠意が遂に天に達し、その「祈り」に依つて何事でも與へられる實生活を體驗する事が最も富める幸福な生涯である。イエスはこれを敎へてをられるのである。

私の國元で裁判所の書記をしてゐて、も一年で恩給がつくのであるが、先年の關東地方の大震災で多くの人々の困難の有樣を聞くに忍びず、それらの人々のなぐさめ手とならうと心を決めて、夫妻揃つてこちらにやつて參つた。所が着京後直ちに芝バラックに働き場所を見出し、六疊のバラックが與へられ困難せる同胞のよき牧飼となつて献身的に働いておられた。然も生活の資とするバンフレットの印刷も、丁度私共の所で設備して運轉しようとしてゐた機械が用ひられるといつた風に、凡てが調子よく出來てゐた。こうした行き屆いた道の備へられてゐるのに私も驚いたのであつた。正しき事を勵

くあるが、此世初まつて以來、正義のために立つて飢え死したものを聞かない。地上に於て大事業を遂行しうるものは正義の爲めに立つた者に限る。

（四） 祖國を吾れに與へよ。然ずんば死を與へよ。

ジョンノックスは「スコットランドを我れに與へよ、然らずんば死を與へよ」と叫んだが、彼の如く正義を求めて生命を打ち込んでこそ、英國が救はれたのである。

私共は日常種々の問題に遭遇する。熟慮の要する問題は多いが、正しき事なら躊躇せずに進んで可なり。ルーテルは火あぶりの刑を目前に見ながら宗教改革に突進した如きはよき手本である。「求めよ、さらば與へられん」と聖書にあるが、私共は與へられるまで求める心が必要である。正義を勝たしめるまで突進しなければならぬ。ソクラテスが毒を呑んだのも、キリストが十字架につけられたことも、眞實心の奥底に愛と正義を求められた爲であつた。この正義の前に苦痛はものゝ數にならぬのである。

（五） 第一に神の正義を求めよ、さらば第二に世のものは與へらるべし

人心滔々乎として惡化せんとする今日、徒らに拱手傍觀するときではない。神に祈り、正しき事に勇往邁進すべきであると思ふ。只神の正しきを求めよ、神の約束は確實である。よし貧乏をしても、

機とした事には、こうしためぐみが待ちかまへてゐるのである。

彼が國元を出立するとき、裁判所長が前途を杞憂して、思ひ留まるようにすゝめたのであるが、彼は答へた。「神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てのなくてならぬ物は汝らに加へらるべし」との聖書の約束を信ずるが故に東京に出掛けて行くのである。若し所長さんのあやぶまれる如くならば、聖書の文句を書き直ほさねばならぬことになる。どうなるか試みて見る積りであるといつて押し切つて上京したのである。所が前記の如く聖書の約束は確實であつたので、彼は更に力を得て傳道に從事してゐる。

大にしてはモーゼ六十萬の民を救ひ、小にしてはこの友人の行爲、凡ては義を飢え渇く如くに求める所に充ち立つた喜びと成功が得られるのである。

（三） 正義の人の歩みは大瀧の流れてある

今日全世界の奇跡といはれてゐる救世軍の大事業も、神の正義のために貧民に奉仕せんとして雄々しく立ち上つた一介の貧弱な青年ウイリアムブースによつて創められたのである。ルーテルの宗教改革運動も亦然り、私達の知る大事業にして、この正義の旗を翳して進まぬものは一つもない。「小鹿の谷川の水を渇へぎしたふ如く、正義を求める」とダビデも歌つてゐるが、希望に輝く道はそこから開けて行くのである。大きな瀧の前にはおのづから路が開け、神と偕なる志ある人の前には必ず道が生ずることは眞理であると思ふ。この世の中に不義を行つて死し、また、失敗をして死んだ者は數限りな

苦しんでも、正しいことをやり拔く所に人の價値がある。正義のために苦しむことは、男子の本懷でなくてはならぬ。

飢え渴く如く義を求めよとのイエスの言葉の中に强き正義への進軍の聲があるではないか。エマーソンが「人間が地上への置土產がありとせば、それは信仰に依つて贏ち得た足跡を殘すことである」といつたが、正義のために僵れても神の目から見て、永遠に消えざる足跡を地上に殘し度いものである。

幸福なるかな、憐憫あるもの、その人は憐憫を得ん

（一）天國の第一條件。『愛』

第一より第四までの敎は、神の力を戴く爲に御互が準備せねばならぬ諸條件である。即ち人より神への階段である。これから述べる第五以下は神の住民となつた我々は積極的に何をなすべきかを敎へてあるのである。前者は丁度機械工場で機械を運轉せしむるため、モーターに油を入れたりベルトをかけたりする準備であり、後者はスヰッチを入れて機械を動かして如何なる仕事をするか。そのるとと內容である。その積極的事業の第一條件は卽ち愛である。聖い神の愛もて全人類を抱擁することであ

ることイエスは敎へられる。

（二）パウロの下した愛の定義

コリント前書第十三章に、パウロがよくこの愛の內容を敎へてあるのでそれを諸君におすゝめしたい。

『たとひ我もろ〳〵の國人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鐃鈸の如し。假令われ豫言する能力あり、又すべての奧義と凡ての知識とに達し、又山を移すほどの大なる信仰ありとも愛なくば敎ふるに足らず。愛は寬容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、非禮を行はず、己れの利を求めず憤ほらず、人の惡を念はず、不義を喜ばずして眞理の喜ぶところを喜び、凡そ事忍び、おほよそ事信じ、おほよそ事望み、おほよそ事耐ふるなり。愛は長久までも絕ゆることなし。然れど豫言は廢れ、異言は止み、知識も亦廢らん。げに信仰と希望と愛とこの三つの者は限りなく有らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。』

この章の一言一句が自分の血となり肉となつたとき、神の住民となることが出來る。宗敎上から人の價値を定めんとせば、その物指は愛である。豫言者や大學者になつても又たとひ山を動かすほどの信仰があつても、愛がなければ駄目である。慈善家でも愛の伴はぬ財を施したのでは、何にもならぬ。我々の凡ての行爲も動機が愛から出たのでなければ何もならぬといふのである。然らば愛とは何か、

コリント後書十三章によつて說明され盡してある。

（三） 受くるよりも愛を與へ得るものは幸福なり

私共は正しき生活に入らんが爲に、このパウロの申した愛の定義に添ふ爲に自分の曲つた行を直ほして行かねばならぬ。

人をあはれんで善事をなす事程大なる喜びはあるまい。神のあはれみをもて多くの人々を憐んで行く事が善の善なるものである。憐れみを受けんとするよりも與へんとする處にほんとうの喜びがある。

詩篇第十八篇二十五節に「なんぢ憐憫あるものには憐あるものとなり、完全ものには全ものとなり」とあるが、十のもので向へば十で迎へられる。ラスキンの言葉をかりれば "Love is algebraical equal" である。

人の爲めに盡せば盡した丈は、きつと報いられるばかりでなく、一粒の麥の如く幾十倍にも增加して惠が倍加するものである。幻燈の如く愛といふ種子板を入れると、社會といふ幕に愛がうつるのである。自らが不平をいだき憤慨してゐるときは、世も亦こぞつて不平をいひ憤慨してくる。自ら樂しむとき世の何事も樂しく迎へて呉れる。

（四） 愛は天國の扉を開く鍵である

私共が眞個に神の國に入る喜びを得つか否かは、この愛の生活に入つて人に與へて行く立場に立つか否かによるのである。

嘗て本間先生にあつたとき、「自分が人に善い事をして却つてうらまれたり、ねたまれたり逆な結果になつたとき、『神様よ、今は私の方から貸し越しが出來ました』と申上げる。善い事をしてよい結果が與へられて了へば、差引零で何もなくなるのである。手紙でも返事を出さぬのは、途上で返禮せぬのと同じく心苦しいので、いつでも貸し越すように務めにゐる」と申されたが、本間先生があばらやに居ても、王侯貴人の家にゐる氣持ちのするのは尤もなことだと肯かれる。イザヤ書五十八章にイザヤの靈感をかきあらはしてある。

飢えたるものに汝のパンを分ち與へ、さすらへる貧しきものを汝の家に入れ、裸かなるものを見て之れにきせよ、愛の業を行ふとき、汝の光あかつきの如く表れ出で汝速かにいやされん。又汝呼ぶときは、エホバ答へたまはん、そのとき汝エホバを樂しむべし、エホバは汝を地の堅き所にのらしめ汝が先祖ヤコブの產業もて汝を養ひ給はん。

愛だ、愛だ、神は愛なりである。神の御心はあかるい光とあたゝかい愛となつて現はれて來る。人の心が神の心と合致すれば、おのづから愛が湧いて來る。私共は神の心に從ひさへすれば、いつでも自然と愛の人となり得る一事を毎日の生活の中にその體驗をくり返して行きたいものである。

幸福なるかな心の清きもの、その人は神を見ん

（一）清き心とは何か

積極的態度の第二は心を清く保つことである。心の清きとは鋭い雲りなき眼玉の如きものである。或はまた船の羅針盤、潜航艇のペリスコープの如きものである。これらが鈍つてゐるか、切ひ切られてゐなければ自らを躓づかせ多くの人々を傷つけるのである。愛にも清き心が伴はねば盲目に陥つて陥穽して了ふのである。見かけ上の憐みでは駄目である。

一體人間は自分の目を通して見るより他に致方がない。美はしく咲き出づる花、また雲間に飛ぶ雲雀は盲目には現實の世界として表はれない。心の盲なるものに、如何なる世界があつてもそれは無に等しい。

心の清きものにして初めて神の御榮光と眞理とを見ることが出來るのである。心の清き人の前には世の事象はそのまゝ正しい姿に寫つる。けれども見る人の心の狀態が變つて來ると、その結果に天地の差が生ずる。印度の哲人が眞如の月影と讃美するとき、日本人には靜寂な悲しい月とも見られるのである。

（二）見神の絶對必要條件

宇宙の支配者また生命の本源なる神を眞に知るには、己れの心を通して見るより外に道がないから、心を清くすることが絶對必要條件である。神を正しく見るか否かは其人の心が清いかどうかによるのである。我々は宇宙の眞相を正しく見るために、幼兒の心の如く、また拭ひ切つた鏡の如くせねばならぬ。この意味で人は神を寫し奉るべき一個の鏡である。

靜かな湖水には月影がはつきり寫る。一點の汚れなき心にこそ神の姿が明瞭に映る。この清き心の人に接するとき神の姿を見ることが出來る。「我を見しものは父を見しなり」とイエス御自身は神の姿を寫す明鏡として自現してゐられるではないか。

佛教での難行苦業も、又座禪をすることも、この心を清くする手段に外ならぬ。神人合一の境涯にはこの心の清きものにして始めて達せられるのである。

私共は若し心が清くなければ、如何に周圍に神の光が滿ち溢れてゐても、神の御姿を反射する譯に行かない。今日のキリスト教が伸びんとして伸び得ざるは、キリスト教に力なきにあらず、信者たるべき御互の心がまだ清くないからではあるまいか。何とか心を研いて使徒達の如き生命の躍動する傳道をさせて戴けないものであらうか。

宗教とは地上の人が宇宙の本質たる無限の神と神人合一の實感を持ち、その力を實社會にあらはし

て行爲となれるものを云ふのである。

（三） 信仰の極致は見神の體驗に歸着す

かく考へてくると、我々が信仰生活に入る內容を徹底的に見るとき、この清き心が必要な要素であることが解る。多くの人々は信仰を求むるが、信仰の極致は見神である。

日本のみならず、支那にも、無宗教無信仰の人が頗る多いが、人間は信仰なしに生きられるものでない。信ずることは丁度肺が呼吸するとき自然に空氣が入つてくる如く、また飢えたとき食慾の與へられる如く、人生に對して自然に與へられた本能である。食はんと欲し、呼吸せんと欲する。これが本能的に備つてゐる如く、心は何物かに信賴せんとする本能が與へられてゐる。これなくば人生は死である。

肉體のみならず、心に於ても何かを食べ何かを呼吸せんとする。人はその信仰の對稱物として高いか低いかの標準こそ違へ、信ずる心があるのである。信ずる對稱の高低は、心の淸さの度合に比例する。丁度望遠鏡の擴大度に比例して天體の見ゆる程度が違ふと同樣である。

（四） 淸い心が「信」を與へてくれる

信ぜずしては生きられぬのである。これは空氣を呼吸せずんば生きられぬと同樣である。兩親を信じ友人を信ずることが出來なくなつては生きて居られぬ。下女を信じなければ食物も安心して食べられぬ。自分らと共に仕事をする者を信じないとき事業は死である。人間の心から信ずるといふ心理的

事實を失へば全部が死である。銀行に貯金してゐても、銀行がつぶれる事を疑へば、一日も安閑としておれない。天體と共に人類が滅亡すると思へば、安んじて生活が出來ない。車屋を信じなくては車にも乘れない。床屋を信じなければ鬚を剃ることも出來はしない。萬事信ずる所に、安心した生活が得られるのである。我々に若し信ずる心がなくなれば、心が不安な不統一狀態になり疑ひと煩悶が起る。直に神經衰弱に陷つて了ふ。心が統一されてこそ信じ得られ、またそこに安心立命がある。實に、この大切な信は淸い心になり得て始めて自然に與へられる賜物である。

我々人間社會の安定は、御互が信じ合ふ時に得られる。只その信ずる對稱を何處に求めるかゞ殘された問題である。

（五） 信仰の對稱を何處に求むるか

金を對稱とするものは、金の萬能を信じて心の統一を計る。戀愛至上者は戀愛に對稱を置いてゐる。然し世の中の事、夜半に嵐の吹かぬものかはで有爲轉變なものである。信じてまかせてゐたものが變つて了ふ程大きな悲觀はない。

そこで、我々はどうしても永遠に不變な對稱物を求めなければならぬのである。神を對稱とする處に眞の信仰があり、眞の宗教が起るのである。

（人間）—（信仰）＝（人間破綻）

一體心の煩悶は、心の統一が破れる所に起るものである。安心立命は前にも言へる如く、心の統一狀態にあるとき得られるものである。世の多くの信仰に入つた人を見るに、信仰の對稱を靈と肉との兩面に求め、その結果二重生活の弊に陷入つてゐるものが少なくない。パウロがこの死の體より我を救はんものは誰ぞやと叫んだのも、此二重生活から脱却せんとする叫びであつたのである。黄金と神とに兼ね仕ふること能はず。全乎、無乎、(All or Nothing) である。神に依つて統一された人生は全。All であり、神による統一の破れたとき無。Nothing であり、破綻である。

信仰とは心の統一狀態になつた時見出される光である。ことを忘れてはならぬ。

(六) 見神と心の統一狀態

双眼鏡の左右のレンズが統一されぬとぼんやりするが、焦點が統一されると麗はしい姿が見えてくる。ビストンとエクセントリックがヴアルブによつて調節せられると汽車が動くのである。心の統一とは又神と人とが丁度一本の木の幹と枝との關係にあることであるといへる。心の統一されたとき、その判斷が正確となり、神の姿が明瞭になつてくる。そこで心の統一狀態において生き得る人は神を見ることが出來る。

凡てのもの調和され統一された場合に麗はしい感じが湧いてくるものである、草の綠と花の赤との調和に美がある。人の生活を見ても表裏のない生活に調和があり、うるはしい生活を見出すのである。

眞の幸福は心の統一狀態にある。その狀態にあるとき、信仰が湧き、そこに生命が起。その必然の結果として神を見るべき體驗が湧くのである。心の統一をうることは信仰の α(アルファ) にして ω(オメガ) である。

その統一の手段方法として精神修養があるのである。多くの詩人哲人が努力し苦心したあとを見ても、その主とする所は心の統一を求めんとしたことである。修養に忘すものは、この爲に是非とも肉慾から聖められなければならぬ。名譽心、低い慾望から解脱しなければならぬ。

(七) 日本の救と國民精神の統一

日本の社會問題、思想問題、産業問題の行詰まれるを見るとき、日本の國を救ふ手段は、心の統一狀態に來らしめることである。七千萬同胞がある一つの力に統一されるとき、日本全體としての力が表はれる、そこに日本の新天地が伸びてゆく。

昔しの歴史を繙いて見るに、武士道とか、皇室中心主義とか、大和魂とかによつて統一された時代は堅實な發展をしてゐたが、今や思想界にも、實業界にも、不統一狀態にある日本は實に危機に瀕してゐるといつてよい。この危機より日本を救ふは、實に日本全體の心を統一せしむるより外に道がない。

殊に日本に必要なのは、産業と信仰との統一にあると思ふ。こゝに生活問題の革命が提唱される。この改造の根本原動力は信仰である。信仰は人心を結ぶ中心軸である。

私共は如何なる道に進むにも清き神心をもつて二十世紀を見、始終神に依つて心を統一し、キリストの救によつて聖潔を與へられ、己れを棄てゝ十字架を負ふべきである。こゝに輝いた統一の生活が與へられる。こゝに日本否全人類の救にかゝる鍵がある。即ち一切のものが神の中に統一されてくる。神の中に統一さるゝ爲には、神を明確に見奉り、神を明瞭に知らねばならぬ。かうした重大なる結果を生み出す見神の大業を完ふするには、先づ第一に御互一人々々の「心」を清くせよとイエスは仰せられるのである。

今自らを省みて、神の御前にやましい暗い罪を殘しておる處はないか。清くあるべき筈の心に黑雲が蔽ふてはゐないか。若し少しでも光を蔽ふ暗い何物かゞ殘されておるに氣づくならば直ちに、今悔ひ改めて、聖靈の火にて之を燒き盡され、イエスの血潮にて洗ひ聖めて戴かねばならぬ。主基督が「重荷を負へるもの、我に來つて憩へ」と言つておられるではないか。十字架上より血潮のこぼるゝ御手を擴げて生命を受けよと手招いておられる主の御姿が眼前に仰がれるではないか。

幸福なるかな平和ならしむるもの
その人は神の子と唱へられん。

源泉

(一) 平和の源

前に述べた愛する心と清き心との二つが、ほんとうに得られるならば、その自然の結果として第三の條件である「平和ならしむる」ことが實現されるであらう。そして世界人類の平和になる實のあがるとき、その平和ならしめし人は神の子と唱へらるゝに足る。初めの愛と清き心とは平和の內面で後に述べる義は平和の外的の見方である。ヘンリー・マシューは「天から來た智識は先天的に純で、その純なるものが必然的に平和ならしむ」といつてゐる。この處の純は哲學で曰ふ純粹意識の體驗であらう。かゝる純なる立場にある人は惠まれたもので、神に對しても人に對しても純なるものこそ平和の使者としてえらばれたものである。

釋迦が菩提樹の下で「奇しきかな、奇しき哉一切衆生に佛性あり」と叫んだ。あしこに亦純なる姿

があり、平和な氣持ちがあらはれてゐる。

宇宙の平和は天地の法則に從つて星辰が運行する處に生じる。神より流れ出づる聖愛の力に全人類が引きつけられつゝ、その統一の下に活動する處に眞の平和が實現し得る。釋迦の見た佛性も結局神の愛の表示であらう。釋迦はこれを自己と生物との間に見た。科學者はこれを物質界に見る。キリストはこれを人と神とに見出したのである。

純なる神心、佛性、これが愛の一點に焦點化される所に宇宙の平和、人類の平和が來るであらう。

（二） 社會人としての責務

人間は社會を離れて存在の價値がないのである。

釋迦が山に入つた儘自分丈悟を開いて樂しむのみで隣人に何事も傳へなかつたら、今日の佛教は生れなかつたであらう。四十日四十夜祈り續けて天開け聲ありとの境地に達したキリストが、社會に立たずして荒野にて終らば、人類の生活から見て價値がないものになつたであらう。自分の握り得た體驗を自分のものとして持ち續けてゆく丈では社會的に何らの價値がない。社會人として役立つてこそ社會人としての自己の價値があらはれる。斯くして人類相愛の實を擧げて吾々は社會を平和ならしめるものでありたい。

社會の一員として、積極的に進んで徹底した平和を地上に創造するのでなければ、學問も、修養も、

悟入も、凡て畫餅に歸するではないか。

私共が自ら社會人として責務を果してゐるか否かは社會を平和ならしめるために働いてゐるか否かにある。今我々は平和ならしむる神の子と稱へらるゝにふさはしき行爲をなせるや否や、反省すべきではないか。

（三） 心の動搖を赤面するほどに恥ぢたい。

イエスの教に「昔し十戒の初めに『汝殺す勿れ』といつてゐるが。殺人の動機である『怒心』を愼まねばならぬ」といふのがある。

自分の心が純でないから怒るのであらう。心に波立つとき怒りを發するのである。心の平和ならざるものこそ殺人をするものである。これ程社會に對しての大罪はあるまい。

私達が御客樣に御給仕をするとき、お茶碗にお茶をどうかしたはづみにこぼしたとすれば禮儀を失する。それに對して恥づかしくて赤面するのである。虎が天來の靈の清水を心に盛られてゐる私共が、さゝやかな外部の動搖に心亂され、心の浪を立てゝ怒の言を發し顏に見難い憤怒の色を表はして恥じない。この事を思つたとき、私は神の前にほんとうに申譯けない罪を犯してゐると自責せしめられたことがある。それ以來私は怒から解放せられた體驗を持つ。世の迫害、誤解に對して動かされぬように心を据ゑて置かねば男子として否神の子として社會の一員として面目ないことである。親しい

人、殊に家庭の人々に對して怒つたり、同情せねばならぬものにいやな顔をしたり、あはれみをかくべき下女に我儘勝手な怒言を發するなどは、ほんとうに恥じなければならぬことである。

穢い衣類のけがれを見たら、直ぐ人に見られぬうちに部屋に入りて着かへるであらう。その如く心のけがれも涙の祈に依つて洗ひ潔めたいものである。

怒を發するのは、丁度人の前で不淨のものを臭はしてゐるのに氣付かずにゐるのと同樣、まことに見苦しい恥づべき事である。

一人怒を發するとき一家隣人皆いやな氣持ちになる。私共は自分一個の心の水さへこぼさぬやうにすれば、從つて周圍も平和になつて行くのである。

（四）平和な姿、（神人合一）

一體平和といふ現象は、人間に先天的に與へられてゐる心の要求が滿足された場合の現象を言ふのである。

人は何ものかの要求を充分滿たさんとして努力してゐる。その願望がなければ人は死んで了ふ。その望の滿されたのが平和である。

願望成就のうちで最高なるは、私共の心が神樣の全き所有となることである。そのとき始めて私共の一切の要求が滿たされるのである。

物體が引力のまゝに動いて平和なる如く、神の支配のまゝに動く場合に平和と滿足とがある。

眞の幸福は神の心の御支配が、私共の心中に行はれるときである。神の掟をそのまゝ遵奉するとき平和がくるのである。我々の心が神の心と融合することがほんとうの平和である。

人は何ものかを求むるが、それは先づ神を知り、神と結ぶことでなければならぬ。人は過つて一時的のごまかしの滿足を金に求め、情慾に求めんとする。如何に立派な生活をしてゐる子供でも、その母のもとに於けるが如き平和と滿足とは他の場所では得られない。我々も天の父樣のもとに一つとなる時に於てのみ、ほんとうの充ち足つた平和と歡喜を見出すのである。神を離れて平和は斷じてない。國際聯盟も全人類の各自が神の子供たる立場に還らねば駄目である。

平和ならしむべく地上に置かれた相互の使命を自覺し天の父樣と一つになつて父の愛もて隣人を愛し、清き心もて事物の奥を洞察し互に一致協調するならば、平和は期せずして地上に來るであらう。

幸福なるかな、義のために責めらるゝもの天國はその人のものなり。

（一）最も祝福されるもの

今迄述べて來た七つの祝福即ち（一）心の貧しきもの、（二）悲しむもの、（三）柔和なもの、（四）

義に飢え渇くもの、(五)憐憫あるもの、(六)心の清きもの、(七)平和ならしむるもの、等の究極點はこの第八の祝福に歸着する。

貧しき心を出發點として義のために責められることを到着點として、キリストは身を以つて神の聖意をあかしなすつた。十字架上ににに神御自分を現はしてゐられる。イエスの生涯こそこの山上の垂訓の生ける投影畫である。

ヘンリー・マシュ！は「聖書の中で多くのパラドックスがあるが、この山上の垂訓程多いものはない。然もそのうちで第八の祝福程甚だしいものはない」と云つてゐる。普通一般には、責められさらんことを望むのであるが、ほんとうに徹底したものから言へば、姦惡な世に責められる迄に、献身して、神と偕に歩む位、幸福なことはないのである。

(二) 人は二次式電池である

八つの祝福のうち初めの四つは、如何にしてうくべきか How to receive の條件であるが、後の四つは如何にして與へんか How to give の條件である。これを科學的に見ると。「人は二次式電池である」といふことになる。

電池の中には、劇藥の硫酸 H_2SO_4 やら、重い酸化鉛 Pb O などが入つてゐる。電流が内部に通ずると、外的にそれに相當の放電 "Discharge" が起る。電流から離せば何らの作用も起らぬ。人

は神から大きな力を注入 "Charge" せられて初めて花々しき活動として奉仕 (Discharge) することが出來る。

初めの四つの祝福は電流を通ずるために、心の (Connection 及心に内容物を充塡することである。これを何の目的に使ふかは、後の四つで敎へられてゐる。

電流を Charge する丈で Discharge しないときには却つて内容の鉛が變化して力を出さぬやうになる。

それと同樣受ける丈で與へる立場に立たぬと駄目である。多くの人々は修養丈を考へてゐるが、その目的たる奉仕をせぬので却つて自已を無力に陷れる憂がある。人間の生命も新陳代謝があつて始めて成立するではないか。

今の日本の社會の行詰まりは、結局如何にして受けんかとの問題に餘りに捕へられ過ぎて、如何にして與へ奉仕せんかとの活問題が閑却されてゐる處にその眞因が存するではないか。人は二次式電池の如く神より力をうけ、その力を原動力として外部の社會人類に對して奉仕を勵み拔く處に人間の眞の價値が發揮されるのである。

(三) 與へんが爲めに受けよ。

受け入れる事多くして與へる事の少ない時多くの腐敗と矛盾と蹟きが來る。流れぬ沼は臭氣紛々と

して鼻むけも出來ぬか、絶えず流れる谷川には腐敗に起らぬ。

死海は多くの河水を受け入れる丈でその名のあらはす如く魚も、虫も、みな死んで了ふ。世に處して智慧や物質や靈的力を孜々として求めてゐるものが多い。然し結局この How to receive と How to give との平衡を保たねば無駄骨折にに終るのである。

神を知らぬ人は右手で高塔を建て左手でその下に穴を掘るの愚をやつてゐる。

ナポレオンを見よ、自ら種子を播いて自らを亡ぼしてゐる。カーネーギーを見よ、神を拔きにして學問と知識とを奬勵した爲に何千萬人かの人を犧牲にし終に Bitter Heart になつて死んで了つた。安田善二郎氏の最後も然りである。吾々は先づ How to live を考へ、而して後それにふさはしい力を How to receive するかを考へねばならぬ。與へるべき正しい目的が定つてから受け入れる方が定まるのである。

（四） 最大の幸福者は死に場所を發見せる人である

然らば、與へんがために受け入れるには、何う云ふ決心でやればよいか。

それは他なし、其目的を貫ぬくためには殺されてもやり拔く丈の覺悟でやらねばならぬ。第八の義のために責められる者の幸福はこれであると敎へてをられる。

まに最も幸福の人ありとせば、自らの死に場所を發見した人である。

最後の死に場所を持たぬ人は浮浪の民の如く人生をさすらいの旅に終り、持てる凡てのものが重荷になつて了ふであらう。死に場所を見出した人には安心があり、如何なる迫害にも動かされない。

激浪に蔽いかくされた巖は再び巍然として頭角をあらはし、百折不撓何萬回の波の迫害にも屈せぬ堂々たる姿をあらはしてゐる。この岩の態度を我々は持ちたい。人生に死に場所を發見した人こそ、この巖の如き態度を持つて人生に處しうる人である。かくの如き人こそ神の永遠の事業を繼續する人物である。

山中鹿之助が我に七難八苦を與へ給へと叫び、日蓮が不退轉の勇をもて敢然と眞理のために立つた如く、一切を神にまかせ、そこに死に場所を確立せねば、凡ての事業には熱と力が湧いて來ない。

（五） 人生の幸福は迫害を突破する進軍にあり

我々のほんとの愉快は雄々しく困難に勝つて行く處にある。安逸に耽る處に潑剌たる生命の躍動はない。絶えざる活動と平安の存する處に眞の幸福がある。そこに生命の永續があり、そこから人類の發展が起るのである。

人生は山を登るが如きであらう。喘へぎ乍らも、尙ほ歩みを休めず苦心して登る處に意義がある。

絶頂から山麓を眼下に見下したときの歡喜は譬ふるに言葉がない。奔馬の如き白雲は足下に飛び、澄み渡る大空には異樣の光が滿ち滿ちてゐるではないか。天國の喜びと永遠の生命とを望んで行く處に、超社會的な喜びの生活が體驗出來る。この人生の行路は、「門松や冥途の旅の一里塚」と歌つた一休和尚とは反對に盡きぬ歡喜と大生命に向つての一里塚である。

登山は徒歩や乘馬で喘ぎ苦るしみつゝ一歩一歩山頂を望んで登り行く處に眞の愉快と興味がある。米國の山の如くに自動車で何の苦もなく居睡しながらの登山は餘りにあつけない。苦痛と努力の後に展開し來る新天地の發見の中に盡きぬ歡喜と滿足とがあるのである。一般に惡に勝ちつゝ善に向ふ處に必ず抵抗と苦痛とがあるが、その抵抗を切り拔けて行く處に新しい喜びの生活が出來るのである。迫害を逃げ厭ふものには凡ての幸福が人生から消へて了ふ。善に向つての進軍こそ、幸福なる人生である。

人生は一種の戰場である。人生は不完全より完全へ進まんが爲に人々各自の環境に依つて刻々惡と戰つて行く處に眞の意義がある。人生は暗より光に、惡より善に、不完全より完全に進まんが爲めの進化の道程であり亦戰場である。

蟬が天空を自由に飛ぶ迄に進化するには、あの反抗する殼を脫却する苦痛と戰はねばならぬではないか。誠に誠に人は萬難を排して進み遂に勝利を見出す所に眞の幸福が存してゐる。

（六） 殉教者の勝利と幸福。

凡てに順調で物質的にも充ち足つた世渡りをした人は、我々に何らの光も與へて呉れぬ。世の惡を打ち破りて倒れた人は永遠に我々に生きて働いてくれる。これは古來の歴史が私共全人類に大音聲をあげて敎へてくれてゐるではないか。義のために責められつゝ最後まで進んだ人々に死はない。永遠に人の心に生きてゐる。キリスト、釋迦、孔子、日蓮、親鸞、ソクラテス、オーガスチン、ルーテル、クロムウエル、ウエスレー、皆然りである。義のために責められるゝことは、即ち殉教者の生涯である。

十八九歳のステパノが石にて打たれ乍ら打つ人々を祝福して死んだ。この殉教の死はパウロに甦へつて、ヨーロッパを救つた。ステパノなかりせばパウロなく、パウロなかりせば今日の西歐の文明は生れ出でなかつたに違ひない。キリストの十字架の死なかりせば、二十世紀の文化は現在とは全く異なつた暗い氣持ちの世界に變つたに違ひない。

キリストの十字架の死があつたればこそ、東洋の隅にある小さな私共にも大きな變化を與へられ、大地に活ける神の發見を許され、全世界の富にも優る勝利を心の中に與へられてゐる。この一事は何と云ふ偉大な恩惠であらうぞ。現代日本の行詰りはこの殉教者の熱がさめ、冷たくなつてゐる爲である。明治維新の大業は熱血迸る殉難者の手に依つて完ふされた。然るに明治、大正の御世を通じてはどうか。皇太子殿下を狙撃する不敬漢があらはれ、更に物慾と肉慾との捕虜となつて無慘の死を遂げるものは

日夜數ふるに追ないではないか。今こそ振ひ立つて民族と全人類の爲に殉難の勇者が出なければならぬ秋ではないか。實に今こそは生命を賭し、義のために責められる志士が出なければならぬ秋である。日本の現狀は、この志士の出現をまつや切である。若き熱血の逆る青年諸君の猛省を促したい。神の救を民族より更に全人類に投げかけるために努力しなければ、人としての價値は零となり、永遠の生命は諸君のものとならぬではないか。かくては永遠の榮え日本になし。日本否全人類の行詰りを打破するため、How to give の立場に立つて人生のスタートをやり直ほさうではないか。

從來世人は自己を中心として「如何に受けんか」とのみ焦慮し、最大に受け得たる人々を最大の成功者なりと考へ、受くる事の競爭場裡が人生そのものであつたかの如き觀がある。

最も多く受けたるものを最大の幸福者なりと思考する、この思想に禍ひされて今日の如き行き詰れる時代世相が結果づけられたのである。眞の幸福とは最も多く受くる自己中心の生活にあらずして、神と全人類に對して最大のものを與へる神中心の生活である。最大多數の最大幸福の爲めに驅の假寓たるべき自己の肉體を献げて、永遠の生命を宇宙的に勝ち得る人物が最も偉大な人物である。

故に、現代を救ふ鍵はこの一言につくると思ふ。即ち受くる立場より與ふる立場に大衆の心理を一轉せしめ、自己中心の生活より神中心の生活に變移せしめることである。

天國の八憲法綜括

（一） 天門を開くべき八つの鍵

大自然界は神御自身が手づから建て給ふた禮拜堂である。幽邃莊美なる山上に青空を天井とし、綠の大地を席にする會堂に優る敎會堂は他にあり得ない。この美しい山上でイエスの唇をついで出て來る天來の神の聲に耳を傾けて、私共は天國に入るべき八つの鍵を示された。

第一の鍵、心を貧しうせよ。

傲慢、頑固な罪の心が殘つてはゐないか、自己中心の我儘勝手が根をおろしてはゐないか。昔からの罪の古株が殘つてはゐないか。心を貧しうせよとは、これらの一切を取り除いて空しい心になれと云ふのである。人間側からこの空しい心の準備が出來ると、天國への第一門が自ら開かれるのである。この世に最も必要なものは金ではない、また健康、學問、智識、名譽だけでもない。火に燒かれず、盜人にとられぬ亡びざる神の生命そのものが必要である。イエスはこれを我々に與へんとて十字架上に血判まで押して約束してをられるのである。「汝信ぜよ神の約束は確實なり」。これはウイリアム、ブースをして最後の呼吸の中に語らしめた聖靈の聲である。地の極てまで福音のあかしをなさんとのイエスの約束が成就して、今日では極東の日本にまで福音は傳へられてゐる。人の約束に間違はあつて

も、神の御約束には間違がない筈である。この約束に從ひ天國を受けるには、先づ御互は貧しい心にならねばならぬ。コップに泥水が滿ちてゐては天津眞清水は入らぬ。先づ第一に心を貧しうする準備が出來てゐるかどうか互に反省したい。

第二の鍵、悲しむ心。

罪、弱點、しくじり、一切の缺點を深く悲しむ心がなければならぬ。少し位の事はよいといつた風な心の鈍感さでは、天國に入ることは出來ない。罪が清められぬのは、この悲しむ心が足りないことに歸因する。花の咲くとき己に子房がそなへられてゐる。悲しみを覺えるとき、天の惠が心に入り、歡喜の子房がふくれんとする時である。

悲しむ心、罪をなげく心、これは神よりの恩寵である。私共はもつと、もつと罪を悲しむ必要がある。今我々は自らの罪を深く悲しんでゐるかどうか、そして上よりの慰めと力とをいたゞく祈りの準備が出來てゐるかどうか、隱れた罪を殘してをるならば、今それをあらはに神の前に訴へて悲しみ求めねばならぬ。

第三の鍵、柔和な心。

神の御旨のまゝに從ふ外何事もなさぬ心こそ柔和な姿である。引力に從つて、天の星が正しい軌道

を歩む處に絕えざる平和の運行がある。神の力によつて動く人の前にこそ、天國に入るべき門が開かれてゐる。この純にして柔和な心を今御互がもつてゐるかどうか。

第四の鍵、義に飢えよ。

渴けば、泉が如何に遠方にあつても來りて飲む。飢えればどんな邊鄙な處へでも、探し求めて食を得る。かくの如き熱心をもて私共はいつも神の愛とその義とを求めてゐるかどうか。飢えたる時の如く正義のために身を勞してゐるかどうか。

第五の鍵、愛の心。

罪人を救はん爲に獨子を降し給ふた神の憐みをもて、他人を愛してゐるかどうか。自分だけを愛して人に冷淡な、かたくなゝ心が殘つてはゐないか。

愛は神が人に授くる最大の賜物である。日本の現代に缺けたものありとせば、それは人心に熱なく、愛の火が消えてゐる一事である。七千萬の靈魂は、天來の火を待つてゐる。この火がどうしたらば燃ゆるか。他なし愛の油を注ぎかけるより他に道はない。

ガソリンの流れてゐる處には、火は遠方にあつても點火する。聖き愛のある處、天來の火は必ず飛火する。罪人に對して働きかける愛、病人に對して眞心より溢れる愛が注がれるとき、天來の火は必ずそこに焰をあげる。

この愛は神より直接に人へと注ぎかけられる。我々はこの天來の愛を移動する一本の管とさへなればよいのである。

果して私共の心が神の愛をうくるに適しい準備が成つてゐるや否や神の御座から離れてはゐないか。自ら吟味すべきである。

第六の鍵　心を清くせよ

一萬尺の高き山上に立つとき、地の一切のものが美しい白雲に包まれ、足下は雲の海である。天には爽快な光が輝き、大氣は澄み切つて一種の靈氣が身邊に迫るを覺える。けれども同じ日に山麓にある都會では紅塵萬丈の中に黑雲天を蔽ひ、壓しつけられる樣な氣苦しさを感ずる。心が雪の如く聖められ、豁然と心の扉が開かれる時、響き來る聲こそ天來の言葉である。地上の千萬言にまさる神の無聲の言葉である。一種の Inspiration にうたれざるを得ない。ヘルモンの秀峯に於て祈れるイエスが變貌したのも無理がない。

涙の祈りがおのづと迸る時には、涙は心を洗ひ聖めてくれる。頭の先から全身澄み渡つた感じになる。この場合何物かゞ心に注がれるを覺ゆる。心は不思議に統一され、澄みきつた鏡のやうに聖められる。何物か天の姿が寫り來らざるを得ない。今御互の心は神があらはに見ゆるほどに聖められてゐるかどうか。

第七の鍵　平和ならしむること

心に天來の力が滿さるゝと、平和ならしむる鍵がおのづから手中に托されてゐることを見出す。眞實心の奥底から互に助け合ひ、互の長所を持ち寄つて缺點を補ひ、共存共榮の天國の平和が實現させられる。

第八の鍵　殉難の勝利

以上の七つの惠が與へられると、討ち死にをも覺悟して平和を亂す惡魔と戰ふ決心が勃然として湧いて來る。こゝに殉難の勝利の中に、天國に入る最後の鍵が與へられる。

イエスが「天國はその人のものなり」と仰せられたのは、最初の「心の貧しき者」と、最後の「義の爲に責められたる者」の二者のみで他にない事を注意しておきたい。心の貧しきもの、義のために責められる者、これは天國に入る初めの門であり、終りの門である。義のために責められる戰なしに、神の側に勝利はない。十字架なしに勝利の榮冠はない。"No cross no crown"

（二）　汝一つをも缺ぐな

八つの條件の合鍵がなくては、天國に入ることは出來ない。そのうちの一を缺ぐも天國の門を入る事は出來ぬ。天國を仰ぎ見る八つのレンズの組合せのうち一枚でも方向が違つてゐては、最後の光はその人のものとならぬ。光が反れて了ふからである。

心が貧しいだけで後の七つが與へられねば、これほどつまらぬものはない。また悲しむだけで、後の思能が伴はなければそれ以上の苦痛は他にあり得ない。義に飢えかわくこともよいが、愛なき冷酷た義では何にもならぬ。また愛のみあつて、義と歩調が合はねば、却つて墮落と失敗とを招くのみである。清き心もよいが、氷のやうな冷たい心になつてはならぬ。平和ならしむるも、上べの偽善者であつてはならぬ。義のためといつても、自分のためであつてはならぬ。

八枚のレンズが皆天を指して、きちんと正しい方向に並んでゐなければならぬ。その焦點が一致しないと、天國は見えて來ない。我らが地上にあつて天國の喜びに入りうるのは、この八つの條件のレンズを組合せて望遠鏡を組立てゝのぞくことに他ならぬ。

（三） 人の歩みと神の道

謙虚をもて自らを持し、世の罪を悲しみ、柔和なる慈眼をもて人に接し、義を左足とし、愛を右足とし、清き心もて、世界平和の爲に義に勇む人こそ、天國へ進み行くものの姿である。

踏み出した右足は左足が出るのを待ちかまへてゐる如く。愛と義とは互に協調して進む人生の兩足である。かくてこそ初めて人生の歩みが愉快に樂しく出來るのである。かゝる人の爲めに永遠の生命の道をそなへ給ふものは天地の主なる愛の神御自身である。

（四） 八條件の奥に隠されたる中心點

この山上垂訓では八つの條件は見えてゐるが、その中心は隠されてゐる。この隠されたものが總てを支へてゐる。之が生命の光となつて現はれたのが、即ち十字架である。カルバリ山上のイエスの十字架の姿こそはこの光の焦點である。

八つの天を窺ふべき「レンズ」は、十字架の隠れた中心軸によつて支へられてゐる。イエスは最も大切な眞理をば口をもて述べ給はず、身を以て證し給ひ、血を以て約束に血判し給ふた。「十字架の教へは、神の能力たるなり」とのパウロの一言には吸んでも〳〵盡きぬ生命の泉が滾々と湧き溢れてゐる。

八つのレンズの焦點は即ち十字架である。こゝに眼を据へ、八つのレンズを通じて、天國を望めば神の姿は、晴天に太陽を仰ぐ如く明瞭に見えてくる。而して光がレンズの焦點に集中されると火が燃え始める。神の光が人間の心のレンズに集中し焦點が合ふと、他の冷たいものをも燃やし始める。御互は社會に熱と光とを與へるため十字架を負はねばならぬではないか。木炭も高熱にあふとダイヤモンドに變る。我らの胸に燃ゆる熱火も、炭の如き人物をダイヤモンドに化するまでに高められたい。

（五） 十字架の力は八條件を實行せしむる原動力である

十字架は、八つの骨からなる扇子の「要」の如きものである。この「要」にしかと結びついてゐるなら、八つの條件は自ら實行されてくるであらう。

キリストが十字架上より受けよとて吾等に與へられた永遠の生命を握るならば、御互自らが小基督となり己が十字架を取り、世の罪を負ふものとさせて戴ける。十字架の愛にさへ燃えてゐるならば、第一におのづから謙遜にならざるを得ぬ。第二に、罪の恐ろしさを悲しまざるを得ぬ。第三に、その罪から離れる經驗を得るとき柔和にならざるを得ぬ。第四に、地獄の火に燒かるべきものが、愛のゆゑに助けられたと思ふとき、同じ喜びを多くの亡びる人々に分ちたいと飢え渴く如く義を求めるに至る。第五に、そこにはおのづから熱ゆる如き靈魂に對する熱愛の眞心が溢れて來る。第六には、この生涯へは汚れたる心が入つてくる餘地がない。熱禱の涙で清められた心は益々聖く保たれる。第七には、聖靈に充たされて愛と義が具はる處に自ら平和が生れる。第八には、更にそれのみならず積極的に世の救のためには決死の覺悟にて最後まで戰ひ拔かんとする勇氣と確信が靭勁として湧いて來る。

自然科學に於いて一切の一切であり、奥の奥である原理法則を握ると、それから世の發明發見はおのづから成就される。十字架の奥義を悟り、その生命の泉を握るならば、天國への八條件は、おのづから水の高みより低きに流れる如く自然に體現し得る事が可能となり、更に進んで新しい靈界の消息を知ることが出來るであらう。

この八つの條件はたゞ一つの十字架に還元し得る。故にイエスの宗教は十字架に始まり、十字架に終つてゐることが悟り得られるではないか。

十字架！　十字架！　これ吾がほこり、世を去る日まで十字架ほこらんと歌つた聖徒の心境が誠に今更の如くに尊く感ぜられる。十字架の精神が、聖書の一卷を貫き、又宇宙全體を貫いてゐる。實に十字架の愛なき者は神を知り得ないのみならず、人間として世に生れ出でし目的も價値も見出し得ないであらう。

十字架は世の光である。その中に生命が溢れてゐる。その生命こそは萬人の心を照らす光である。

愛と義

（一）愛の引力、義の軌道

宇宙に絶妙な調和がある。大陽の廻りに地球が音なく動搖なく飛んでゐる事を見てもわかる。私共はこの中に二つの大切な要素を見出す。

第一は地球と太陽との間に働く引力である。第二は地球の廻轉運動に一定の軌道を有することである。

引力は生命の世界で言へば愛であり、軌道は卽ち正義である。

引力があればこそ地球はその正しい軌道を歩み得るのである。人の心が互に愛に結ばれるとき、始

めて人は正義の軌迹を歩むに至ることを忘れてはならぬ。こうした関係が千古不易の霊魂の活動の中に認められる。

生命の道とは卽ち愛の引力にて運行する靈の軌道に過ぎない。我々は彗星の如く我儘勝手に飛び歩かうとする誘惑に遭ふけれども、太陽に引かれてさへをれば、少しの不安もなく地球がその一定の軌道を歩む如く自由闊達に進み得る。人が神を信じ、神を愛するの心にて人を愛して互に引合つて行けば、安定な人道が自ら踏み行かれるであらう。斯くして、人は不義に陷ることから免れ、そこに自然に正義があらはれ、愛の力に引かれつゝ義の道を歩む正しい人生がおのづと具へられて來る。

（二） 宗教と道德、法律との關係

地球自身が太陽の引力に依り始めて運動してゐることを悟る如く、人も亦神の力に依つて支配されて動いてゐることが悟り得るではないか。この直感が卽ち宗教經驗として現はれてくる。恰道に相當するのが道德であり法律であり、また人道である。故に、これらは太陽の引力に相當する信仰の力があつてこそ、始めてその存在が肯定し得るに至るではないか。

道德とか法律とかに囚へられて、神の愛を忘れ、神から離れるならば、直に無眞の亡びに跳ね飛ばされるは理の當然である。

世の有力者、知識階級者が、義の道を知り乍ら、神の愛を無視するから悟性が亂れ、情意の混亂を起し、結局盲目が盲目を手引するの愚を現はすのである。我々は神と人との間に結ばれた「愛」に歸らねばならぬ。さすれば法律や道德は、これをわきまへなくても、それを完うし得る力を宗教的信念によつて與へられる。

孔子の所謂、天命を知つて自ら矩を超えざる境地にも自然と達しうるであらう。我々は、キリストの宗教と科學の考察力によつて、孔子が七十にして達した處に三十にして達しうる道の備へられてゐる事を思はせられる。若くしてこの域に達し、餘生を人類のために献げ得て、初めて人間としての使命を完うせられる。その結果として眞の文化の進歩が生れるのではないか。そこに現代我々の使命がなくてはならぬ。

義の道は我々が神の愛の力に動かされるときに生ずる。拜すべき神を拜し、イエスの忠僕としての生活が出來さへすれば、愛と義の生活は自ら外にあらはれ、その人の全生涯を貫きそこに一切の人生問題を解決する鍵が與へられるであらう。

（三） 愛と義は左右の足てある

神の愛と神の義の二線をレールとしてその上を人生は動く。このレール上で起る事件が人類六千年の歴史であり、一切の人生問題である。

人生は、神の生命の流れの岸に植えられた一本の草木の生活の如きである、生命の一方の岸邊には

義の原理を、他の岸邊には愛の原理を控えてゐるように見える。この兩岸の原理は、同じ神の生命の水の力にて活動してゐるのである。人生の立場から見れば、愛と義との二相に見えるが、根本は同じ一つの神の生命に歸着する。

已をすてゝ他を生かさんとの愛は、義の形式によつて表現さるべきであり、また義のため倒れる人には自然と神の愛が注がれてゐる。

愛と義とは、前にも言へる如く人間の兩足の如きである。愛の右足が進めば、義の左足がそれを追ふて進む。こゝに靈の進歩と人間文化の發達が生れて來るのである。

我々が永遠の生命の本流に進むとき、必ず愛の右足が自然と出でねばならぬ。愛のあらはれは又自然と義の左足の歩みとなる。かくて愛と義とは不即不離の密接な關係の上に相互に働き互に助けて神へと向上の一踏を進む。

（四） 人生の根本要素たる愛と義

かゝる愛と義との兩足の進みが、その人の人格を聖め、精神的力を充實せしむる原動力となる。神の御許へと靈が進むには、必ず動かねばならぬものは愛と義との兩足である。中心點に近づけば近づく程引力は增し加はる。更に引力が加はれば、加はるだけ重さを增し加へる。人も神に接近すれば、それだけ愛の引力は增し加はり、それだけ人格の重さが增し加へられる。

愛と義の何れかゞ前進しないと人は神に近づけぬまたそこに生命の進展は望めぬ。

愛が盲目的に働くとき　或は義が嚴に過ぐるとき、そこに人生の行詰りが生ずるのは當然すぎる程の當然な眞理である事がわかる。私は小學時代に、坂上田村麿の話しを聞いて今も心に深い印象を受けてゐる。彼が義のために立つときは、嚴然として泣く子も默するが一度笑ふと幼子も共に笑ふといふ。この義と愛とを具備する一事が人生の根本要素である。

我々はこの生命の本流に沿ふて歩むとき、よしそれが富士川の如き急流であつても、途中に岩石が横つてゐても、末は洋々たる神の自由な惠みの大海に出る事が出來る。この流れに逆ふものは骨折のみ甚しく勞して功なきに至る。生命の本流から離れると、魚の水より離れた如く、人は轉々苦悶して遂に死に陷るのみである。

愛の船に義の帆を揚げ流れに順じて行きさへすれば、一切の問題は釋然として解ける。

安心立命とは、この愛と義との兩足の上に立つたときに體驗し得る平安と恩寵を云ふのである。

流れのまゝに漂ふ木の葉の如く、我々の肉體を神の生命の流れに投じて神と偕に歩むとき、人生の一切が榮化せられ、そこに靈の王國が地上に實現せられるであらう。

（五） 日本帝國の根本的救濟とイエスの宗教

今日の社會に於いて家庭の紊亂、社會の墮落、人心の腐敗の原因は一つに愛と義の亂用より生じてゐる。愛すべからざるものを愛する處に一切の墮落腐敗の直接原因がある。毎日の新聞記事の悲慘なる報道は何れもみな愛を不義の道に亂用したる結果ならざるはない。男女間の性愛の不義の亂用が家庭を破壊し、金錢に對する不義の執着愛が社會の秩序を紊し人心を墮落せしめる。權力に對する不義の愛が今日の政治界の腐敗を結果づけてゐる。勞働問題、小作爭議、社會問題の一切は尊い愛の用法を誤つて之を不義の道に用ひ、愛すべからざるものを愛するに歸因するではないか。

然らば、現代の日本を救ふべき唯一の道は、全國民を愛と正義の道に歸らしめる一事をおいて他にないことが明瞭となるではないか。愛と義とを打つて一丸となし、その奥に流るゝ生命に活かしめるものが即ちイエスの宗教であり、十字架の教である。

斯く考察し來れば、イエスが示した生命界の眞理が日本帝國の根本的救濟に對し如何に重大な關係を有するかを悟り得るではないか。

イエスの宗教と宇宙の眞理

（一） 太陽系の八星と天國の八憲法

山上の垂訓に於ける天國の八憲法を私は八つの鍵及び八枚のレンズに譬へたが、また之を太陽系の八つの遊星に譬へ得る。水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星及び海王星の八星が太陽を中心とし各自その軌道を廻つてゐる如く、十字架を靈力の太陽とし、その周圍に「貧しき心」「悲しむ心」「柔和な心」「義の心」「愛の心」「清い心」「平和な心」及び「殉難の心」の八星が取り卷いてゐる。この一團が即ちイエスの宗教體系である。而して地球や火星その他の八星はもと〳〵太陽の中に融け込んでゐたものが、分離したのだから決して別物でない。イ

エスの說かれた以上の靈界八星も單獨に働くものでない。これみな其の中心たる十字架の精神が分岐した一分身に過ぎない。故にその根本たる十字架の精神を失つたならば、八つの條件は之れ太陽なき諸星の如く、忽ち光を失ひ　遂には自滅崩壞より他に道がない。

十字架の太陽が背後に光つてゐてこそ、貧しい者も、悲しむ心も、愛と義も一切が生命づけられて來るのである。

太陽系に於ては太陽は大空に輝々と照り輝いてゐるが、十字架上に輝く靈的陽光は肉眼では拜せない。靈眼を見開き信仰の瞳を凝らして、視つめなければ見えない靈妙な光である。けれどもこの光が人の心に入り込まねば人と云ふ美しい草花は枯れ果て、生命の實は決して結び得ない。イエスの十字架上より不思議な光が照り輝やき全世界を照してゐる。その光に生命が宿り、之を受くる者は全て新生し、滅亡の世より不滅の新天地に移される。この光を受くるものは心に熱を感じ、それが愛となつて人類を祝福し、一つの生命が千百の生命を甦らしめる。

また、この靈の中心的本源に於ては生命の光が放射されてゐるのみでない、不思議な靈の引力が働いて周圍の小生命を運行活動せしめ、一刻も停止することがない。イエスより發し來る靈の引力を無視して、愛と義の協調生活を求め、見神の體驗を得んとしても、それは根のない草花から美果を得んとするに等しい不可能の事である。先づ御互はその中心點たる十字架の根本生命に立ち返り、その靈

の引力に引かるゝがまゝに、各自の軌道を驀進するより他に人には自由が許されてゐない。

全ての力がその中心たる「十字架」の太陽の中に集中されてゐる。故にこの十字架の奥に潜む中心點さへ握り得るならば、自然と他の八つの諸條件がおのづから生れて來る筈である。外面の形式に捕へられないで、御互は内部生活の中心點から出立して、自然と外面的生活が整ふて來る新しい道へと進まうではないか。

更に八つの星が太陽の周圍に一體系をなし、釣合を保ちつゝ微妙な調和の中にある以上は、その一つを缺いてならず、またその一つだけを取り離して動かすべきでない。全體が中心引力の支配、まゝに一團體として活躍する處に永遠の歩みがあり、天の生活を地上に成し得るのであると思はれる。

（二）八つの靈星は四軌道に還元さる

イエスの示し給ふた八つの諸條件を上の圖形に示す如き一體系として見れば、八つの星は四つの軌道に還元し得る。即ち八つの靈星は一軌道上を互に回轉する二連星と見て、その相互關係を考察し得るではないか。

（一）　最も外廓に立つ第一軌道上を運行する星は「貧しき心」と「殉難の心」である。この二者は一見相反する如く見ゆるも、十字架を中心引力とする一實體の裏と表とである。即ち自己を反省してその貧弱さを熟知し、嘗ては罪に死すべかりし筈の身をさへ斯く「救」と恩寵の中に、生を許され、

大なる恵を加へられるを現在の吾が身に注がるゝ神の愛を聖知し得るならば、その時こそ眞に吾身になつて神の爲に萬難を排して戰ひ、勇ましく殉難の死を遂げんとの覺悟が自ら湧いて來るではないか。第一の貧しい心の體驗なしに、第八の殉難の決心が徹底するものでない。

（二）第二軌道上の二連星は「悲しむ心」と「平和ならしむる心」との二つである。これも一つの眞理の表裏である。眞實心の奥底から悲しみ惱み、その苦痛を底の底まで味得させられると、人は決して再びその苦痛に近づき得るものでない。本能的にその悲しみから遠ざかり、反射作用的に苦痛から離れんとする。從つてその近因である怒氣、不平、猜疑、嫉妬から脱れて、平和を好愛し、何が何でも平和ならしめんとの努力が自然と湧いて來る。即ち悲しみの體驗なしには、平和ならしむる根強い心は湧かない。また一旦平和を確保し得た後にその平和が破れると悲しみを覺え、自然と再び平和へと歸らせられる。この二連星が調和協調して進む處に心の安住所を人は發見する。

（三）第三軌道上の二連星は「柔和」と「清き心」との二つである。幼兒の柔和な、自然な心で母を信じ、母に從ふ故に、母の心を誰よりも幼兒は明確に知り得る。流るゝ水が大地の引力の法則に柔和に從つて、大地の引力と偕に極めてすなほに動いてゐるから、流るゝ水の方向の中に大地の引力の方向を見出し得る。「柔和なる心」と「神を見る」ことゝは二つにして一つである。心が柔和にして神の道のまゝに任せて從ひ得るならば、心は止水明鏡の如く澄み切つて、神を明かに寫し得るに至る

であらう。

（四）第四軌道はこの一圏の中心點に最も接近してゐるだけ重要な意味を有する。この軌道上の二つの星は愛と義である。愛とは心と心の引力を云ひ、義とは愛を原動力として運行する道を云ふ。太陽の引力に引かれてゐない慧星は自己中心の歩みだから　正しい義の軌道を歩み得ず、遂には自滅する。けれども、太陽に引かれて動く星はおのづから一定不變の道道を歩む。神の中心引力から離れた愛は不義の道に陷り易い。今の世の愛が神を中心とせざるが故に、斯くも人心は墮落し、社會は崩壞し、自滅に陷りつゝあるは理の當然と言はねばならぬ。けれども神を中心とする聖い愛が燃え、神の愛が一切の自己を征服するに至らば、おのづから人は義の道を進むより他に道がなくなる。神の御座より流るゝ力に生くる者には愛は義であり、義は愛である。「愛即義」、「義即愛」。二者は不即不離にして一實體の裏と表であることが心から悟り得る。

右の四軌道中、中心に近い要素ほど強い光を受け、また生命の本質に密接なる關係を有つ。而してそれだけ偉大な力が與へられるから、之を確實に吾が身に體現する事が極めて大切である。愛と義との第四軌道は最も重要な關係を中心なる神に對して有することを忘れてはならぬ。

（三）八要素の相互關係

前節に於ては八要素を一軌道上を歩む二連星と見て四つに還元したが、更に之を一つの有機的組織

に迎えし得る。生きた身體の五臓八腑が各自獨立の要素ではあるが、之れみな一生命の支配下にある一機關である如く、八要素は一つの生命に支配されて活動する一有機的機關である。

第一の貧しき心より第二の悲しむ心をレンズとしてその奥を凝視すれば、神の柔和な姿が素直に見えて來る。第二の悲しむ心を眼鏡（アイグラス）とし、第三の柔和をレンズとして窺へば神の義の像が明らかに映じて來る。第三の柔和を眼鏡（アイグラス）とし、第四の義の道を望遠鏡の管となし、十字架を對物レンズとして凝視すれば、愛なる神の御姿が太陽の輝くやうにまざ〳〵と眼前に現はれて來るではないか。

また第八の殉難の心の眼で、第七の平和ならしめんとして努力すれば、自ら邪心去り心聖まつて神が見へて來る。第七の平和な心より第六の清き心のレンズを通して見れば、第五の聖愛の光が陽光を拜する如くに仰がれるではないか。更に第六の聖い心の人が第五の聖愛の光の方向に眼を注げば、神

が罪人の爲にその獨子を賜ふほどに人類を愛し給ふことの親心が太陽の如くに輝いてゐることが明かに拜せられるではないか。十字架上のイエスの御姿が、その光の投げた影として凝視される。十字架は實に神御自身の自現である。神の御光の焦點である。この光なしには、他の八つの星は全く光を失ひ暗黑になつて終ふ。これ太陽を失ふた地球や火星が、その光を暗くし、存在の意義を失ふと同理である。太陽があつてこそ、八つの遊星が光を得、一切の生物が生命を保ち得るのである。神の光に生き、神の光を反射する器となつてこそ始めて上述の八要素に生命が進り込む眞理が悟られるでないか。げに、イエスが身を以て啓示し、血を流してまで保證された十字架の愛こそ、生命の本質の最後の扉を開くべき鍵であり、神の生命の迸り溢れる源泉である。

（四）宇宙の眞理と、イエスの宗教

現代科學の極致は電子論に於いて盡きる。電子論により物質的宇宙の眞理は闡明せられ、幾千年來人類への大きな謎であつた『物質とは何ぞや』との大問題は釋然として氷解さるゝに至つた。この眞理の光の下に照り返して見ると、物質と見えたものこそ實は力なる電子團の影であつたのである。物質と云ふ表面の幕を一枚めくつてその奥を凝視すると、物質と思つた「物」の一切は影を消して、ただ「力」のみの世界が輝やいて見えて來る。而もなほ更に微妙な調和が宇宙の中に存在してゐる。それは吾等地上の人間が明らかに知り得てゐる極大の太陽系の構造と極少の原子内部の構造とが、符を合

したやうに一致してゐることである。（拙著、自然科學と宗教參照）。太陽系は太陽を中心に八つの遊星が互に釣合を保ちつゝ永遠へと微妙な歩を續けてゐる。永遠に不可分解だと思つた元素中の酸素は八個の電子が陽電子の周圍を八つの星の如くに廻轉してゐる一個の電子團に過ぎない。イエスは今靈界の八星を吾等に示し給ふた。

太陽系と電子團と天國への八門とが微妙にも互に相通ずる體系に造られてゐるのは實に大きなる神秘ではないか。これこそ宇宙自身が大音聲を張りあげ、呼び出てゝをる無聲の「言」でないか。

太陽よりは「光」を受けて萬物が生命の糧を得、地上を包む電子團の酸素よりは一切の生物が肉體の生命を持續する力を與へられてゐる。萬物の靈長たる人間は更に進んで以上學んだ八視福により永遠に活くべき心の糧を戴かねばならぬではないか。即ち地上の人間が眞の人間として生くる爲には、どうしても以上の三つの力を受けねば生きられぬことを悟り得る。第一には、太陽の光よりエネルギーを、第二には電子團より物質的糧を、更に第三には神より靈的糧を得なければ人は死する。靈的糧を取らざる人は肉體がよし地上に蠢動するも實は神の前には死せる形骸に過ぎない。吾等は酸素を呼吸して刻一刻生命をつないでゐる如く、祈りにより聖靈を呼吸して刻一刻永遠の生命へと活きて行かねばならぬではないか。

丁度人體に肺臓、心臓、胃腸、口、鼻、耳、眼、手、足等の諸機關が具はつて始めて、生き得る如く、「貧しき心」「悲しむ心」「柔和なる心」「義を飢え慕ふ心」「愛の心」「清き心」「平和ならしむる心」及び「殉教の心」の八臓腑が備はらねば、神の生命がその人の心の中に漲るものでない。この準備が心に具備された後に、「祈り」に依つて内部の靈魂が神の聖靈を呼吸し出すと、そこに驚くべき力が溢れ漲り、神の力が人の中に宿るに至る。こゝに於いて有限な人生五十年が一變して無限なる神の生命の一閃光明と化するに至るであらう。

イエスは斯くも底知れぬほどの深い靈界の眞理を、ガリラヤ湖畔の山上に於いて弟子達を對手に開口一番語り出でられ、天國の門を開き給ふたのである。然もなほその天國の門は諸君の前に今なほ開かれてゐる。ただ以上の道理を確信し、この狹き門をくゞる者のみが新らしき天國へと移される。而してその人には永遠の生命の月桂冠を與へられ、天國に於ける歡喜と光明と勝利とに滿ちつゝ、この地上生活を爲し得るのみならず、そのまゝ天國の生活へと移されるではないか。

滅亡の十字街路に彳む御互七千萬同胞の一人〳〵が危き淵より、今直ちに廻れ右して、イエスの靈的眞理の道に來り新生命文化創造の第一歩を勇ましく踏み出だそうではないか。

人生の目的

（一）汝等は地の鹽、世の光なり。

私共が山上の垂訓を讀む時、その論旨の整然として行き届いてゐる事は實に驚くばかりであるが更に之を繰り返し繰り返し讀んでゆく時、私共の體驗と相俟つてまことにその教の要領を得て居る事に感服せざるを得ない。序論に相當して八ツの幸福が述べられてあり、我々はそれによつて眞の人間としての資格を神より得るには如何にすべきかの條件を學んだ。次にその後の句に於て我々が神と人とに對する義務關係を明瞭に學び宗教の意義を知らんとする。己自身が何のために此の世に生きてゐるか、又「人生の目的は何か」との大問題を極めて明確に手に取る如くイエスは私共に教へられて居られる。汝等地の鹽なり、世の光なりとは實に言は簡單なれども意味は深長である。

地の鹽とは地上に生れて社會的になすべき義務を意味し、世の光とは人の神に對する義務を意味する。宗教とは地上の人が宇宙の本質なる無限の神と神人合一の實感をもち、その力を實社會にあらはして行爲となれるものを云ふのである。故に「汝等は地の鹽、世の光なり」との教はそれだけで宗教の完全なる定義を言ひ現はしてゐると考へられる。カントの哲學、シュライエルマツヘルの神學を學ぶ

に優つた教であつて、學究的思索で得られぬ尊い生命を此所に見出す。我々が地の鹽となり、世の光となる所に凡ての生活に價値を見出し。人生の目的が達せられることを信ずる。

（二）地の鹽とは何を意味するか。

汝等は地の鹽なり、鹽もし効力を失はば、何をもてか之に鹽すべき。後は用なし、外に棄てられて人に踏まるゝのみ。

先づ『汝等は地の鹽なり』の一項に就いて學んで見たい。

第一、鹽は無言であるが、一塊の鹽が水中に投ぜられると自己が全く消え失せて後に水全體に自分の味を與へるのである。

人間が偉いか偉くないかとの標準は何か。人の價値は何によつて定まるか。世間で云ふ金の有無、學識の程度、將又賢愚の差に依るか。他なし眞個の價値は鹽に於ける辛味の如く、人間に人間味のある事である。鹽が無言の中に自分の立場を捨て、形を失つて後に水に味を與へる如く、我々も沈默の中に人間の人間味を社會といふ水に與へるために自己を沒却して十字架を負ひ、献身的に働くのでなければ人としての價値はないのである。私達が獨善主義で他を顧みぬなら、例へ自分の心の中に優れた考をもち、又自分一個の行爲が正しとするも、社會全體から見て何等の價値もなくなる。イエスの所謂「我が汝等を愛せし如く、汝等も互に相愛せよ」と云ふ即ち社會全體に味を與へる仕事をせぬなら

ばその人の價値は零である。支那の道教は一種の獨善主義である。それは鹽が鹽の辛味を與へぬと同様、社會的に何ら價値もないことになる。支那人の現狀もこの獨善主義の結果である。日本の今日の行き詰りも然りである。我々はどうしても神から受けた人間の味を全人類に及ぼさねば、人として此の世に生れた價値がなくなるのである。御互が全人類社會に對して神から與へられた味を與へぬならたとへ、内部が如何に富み、且つ充ちても價値がないことになる。隣人を己の如くに愛する所に人の價値を見出すではないか。

第二、鹽は腐敗を防ぐものである。我々の存在が無分でも社會の間に、友人間に、家庭間に醸された腐敗を防ぎ清める必要がある。其のために何等かの役に立たねばならぬ。

第三、鹽は風味を與へ、鹽梅を與へるものである。私共各々が存在してゐるために、周圍の人々においしい味を與へることが必要である。一人ゐることがその周圍の者に春の陽々たる百花爛漫の長閑な氣分を與へるのでなくてはならぬ。一日生きてることが眞の人間らしい風味を與へなければ存在の價値がないのである。

第四、鹽は御祓ひの時聖める爲に用ひられる。私共が消極的に腐敗を防ぐのみならず、風味を與へ更に御互は積極的に他人の心を潔め、社會の腐敗を清潔にする任務に從はねばならぬ。

第五、鹽は人の生命を維持するになくてならぬものである。昔、白隱禪師は蕎麥粉と食鹽丈しか食

べてゐなかつたが、若者に優つて山中を走つたさうである。或古老の話に維新當時奉行所に一人の小使がゐて、人一倍よく働くが月給は一圓五十錢で、それより多くは貰はふとせず、毎日快活に暮してゐたさうである。或時、あまり不思議なので宿直の時注意して其の容子を見てゐたが、別にこれといつて食事の仕度もせず又その道具もない樣である。但し時々松の新芽と爪の先位の鹽を嘗める丈である。試みにその小使を甲州まで飛脚に立てた所、返事を持つて歸つて來るに僅か二日しかかゝらなかつたと云ふ事である。少くも一日三十五里以上走つた事になるのでまことに人間業ではない。そんな偉大な力が僅かな鹽から湧き出る如く、我々誠に小さな弱い者であるが神の聖手により活用さるゝならば、社會國家の生命ともなり得る事を信じ得るではないか。私共一個は小さいが、鹽の辛味の如く人間味を有し、且つ社會に生命を與へる事があつてこそ、始めて大きな價値を社會になすことが出來るのである。

第六、以上は鹽が私共に與へてゐる教訓であるが、その裏面に潜む教を布衍して我々の生活に當て嵌めて見たい。

（イ）私共の生活が神の恩寵で味つけられ、又私共の言葉、思想、私共の一切の愛が神の大きな愛によつて味つけられてゐたい。神の惠の鹽を以て御互の生活に辛味をつけてゐるであらうか反省すべきではないか。

（ロ）始終キリストの知識と愛とで味つけられて居らねばならぬ。

（ハ） キリストの教は人に味を與ふるもの故、若し私共が神の心とその愛の味がないならば未だ神の味を受けてゐないのだから直ちに之を受ける用意をしたい。

（ニ） 鹽が積極的に風味をつける如く、惡をせぬ丈でなく積極的に進んで善を行ふものとなつてゐたい。

（ホ） 鹽を用ふる時は食物の上に方々に撒き散らす。我々も彼所此所と逢ふ人毎に神の恩寵を與へ、慰め勵ましてゆくべきではないか。

第七、最後に若しも鹽が辛味を失ふならば砂と同樣に棄てられて了ふのである。而も砂は役立つ所があるが辛味いなくなつた鹽は何の用もなさず、地に棄てられて人に踏まるゝのみである。同樣に人間が人間味を持たぬ時は、人として何等の價値もなくなり、世に棄てられて顧みられなくなるのは當然である。人間味を失つたものは動物中の最惡なものである。神より與へられた人間味の愛を社會に與へぬなら、人間として生存の價値を失ふのである。我々は病氣になり、また迫害を受けても、たとへ萬難に圍繞されようとも、この人間としての鹽の味を失はぬ事が大切である。神の愛をもて全社會に味をつける事が人間の使命であり、目的であらねばならぬ。

（三） 世の光とは何を意味するか。

『汝等は世の光なり、山の上に建てられたる城は隱るゝことなし。又人は燈火をともして桝の下に置

かず、燈臺の上におく、斯くて燈火は家にある凡ての物を照すなり。』（馬太傳第五章十四節）

『斯くの如く汝らの光を人の前に輝かせ、これ人の汝らが善き行を見て天に在ます汝らの父を崇めんためなり。』（馬太傳第五章十五節）

人間の地上に於ける生活の意義目的が此所に示されてゐる。地上にあつて鹽となり、天に對しては世の光となる樣、各々が地上に於て使命つけられてゐる。輝く燈火は桝の下におかず、人之を燭臺の上において室内の全部を照らす。光を輝すとき、人は之を認めて全社會の儀表とするであらう。實力なきにも係はらず、大きく見せかけんとしたり、低い地位にありながら、他を押し退けて高きを得んとする者の多い現代に於て、この一言は最も味はふべき語ではないか。我々は山上の城の如く、神より與へられたる光をありのまゝに、輝かせたい。決して僞善者の如き行爲をしてはならぬのである。

次にこの一句の中から教訓を學んで見たい。

第一、汝らは世の光なりとあるのは、神と地上の人との關係をあらはしてゐるのである。

私は此の教訓を斯く云ひたい。人は天の光を輝す一枚の鏡面であると。天より來たる光を反射して初めて鏡より光が出る。天の光を反射する地上の鏡としての自己を見出す時、人は光を發するのである。我々は如何に地上の生活に努力しても鏡の面を地に向けてゐては、切角の仕事も倒にもならなくなる。汝の心の鏡を天に向け、百八十度廻轉せよ、と教へてゐられるのである。

第二、然らば地上に天の光を反射する目的使命は何處にあるか。光は暗黒を照らす。自分だけを照らす燈火となるのでは、光としての價値がない。周圍を照す所に光の價値を生ずる。我々も暗きに惱む人々の心を照す愛の業を勵んでこそ、始めて社會人として活きる價値が生ずるのである。暗い所から見て光りの射し込んで來る時位、うれしいものはない。光の價値は暗黒に悶えてゐる人でなければわからぬ。重い病氣で夜一人さびしく苦るしむ時に、ほのぼのと朝日の窓に射して呉れる喜びは何事にも勝つて尊いものである。暗い人の心に光を與へるに勝つた大きな價値ある奉仕はあるまい。暗黒に悶えてゐる人の貰つた事程、尊いものはない。永遠への仕事とは斯る愛の業を云ふのである。此間暗黒に泣く一友人から手紙が來たが、それによると始めてお目にかゝつてから二年經つが最初會つた時二人で膝まづいて神に祈つた其の時程うれしいことがなかつた、と云つてゐる。私の物質上の仕事は鑵て容の容に消え去るであらう。併し、人の魂を救ふ仕事は此の地上への、永遠に光り輝く置き土產である事を信ずる。幾分でも惱める友に神の光を傳へる管とさせて頂きたい。暗きに惱める者の爲、艱難辛苦をなされたイエスの如く、我々は果して日々愛に燃えて奉仕の生活をしてゐるか否か猛省しなければならぬ。

第三、光は人の生命である。光なしには人類否全生物は生きてゆけぬ。人類の一員として神の光を反射する者がなければ世は暗黒の亡びに陷るのである。光を反射するものの一人の存在は、天の光の實

在を證明する。小さいなから、神の光を反射する者とならねば、人として地上におかれし價値がない事になる。我々は生きてゐる限り、社會に生命を與へるものとなりたい。常に生命の糧を社會に與へてゐるか否か、內省すべきではないか。

第四、光は隱れたる所を明らかに照し出す。見えざる世界の事柄を明らかに見ゆる樣にするのが我々の務である。徒らに先人の跡を踏むのでない。更に前人未踏の地を開拓して人に示すべきである。神の具へ給ふ道は計り知れない、我々はこの隱れた寶を明らかにするやう果して今働いてゐるであらうか。どうか。

第五、光の線は放射によつて四方に發散する。周圍から見れば、その光線は一點に歸する。人生の一切の生活も神の一點に集中されて居らねばならぬ。

第六、地上に於ける鏡が反射する時、硝子が見えず、光だけ見えるのである。神の光を反射する時、自己はかくれ神の御姿が現れるべきである。一切のことを神の榮光の爲に働きたい。眞に謙虛な心は此所から湧き出て來る。是が撤底した謙遜である。地上の生活は神の榮光を表はすための生活でなくてはならぬ。

第七、光を得るためには、我々は如何にすればよきか。火の燃えぬ所に光は發せぬ「聖靈汝の上に臨む時、汝能力を得べし」光ある生活は聖靈の油を溢るゝばかり注がれて、焰々と燃え上る一事である

ジョン・バンヤンの天路歴程に「神の働をする人の背後には、必ずイエスがその人の心に油を注いでゐる事を知つた」とある。我々も絶えず神に祈り求めて燃えてゐなければならぬ。いつも心にイエスからの油を受け入れる立場にあらねばならぬ。

人間として生れ來つた以上、我等の最大問題は「人生の目的とは何ぞや」との一事の解決である。哲人は言つた。「人は使命と共に誕生したのだ」と。然るに現代人は如何にせば金錢を儲け、また如何にせば自我を滿足せしむべきかの方法は熟知してゐても、何の爲めに吾等は斯く生きつゝありやとの人生の目的に就いては全然無智なる人々が大部分を占めてゐる。試みに人ありて諸君に「君は何の爲めに生きておるか」と詰問された場合に、「人生究極の目的はこれなり！」と明答し得る人物が果して幾人あるであらうか。人生の目的を知らずして、たゞ物質と智識をのみ所有する人は、是れ石炭と貨物を滿載して、舵を失へる一叟の船に均し。やがて巨颱怒濤の中に翻弄されつゝ沈沒する外に道がないではないか。目的なき人物は存在の價値を有しない。また目的を誤つて奔馬の如く荒れ狂ふ人物ほど危險なるはない。人生の目的は、實に、天の父の完全なる靈的愛を目標となしつゝ、人間の特質を宇宙的に發揮する一事にある。鹽に辛味あり、光に光の特質ある如く、人間は人間としての特質を發揮すること、この一事が人生究極の目的である。

社會改造の根本方針

『われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな、毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり誠に汝らに告ぐ、天地の過ぎ往かぬうちに、律法の一點、一畫も廢ることなく、悉とく全うせらるべし。この故にもし此等のいと小さき誡命の一つをやぶり、且その如く人に敎ふる者は、天國にて最小さき者と稱へられ、之を行ひ、かつ人に敎ふる者は、天國にて大なる者と稱へられん。我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者、パリサイ人に勝らずば、天國に入ること能はず。』（マタイ傳第五章、一七――二〇）

（一）毀つにあらず、成就せよ。

我々第一に八つのブレッシングに於て天國の憲法を學び、第二に人生の目的として地の鹽となり、世の光となることを敎へられたが、第三には、この聖句によりて我々のとるべき人生の根本方針を此處に見出すことが出來る。

こゝで、從來にあつた社會に對して新しい神の御國を建設すべき方法、態度を敎へ示してゐられる。我々が第一、第二の敎へを遵奉しても此の第三の敎に從はなければ天國を見た目に映ずる此の世の姿

の餘りにも醜きに唯むやみに之を覆さうとあせりたくなるであらう。或は新舊思想の衝突に耐へられなくなるであらう。我々は現代社會のこの矛盾を如何に正す可きであらうか？　人類の歴史はこの矛盾を取り除かんとしての不斷の努力を示してゐる。文化然り、戰爭亦た然りである。

「毀つために非ず、成就せんためなり」とのイエスの教は、つねに重大なる意義を含んで我々に迫つて來る。勿論古人の糟粕を嘗めるのみが吾人の生きる所以ではない。單なる先人踏襲のみにては其處に我々の生命を見出し得ない。生き甲斐ある生活を欲するならば、從來の黴の生へた汚れたものを打壞して新時代を建設すべきである。而して唯此際我々の躓き易い、また誤り易い點は何等の計畫もなく唯無暗に破壞せんとあせる一事である。御互の周圍の個々の問題にも屢々こうしたことが起る。我々は事を成さんとする時はそれをなすに先立つて充分注意を拂ひ、毀つは成就せしめんがためであることを絶えず念頭にをかねばならない。一旦破壞する以上、必ずやそれよりも、より善きものを生み出さねばならない。寧ろ我々は新しいものを建設せんと努力する時、その必然の結果として誤れる古きものを捨てるやうでありたい。唯「ぶつこはし」をのみ事とする所には、ぶつこはさない以前に必ずより惡い結果を齎らす事は古來の歴史が最も明瞭に語つてゐるではないか。

（二）　處生の金科玉條

我々は此の聖書に教へてあるイエスの態度を金科玉條として守りたいと思ふ。今日の政治家がお互

に爭ふのは唯反對せんがために反對する場合が少くない。されど反對せんとならば夫はより善き物も產み出すためでなければならぬ。我々が新しい事をなさんとする時は、その實現の可能を確めた後でなければ古きものと雖も直ちに捨てゝはならない。御互が實際問題を處するに際し、いつでも先づ一歩退いて考慮し、若し誤つて最も惡い結果を生じたとすればそれはかく〳〵になる、而して假令そんな結果になつても此事はやらないよりやつた方が良い結果を得る事を確めて後着手するがよい。そしてその最惡の場合が從來より惡い場合が起るとすれば、幾分でもよくなることに努力してから後、始めて實行すべきである。斯くするならば事業は必ず堅實に發達を遂げるに違ひない。我々が新しい生活を始める時には、いつでも凡て此の注意を守つて進み度い。

イエスは「何を食ひ、何を飲み、何を衣んとて思ひ煩ふな。汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給ふなり。先づ神の國と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。この故に明日のことを思ひ煩ふな。一日の苦勞は一日にて足れりと教へてゐ給ふ。我らは斯の如き絶對の信頼を神に置き、一切萬事をその聖手に委せつゝ、而かも全力を盡して努力致したい。

人間が人間の側の最善を盡す時、神は神の側の最善を盡し給ふからである。

（三）　善より最高善へ

また此處で教へられてある通り、神の與へた律法の一點一畫だに人間は之を毀つことは出來ない。

吹く風と雖も止め得るであらう？　地震を絶滅する事は人間には不可能だ。大宇宙のプログラムは人間の生死は悉はずに、悠々として進行してゐる。我々はこの自然の運行、神の御計畫を成就せしめんがために、この大宇宙の運行に機械油の一滴を差す程の努力しか出來ないのである。それ以上の干渉しようとするのは神を冒瀆することになる。然るに、いと小さき事であるからと言つて人の微力によつて神のなし給ふプログラムを破らんとする者は、天國に於てはいと小さな者とせられる。如何に小事なりと雖も神のなせと命じ給ふ儘をなす者は天國にて最も偉大なる者である。

學者、パリサイ人は律法や學問に通じた律義一遍の人であつた。そして地上の風習に捉はれて神の御胸を第二と考へてゐた者である。處がイエスは從來行はれた善事を守るだけでは足らぬ。更により大なる善へ、より高き道德へと進むことを敎へてゐ給ふ。救世軍の古い兵士で足袋業者の話を聞いたが、彼の町は日本の足袋の幾割かを供給する所だそうで、近來組織的な機械製足袋のために壓迫されつゝあるが、彼の店は格別の事もなく相變らず繁昌してゐるとの事である。それは唯彼が凡て救世軍流にやるからであると言つてゐる。いつも世の風潮によつて値を上下する事もせず正直に商賣をするからである。只神の前に誠實と熱心とをこめて働く所に惠みと勝利とが生れて來るのである。更に更によい品物を多く作りたいと彼は言つてゐた。此恩惠こそ正義の賜であり、神を知る者の特權である。

愛と正直は最後の勝利である。我々の正義は從來の人々の正義の上に出でねばならない。更に高い標準

の正義を實行する者のみ天國に入り得るのである。その時こそ彼は初めて地の鹽、世の光となり得るではないか。何卒我々は新しい事をするとき、毀つために非ず、成就せんことを念願において、最高標準の善の爲に戰ひたいものである。

社會改造實現の基礎原理

古の人に「殺すなかれ、殺すものは審判にあふべし」と云へることあるを汝等きけり。然れど我は汝らに告ぐ、すべて兄弟を怒る者は、審判にあふべし。また兄弟に對して、愚者よといふ者は、衆議にあふべし。また痴者よといふ者は、ゲヘナの火にあふべし。この故に汝もし供物を祭壇にさゝぐる時、そこにて兄弟に怨まるゝ事あるを思ひ出さば、供物を祭壇の前に遺しおき、先づ往きて、その兄弟と和睦し、然るのち來りて、供物をさゝげよ。なんぢを訴ふる者とゝもに途に在るうちに、早く和解せよ。恐くは、訴ふる者なんぢを審判人にわたし、審判人は下役にわたし、遂になんぢは獄に入れられん。誠に、なんぢに告ぐ、一厘も殘りなく償はずば、其處をいづること能はじ。（マタイ傳第五章二一――二六）

（一）怒は殺人と同じてある

こゝで古の人とはモーゼのことである。舊約時代にモーゼは恰かも佛教の戒律に相當する律法十條をイスラエルの國民に與へた。そして民等はその律法を拳々服膺して守り來つた。併しイエスは新に教へられる。從來の教へだけでは足らぬ。兄弟を怒る者は審判にあふべしとイエスは仰せらはた。怒を發するだけでも審判を受くべしといふこに深長なる意味がある。怒を發せぬ人はまた人を殺す事はない筈である。殺人の動機なる怒を除けば、殺人は跡を絶つのである。怒にまかせて兄弟を悪口し、罵言怒號する所に鬪爭が起り、遂には殺人をも敢てするに至るのである。人を嘲罵する不遜の言を吐することがそれ自身既に悪いのである。祭壇に供物を捧げるとき、人に恨まるゝ事を思ひ起さば、供物をする前に兄弟と和睦してからせよと丁寧に教へてゐ給ふのである。之は私達の心の中に怒り怨みの如き汚れた心を持てるまゝ神の前に額づいて捧げ物をしても清き心を欲せらる神の前には何等の價値もないことを教ゆる。先づ我々の心の汚れを去つて清い心を以て、神に献物をするのでなければ、神は我らの供物を決して受けて下さらない。

（二） 現代社會の病根

今日の社會では法律に囚れず、世の習慣にさへ悖らなければ心は如何に汚れてゐても敢て頓着しない。更に甚しきに至つては如何にすれば法律に抵觸せずして悪事をなし得るかと苦心しつゝある者もある。社會の罪悪は此處から生ずるのである。かくして彼等が法網を潜りつゝ私腹を肥して得々たる

時、その陰には欺かれたる幾多の無智なる良民は泣き呻いてゐるではないか。かゝる者はイエスの前に出たら慚愧して面を向け得ないであらう。モーゼは神と面を合せて物話つたと舊約聖書は記してゐる。神を仰ぎ神の御前に善事を行ふ者のみが神と語り得、またキリストに向つても面を合せて物語り得るのである。それも形式のみの善行では價値は全く零である。

「改むるに憚る事勿れ」である。悔ひ改めて和解せよ。一厘でもごまかさずにかへせ。さもなければ完全な救は得られないとイエスは教へてゐ給ふ。私共は形式の生活を捨てゝ心から神を見上げる眞實の生活を營まねばならない。

（三） 形式より生命の奥へ

我々は前回に於て社會改善の根本方針を學んだが、その改造の根本方針が示された後には、如何にして之を實行すべきかの問題が起るのである。その根本方針實現の鍵は何か？　イエスはそれに對して「見ゆる形式の奥の見えざる力の根源に觸れよ」と叫んでゐるのである。殺人の根源たる『怒』を除けと叫んでゐるのである。モーゼの十誡は形式の問題である。形式のみでは駄目だ。その奥の根源に溯らねばならない。今日我々が取り扱ふ科學の研究態度たる、見ゆる現象を通して見えざる眞理を探求する事を、イエスは二千年の昔に教へてをらるゝのである。ヴアルブから水が出る、出ないのを問題として論ずるより、先づタンクに水があるか無いかを吟味し、更に水を如何にして入れるかを考へ

なければならない。今日の我々には受けるべき器は出來てゐても、盛るべき生命が欠いてゐるのであり、清潔、道徳、教育一切の器は備へられてゐるが、内容が空虚のまゝ殘されてゐるではないか。

（四）現代日本は空家の文化

今や日本は蜘蛛の巣のはり廻した空家の文明である。其處に天の使を招き迎へねばならない。空虚なタンクの文明に天來の眞清水を注ぎ込むべきである。明治以來の形式文化に生命を吹き込めよと天來の聲は響き渡つてゐる。イエスは「すべて此の水を飲む者は、また渇かん。然れど我があたふる水を飲む者は、永遠に渇くことなし」とサマリアの女に言つてをらるゝが、日本にこの永遠に渇かぬ水を注ぎ入れる事が我等現代人の義務であり、また最大の責任である。

我々はどうしても見ゆる表面の生活より、見えぬ心の生活に入らねばならぬ。私自身顧みて慨悔してゐるのであるが、長い間度々人を叱る心が攻めよせて來て苦るしんだのである。處がある時宅の下女が湯呑に入れたお茶を客の前でこぼして赤面した時に私は自らを反省した。自分も彼女と同樣の恥づかしい事を仕終してゐるではないかと教へられ、それ以來大に祝福をうけた。折角神より心に盛られた平和の眞清水を一寸した社會からの惡口で、一寸した感情の行違ひや、一寸した間違ひから浪を立てゝこぼすことは眞に恥づべき事だと悟つた。私は死ぬ迄、今盛られてゐる歡喜と心の平和の清水をこぼさないで持ち續けて行きたいと願つてゐる。それからは段々怒るといふ罪の根が日に月にとり

去られて行つたことを覺ゆる。今まで穢い心を持つてゐたのがキリストを信じ、聖書を學ぶやうになつてから、その醜いものを除かれて清い心を與へられた事を感謝してゐるのである。御互は「殺す勿れ」の形式を突破してその原因の罪の根を取り去らうではないか。

我々の修養は家の蜘蛛の巣をとり拂ふだけで滿足し勝ちであり、また道德的修養はそれ以上に一歩を進める事も出來ないが、巣をとり拂ふだけでは折角拂つた所に直ぐに再び蜘蛛が巣を張つてしまふ。蜘蛛の巣を取拂ふのみならず、蜘蛛自身を退治して仕舞はなければならないではないか。その蜘蛛自身を滅す救の完成を己の心の中に、家庭に、國家に、また全人類に及ぼしたい。その時こそ始めて神の國を地上に建設すべき基礎工事が刻々積み上げられ來るのである。

罪惡に對する態度

「姦淫するなかれ」と云へることあるを汝等きけり、されど我は汝らに告ぐ、すべて色情をもつて女を見るものは、既に心のうち姦淫したるなり、もし右の目なんぢを躓かせば、抉りて棄てよ、五體の一つ亡びて、全身ゲヘナに投げ入れられぬは益なり。もし右の手なんぢを躓かせば、切り棄てよ、五體の一つ亡びて全身ゲヘナに往かぬは益な

り。また「妻をいだす者は離縁狀を與ふべし」と云へることあり。されど我は汝らに告ぐ、淫行の故ならで其の妻をいだす者は、これに姦淫を行はしむるなり。また出されたる女を娶るものは、姦淫を行ふなり。（マタイ傳第五章二七——三二）

（一）罪に勝つ道

我等が人生の目的を立て、それを實行實現せんとする時その方針を根本より破壞せんとする罪惡が心の中に起つた時の態度、その處置を如何にすべきかを此處で學ぶわけである。

凡そ宗教にして人間の罪に對して之に克ち得る力を與へ得ないものは眞の宗教とは言ひ得ない。迷へる者を導き、眠れる者を覺し、誤れる者を正し、罪に惱む者を悔ひ改めしむる力が存するのでなくては宗教は存在の價値と意義とを失ふて終ふ。唯眞理を眞理と見究はめる點に於ては科學も、哲學も、宗教も、何ら變りはない。科學も哲學も形而上及形而下の眞理について論ずるが、心の奥の罪の根を抉り取つて聖める點には少しも觸れてくれない。科學にせよ、哲學にせよ、將た倫理、道德にせよ、ほんとうに力の足りない點は此處に存するのである。

宗教は丁度大砲の火蓋を切つて戰爭すると同樣、罪惡に向つて挑戰する。罪惡に打ち勝たしむる力の偉大な宗教はより優れた宗教だと言ひ得る。此意に於てキリスト教は佛教に勝り、儒教に優れてゐると思ふのである。孔子は「不善改むる能はず、之我が憂なり」との弱い己を悔ひてゐた。王陽明も

また「山中の賊を拂ふは易く、心中の賊を平ぐるは難し」と嘆じてゐる。後年單なる形式にのみ難行苦行を續けて戒律を守つた佛僧に俗よりも俗惡なる不善の行はれたことが決して少くない。キリスト教はその哲理に於て佛教程深くは觸れてゐないが、罪惡に對する態度に於ては最も優れたものである。私共宗教を信ずる者は己が罪を見凝めて己に克つて行くのでなくては信仰の意義は失はれる。パウロは「行ひなき信仰は死なり」と言つたではないか。キリスト教の存する所に罪の悔改めが伴ふのは、強い光が照りつける處に微菌が絶滅するよりも更に至當の事實である。法律、道德で認めぬ罪をも罪としてよく之に打ち克ち、聖潔の惠みを受ける所に根本的の救が存する。

（二）罪より聖められること

カントの時代まで人間の理想は眞、善、美であつたが、最近ではこの三つに「聖」を加へねばならぬ事を悟つた。「聖」を欠いだ生活は眞の人生とは言へないであらう。Pure and holy な生活は人生の最も肝要なる要素である。哲學思想は「眞善美」の三つを教へてゐるが、「聖」を說くものは獨り宗教のみである。その聖なる心を體驗する準備として罪の根を決り出さねばならぬ。その態度をイエスは此處に教へてゐるのである。罪の代表的なものは酒と色である。多くの罪惡は男女間のみだらな關係から起る。イエスもその事を第一に述べ、姦淫の罪を擧げてゐるのである。「姦淫する勿れ」とモーゼが教へてゐるが、行爲に於て姦淫するのみならず、色情を抱いて女を見る心持ちが既に姦淫の罪

犯したものと同じに神の前には審かれねばならない。罪は必ずしも表面に現はれた結果によつてのみ論ずべきではない。その心の中に根を張つてゐる罪の原因それ自身が大きな罪惡であると敎へてあるのは偉大なる卓見である。心の中で犯した罪は、實行に現はれた行爲と同樣である。と斷ずるのが神の法則であり、信仰の標準である。

神の前に罪赦されて、淸められる、ことは、罪を行ふべき不義の愛がその方向を一轉して正しい愛の人となることである。酒を飲まう、肉慾に耽らうといふ卑しい心が積極的に神の愛に燃へて來るから穢れた心が自然と起らなくなるのである。イエスは心の根本の聖潔を體驗せよと敎へてをられる。私共の心の中に汚れた思ひを蓄へず、絶えず神の淸い心に滿されてゐなくてはならない。其處にお互の修養の根本義があるのである。「若し汝の右の目、または右の手汝を躓かせば取つて棄てよ」仮令五體の一つを失ふもと全身が地獄の火に陷入ることよりは救はるは幸福なり」とイエスは絶叫しておられる。我等はかく迄嚴重に罪を憎まねばならない。斷然之と戰はねばならない。絶對に罪惡と妥協するな！　惡魔に降參するな！　犧牲は如何に大きくても、どんな困難苦痛が伴つても罪惡に挑戰せよ、惡魔に反逆せよ。

誘惑に會はぬ時はさうでもないが、誘惑に遭遇してから、ふりかへつて見ると實に自分程弱い者はない事がしみじみ知られる。我々は神に祈り、祈りに祈つて惡魔に打ち克ち得るのである。一切の誘惑に

九ち得る力を與へらるゝ宗敎を把握してこそ初めて人生の眞の幸福と勝利とを體驗し得るのである。

（三）　互に愛を負ふの他何物も負ふな

又「妻を出す者は離緣狀を與へよ」とモーゼが言つてゐるが淫行の故ならで妻を出す者は之と姦淫を行はしむるのである。淫行のある時は離緣狀をきつぱり與へよと言つてをられる。所が儒敎では子無ければ妻を去れと敎へてあり、佛敎では女は不淨のもので救はれないとし、小人と女とは度し難いと言つてゐる。然るにキリスト敎では姦淫の罪を犯す時以外は離婚を禁じてゐるのである。人生の航路には晴天のみはない。氣儘の考へで妻を怒り、妻に對して冷たい感じを起す時が無いとは限らぬ。そんな時離婚して了はうなどとの考へが起つてくるものである。そんな事で離緣すれば人生は直に沒亡して終ふ。自分を捨いて誰が妻を導き得よう。妻を導くのが自分の唯一の責任ではないか。自分が天上天下唯獨り彼女を導くべく神より托されてゐるではないか。お互にさうした考へを持つて助け合ひ、導き合ふ時、大きな力と惠みとを互に受けうるのである。ビリー・サンデイといふ傳導者が何千人かの前で「結婚をしてから今日迄妻と一回の喧嘩もせず、嫌な感じをも持つたことのない者があつたら此處に出られよ」といふと幾組かの夫婦が進み出た。會衆は彼等は如何に讃められるだらうかと耳を澄してゐると、彼は聲をあげて「諸君、今諸君の前に大きなうそつきが現はれた。一體人間は幾年間も同棲してゐて、一回も嫌な感じを抱かぬといふことはあり得ない。此處に出られた方々はそれを氣づ

かない偽者か、さもなくば僞り者である」と言つたといふ話を記憶してゐる。我々お互に一度や二度は必ず嫌な感じが起るものである。その時こそお互が苦痛を忍んで助け合ひ勵まし合つて善導すべき責任があるのである。主人と召使、夫と妻、親と子、資本家と勞働者、爲政者と人民のお互の間にこの信念が必要である。他人の罪を發見する時、之を直し善導すべき責任の自分にあることを知つて、お互が十字架を負つて行き度いものである。

誰も惡事を行つて苦痛を感じないものは一人もない。けれども心の中にこの惡い心に勝つて餘りある善心の力が足らぬから、惡いと知りつゝ罪を犯すのである。一度は知らざるが爲めに過失を犯しても、智慧あるものは二度と同じ過失を犯さぬように用心する。然し乍ら實際に於ては、惡と知りつゝも二度、三度と同じ罪を犯し易いのは世の常である。人は單なる智識だけでは罪からは救ひ出されない。どうしても信仰によつて神の聖靈を吾が心に受け入れ、今まで野中に立つ家家であつた自分の心の中へ活ける神、靈なるキリストを受け入れて內住していたゞき、肉我の古い枯葉が全く落ちて、新らしい靈我の綠葉が伸びて來なければ罪に勝ちうるものでない。新芽が內部に發芽しかける時に、自づと古い枯葉が落ちるやうに、新たなる靈的光明の生活に入る時に、おのづと罪の暗黑は根本的に取り除かれるものである。どうかこの體驗に生きて行きたいものである。

社會に對する態度

また古への人に「いつはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と云へる事あるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、一切ちかふな、天を指して誓ふな、神の御座なればなり。地を指して誓ふな、神の足臺なればなり。エルサレムを指して誓ふな、大君の都なればなり。己が頭を指して誓ふな、なんぢ頭髮一筋だに白くし、また黑くし能はねばなり。ただ然り然り、否否といへ。之に過ぐるは惡より出ずるなり。

（山上垂訓マタイ傳第五章三三—三七）

モーゼの十誡中の「いつはりの證を立つる勿れ」は古くより傳へられて來たが、キリストは『一切誓を立てるな、唯然り然り、否否と答へよ」と命じてる給ふのは一體如何なる意味であらうか？

一、汝自らを知れ

抑々我々の對人關係、即ち社會的關係に於て最大の罪惡は言行不一致である。一旦約束して之を履行せぬ程、人を傷け、神を汚すものは在り得ない。我等は先づ言行一致を嚴守せねばならない。

一體人間はどの程度に未來を保證し得るであらうか？　又人間の立場としてどの程度に迄實行の可

能性が存するのであらうか？　かく觀じ來る時甚だ心細き感無きを得ない。科學的確實に依然たる現代人にも明日の天氣を確實に豫言し得ないではないか。否自己自身の明日の生存を確かに言し得るであらう？　今日の「今」といふ瞬間は、自己の存在は確實であるとしても一分、一秒後の自分の心臓は果して鼓動を續けてゐるであらうか？

明日ありと思ふ心のあだ櫻
夜半の嵐の吹かぬものかは

と古人をして歎ぜしめたのも尤もである。關東の大地を搖り動したあの大地震も一分前の人間には感知することは不可能だつた。その時迄明日の事に就いて種々の約束誓ひが取交された事であらう。けれどもそれ等の多くは地の龜裂と共に瓦解し、渦卷く黑烟と共に消え去つたであらう。思へば人間の力は如何に微弱なものであらう。それを思ふとき、可弱い人間たる我等は容易に誓などの立てらるべきものでないことを痛感せしめられる。それ故イエスは自己の弱きと不完全なるを知れと敎へてゐるのである。「汝自らを知れ」と大哲ソクラテスは叫んだではないか。自己の纖弱、不完全を知る者のみが進歩し向上し得るのである。自己の足らざるを發見することそのものが完全に進み得る原動力であり、道程である。修養により、學問により、完全の域に到達したと自ら名乘る者は單に傲慢不遜なるに過ぎない。最も精密に自己を顧み反省するものはその理想と現實の距離の餘りにも大なるに泣

かざるを得ないであらう。親鸞は自ら「愚禿」と稱してゐるのは、謙遜でもなく、世辭でもなく、眞にかく感じたのであらう。この徹底的自覺こそ彼をして彼たらしめた所以である。「我が欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり。噫、我惱める人なるかな。此の死の體より我を救はん者は誰ぞ」と自己に絶望したパウロにして初めて「我らの主イエス、キリストに賴りて神に感謝す。肉によりて弱くなれる律法の成し能はぬ所を神は成し給へり。」と感謝の凱歌を奏し得たのである。自らの弱きと足らざる事を知る者のみ神に近づき得るものたるを思ふ時、富豪の家庭に人となつて何等の困苦を經驗しない世の子弟に同情せざるを得ない。傲慢なる彼等は容易に眞の信仰を體驗し得ない不幸の境遇に生を享けたものである。人生の航路に帆破れ、梶碎けて山なす激浪の押し寄せる時、「おゝ、神よ」と呼び眞に神を見出し得る場合が少くない。內省のメスを自己の魂深く突きさす時、罪を悔ひ弱き己を投げ出して神に縋り得るのである。かくしてこそ自己を慎しみ神の前に表面なる虛偽活が營まるゝに至るのではないか。

二、言行一致

「誓ふ」とは「絶對に行ふ」との意味である。生命を賭しても之を斷行するの謂である。その決心を有する者にして誓ひ得るのである。「一切誓ふな。ただ然り然り、否々と云へ」とのイエスの命令は文字に拘束さるべき御言葉ではない。所有する物質も身も心も一切を捧げて神に從はんとする眞實

なる願望を神は喜び給ふことであらう。「汝我を愛するか」と三度彼の決心を確め、「我が羊を牧へ」とイエスは彼する事は汝知り給ふ」と三度確信を以て應じたペテロの返答を待つて「我が羊を牧へ」とイエスは彼に命じてゐ給ふ。あらゆる犧牲に甘んずる決心なくして一切誓つてはならない。斷じて約束してはならない。決死の覺悟をもて誓ふか、然らずんば誓はざるのみである。All or nothing である。我等は態度を鮮明にせねばならない。白か黑か？　確然たるその一を選ばねばならない。灰色の存在は許されない。然りか？　否か？　我等の返答はその何れかを採らねばならない。「然り然り、否々と答へよ」とイエスは命じてゐ給ふではないか！　Yes か No? 我等の態度は明白でなければならない。神に仕ふるか、惡魔に從ふか、我等は旗色を鮮明ならしめねばならない。「人は二人の主に兼ね仕ふる事能はず」とのイエスの言葉は昔も今も變らざる眞理である。

確固たる決心を有せず、當面の都合に委せてたやすく約束する誓が直ちに破れ人と我とを躓かしむるのは寧ろ當然である。誓の價値は證文、署名、捺印、保證人、登記の有無に在るのではない。一に懸つて此の決心覺悟の有無に存するのである。今の日本の商人が廣告と品物を違はしたり、見本と實物を取り變へたりするが如きは最も恥ぢねばならぬことである。誤謬化しの品物を作つて平然たるのは誤謬化しの人格を有するがためである。此の人格から根本的に改革せねばならない。その改革が一人殘らず成就した時こそ互に信じ得る如何に麗はしい世界が出來するであらう。我等は他人を信じ得

るために自己自身を信じ得る者とならねばならない。自己の人格に虛僞のある者は他人の人格をも疑ふやうになる。ごかう先づ自らを信じ得る人格の所有者となりたい。口外する言葉は悉く實行を以て裏書きしたい。王陽明は言行一致を說いた。我等は發する言葉の一言半句にも責任を負ふて之を全ふしたい。ある人が「パウロの書翰の後にパウロの人格が動いてゐる」といつた。我等の言葉は全生活全生涯を以て證言すべき大きな責任のあることを自覺すべきである。我等は何を惜いても樂屋と舞臺との二樣の使ひわけをする俳優の生活を捨てゝ言行一致を實行し斷行し、勵行せねばならぬではないか。

三、神と人との分限を知れ

苟しくも誓ふ以上それは現在の智識や經驗で出來そうに思はれるから誓ふのではあらうが、その我々人間の約束は如何なる天變地異のために絶たるゝことも限らぬ。俺は何事でも出來ると傲慢にも己を神の立場に置く事が根本的の誤りである。我々は人と神とのなし得る分限を明瞭に區別せねばならない。此の分限を考ふる時眞の謙遜が生ずるのである。人間の能力以外に神の領域に迄侵入せんとする時、其處に誤りを生じ罪を產むのである。人間の能力を超えて神の分を無理になさうとする時、餘りにも自らの小さい、弱い、愚かなものであることを知つて失望落膽に陷ぢ込めらるゝのである。我等は人間の分に最善を盡せば足りる。「人事を盡して天命を俟つ。」と古人は言うた。「もろ〳〵の心

勞を神に委せよ。神汝らのために慮かり給へばなり」この使徒ペテロの言葉は眞實である。

御互は自ら罪の多い、弱い者であることを知る。其處に神を求むる眞剣なる欲求が生し、そこに信仰はスタートを切るのである。自らの弱さを知る一事が信仰に入る第一歩である。私自身も生命がけの病氣がその動機をなしてゐる。何卒お互高ぶれる心を打ち碎いて、神の前に不完全な己を顧み、不完全より完全にと一歩つゝ近づきたいものである。而して確信を有さざるものは口外することなく苟も之を口外する以上絶對の責を負ふて之を實行し、實現しようではないか。

人類生活の標的

「目には目を、齒には齒を」と言へることあるを汝ら聞けり。されど我は汝らに告ぐ、惡しき者に抵抗ふな。人もし汝の右の頰をうたば、左をも向けよ。なんぢを訴へて下衣を取らんとする者には上衣をも取らせよ。人もし汝に一里ゆくことを強ひなば、共に二里ゆけ。なんぢに請ふ者にあたへ、借らんとする者を拒むな。

（山上垂訓マタイ傳第五章三八―四二）

親心の愛

エジプトの空高くピラミッドの雄姿が聳え始めた頃から既に人類の歴史は爭鬪の歴史であつた。腥き鮮血に彩られつゝ數千年の時は流れ、爭鬪と復讐、それが人間生活の大部分を占領し而かも人間のなさねばならぬことに算へられつゝあつた時、ユダヤの僻村ナザレに現はれたイエスは全人類に方向轉換を命令した。血腥い爭鬪の波濤渦卷く中に溺れんとする人類に人間生活標的の燈明を高く掲げて平和と幸福の安全な港の存在を知らしめたのはイエスであつた。イエス出でゝより是者已に二千年、されど爭鬪は未だに跡を絶たない。生存競爭の名のもとに現代社會人の多くは醜き爭鬪を繰り返しつゝあるのである。而かも今なほイエスは人類生活の眞實の標的を掲げて我等を招いてゐ給ふ。吾人は何れを選ばんとするか？　來つてイエスの示す最高至善の標的に從ひ眞の人生の幸福を發見せんとするは誰ぞ。若し然らずんば爭鬪の渦中に自滅すべきのみである。

「目には目を、齒には齒を」この復讐律は日本に於ても幾多の復讐美談として傳へられて來た。私はそれらの過去の事件の是非を論ぜんとする者ではない。併し現代二十世紀の我等の前にはイエスの掲ぐる眞理の光が輝いてゐる。「惡しき者に抵抗ふな、右の頰を打たんとする者には左をも向けよ」と教へてゐ給ふ。此の無抵抗主義を私共は常に親の愛に見出す。この無抵抗の愛を私は「親心の愛」と呼びたい。子供に對する親の愛は無抵抗である。小供が惡ければ惡い程、親の愛は增し加はるのであ

る。之に叛き反抗する時、いよ／＼愛の度を加へるのは親の愛である。ウィリアム、ブースが傳道に赴いた所で老人夫婦と食卓を圍んでゐた時、四人分の料理や食器を悉く備へてあり、食事が終らんとするのに一人分の食物が依然としてそのまゝ殘つてゐる。彼は不審に思つてその由を聞へば老人は涙乍なに答へて「私共夫婦には一人の息子がありますが私共を置いて行つてしまひました。若し歸つて來たら、さぞ腹が減つてゐるでせうから、いつ歸つても差支ない樣に食事毎に彼の分も用意しておくのです」と答へた。時經てウィリアム、ブースの集會で恵みの座に進み出て罪を悔ひた一人の青年があつた。彼こそ即ちその息子であつたとのことである。かくの如く叛けば叛く程なほ深き愛を以ていつくしむのが親心の愛である。

「一切衆生、我が赤子也」と言つた釋迦の一語に彼の慈悲が極點に達してある。孔子の所謂仁も亦た「親心の愛」に外ならない。私共もかくの如き無抵抗の愛、絶對の愛をその隣人に及ぼしたいものである。

愛の勝利

或者は言ふであらう「かくの如きは空の空なる理想である。若し是の如き無抵抗主義を實行せんか。我等は一刻も安全の生活を保ち得ない。惡人は横行して我等の一切の所有物を剝奪し去るであらう。かくの如くんば社會も國家も存在し得ないであらう」と。或はこの一語を以てキリスト教を非難攻擊せんとする者も少なくない。されど彼等は未だ信仰の體驗を持たぬ憫むべき人々である。宗教の世界

は信ぜざる者には全く閉された世界である。抑々我々が敵に勝つことは大なる力であるかも知れない。されど更により偉大なる力ありとせばそは敵をも子供の如く愛して彼を愛をもて其凡てを包んで了ふ事、此一事である。眞實の愛の向ふ所に敵は存り得ない。至誠より迸る愛は凡てに打ち勝たしめる力である。眞の偉大なる力は抵抗するに非ずして愛をもて抱擁する所に存する。「人を見たら敵と思へ。」「出づれば七人の敵あり」との昔の武士氣質に培はれ來つた日本人には此眞の愛を了解する事は困難であらう。されど此愛は經驗する者には眞の勝利である事を確實に體驗せしめられる。何年か以前、山室少將の所に闖入した暴漢が「日本を亡す者は汝ら救世軍なり」との怒聲諸共眼鏡をたゝき落したが、少將は「靜かに」と叫んで慈愛憐憫の目を以て凝視した所、暴漢はすくみ上つて、軈て深く謝罪して去つたとの事である。かくの如く何人も親心の愛をもて抱擁する時、絶對の勝利が得らるゝのである。眞實の愛は之を遮り、之に打ち勝つ何物もあり得ない。げに「惡しき者に抵抗ふな、右の頰を打たば左をも向けよ」との一言の中に深い／＼眞理が籠つてゐる。この善をもて惡に報ゆる絶對の愛を家庭に、國家に、社會に、人類に及ぼす時、其處に理想の平和が招致せらるゝであらう。

第二里の人

義理と人情にからまれた社會生活は不自由である。此兩者の矛盾から脱して、自由の生活に入るには如何にすべきか？　イエスは「人もし汝に一里行くことを强ひなば、共に二里ゆけ、なんぢに請ふ者

に向へ、借らんとする者を拒むな」と教へてゐ給ふ。予盾せる社會生活の不自由から脱して、眞の自由を味はせるのは、二里ゆく生活以外にない。一里を強ひらるる時二里ゆけ、借らんとする者に與へよ。この一言の中に解放された自由の歡喜を發見するであらう。

當時のユダヤはローマに隷屬して彼等に酷使されてゐた。ユダヤ人はローマ兵の荷物を一里だけ運ぶ義務のあることを法律は規定してゐた。自分が西へ行く時でも命ぜらるれば、東へ荷物を一里運ばねばならなかつた。親の死ぬ時でも一里の荷を缺き得なかつたのである。彼等は如何に不滿であり、苦痛であつたであらうか。かくの如き不平の時も、なほ「よし、二里行つてやらう」と思ふ時胸中の不滿は一掃せられる。「受くるより與ふるは幸なり」である。一里を強いらるゝ時、積極的に更に一里行かうとすれば最早不平なく、不滿なく、眞の滿足と安心を以て報いらるゝ。この一事を體得して生活する時、凡ては勝利であり、平和であり、自由である。米國のフォステックは歐洲大戰前 Second Mile の一書を著して自發心の宣傳に努めたため戰爭當時米國人は凡ての企に自發的に應募したと言はれてゐる。吾人の幸不幸は一に懸つてこの Second Mile をなすか否かに存する。Second Mile を行く者は幸福であり、First Mile のみを行く者は不滿を味はねばならない。況んや Half Mile の者は不平と呪とのみの不幸な生活に我と我身をすり減らさねばならない。

人生に處して眞の勝利者たらんとする者は無抵抗の親心の愛をもて Second Mile の愛の生活をなす

以外に求め得ない。辱しめられ、苦しめらるゝと雖も、此處に動かさる安心があり、盡きざる歡びと感謝とがある。彼こそ人生最大の勝利者である。眞實の勝利は敵を屠ることではない。衆に優ることではない。愛の奉仕に自己とその周圍の凡ての者が共に喜び共に感謝し得ることこそ眞正の勝利である。かくの如き勝利を穫得せる者にして初めて如何に苦しめられ、恥かしめらるゝもキリスト共に磔刑に世に勝てり」と最后の凱歌を奏しつゝ天に昇ることが許されるであらう。

人生最高の理想

「なんぢの隣を愛しなんぢの仇を憎むべし」と云へることあるを汝等きけり。されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん爲なり。天の父はその日を惡しき者のうへにも、善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふなり。なんぢら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も然するにあらずや。兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあ

らずや。然らば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。（山上垂訓マタイ傳第五章四三―四八）

仇を愛せ

隣を愛し、仇を憎むは萬人のなす所、イエスの教を侯つ迄もない。されどイエスは云ふ「汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ」と。仇を愛し、責むる者のために祝福を祈り得る者こそ、イエスの僕たり、天に在す父の子と稱へられ得るのである。仇を愛せと主は命じてゐ給ふ、而かも彼は身を以て自ら證言したではないか、恥と苦しみの十字架上に鮮血迸りつゝ「父よ、彼らを赦し給へ、そのなす所を知らざればなり」と祈る姿の神々しくも、また如何に慈愛の溢るゝことよ。このイエスの態度を拜して「げに彼は神の子なり」と叫ばざる者誰かある。「全人類の救主」と仰がざる者幾人かある。己を呪ふて病を得たミリアムのために「嗚呼神よ、願はくば彼を醫し給へ」と信實を以て神に祈り訴へたモーゼにしてよくイスライル全民族をエヂプトの逆境より救ひ出し得たのである。（民數記略十二章）。群る群衆に石にて打たれ、生命正に絶えんとする時、「主よ、この罪を彼等に負はせ給ふな」と呼んだ最後の一言を聞く時、正に「御使の顏の如く」なりしステパノの雄姿が髣髴さるゝではないか。モーゼ然り、ステパノ然り、仇を愛し、己を責むる者のために祈り得る者のみが神の子たるの特權を附與せらるゝのである。

全人類の神

舊約の初め、神は特殊一民族の神であり、更に後には一部正義者のみの神として考へられ來つたのである。されど神の眞の御性質はキリスト出でゝ最も明確に證明せられた。神は一民族の所有にも非ず、正義者のみの特有でもなかつた。神は實に日を惡しき者の上にも善き者の上にも輝かし、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせる全人類の神であつた。彼は我の神、汝の神、彼の神、全人類全宇宙の神であつた。天の下、神の子たらざる人間は一人だもあり得ない。それ故全人類は神に從はねばならない。一人殘らず神に立ち歸らねばならない。神に歸るは當然過ぎる當然事である。神に從ふのは自然過ぎる自然である。子は親に從ふが自然で、從はざるが不自然である。人が神に從ふのが自然で、從はざるのが不自然であり叛逆者である。歸れ、歸れ、神に歸れ。一人殘らず神に歸れ。共に擧つて神に歸らうではないか！「さまよへる者よ、立ち歸りて天つふるさとの父よ見よや」と天使は聲を和して歌ひ叫んでゐるではないか。

最高の理想

吾人地上に生を享く、五十年の人生の究極の理想はそも一體何であらうか？　吾人の修養の目的奈邊にか存す？　人類は何れを指して進まんとする？　地上生活の一日一日は理想の高嶺への一歩一歩であらねばならない。然らば吾人修養の理想の最高峰は何か？曰く「天の父の全きが如く汝らも全かれ」。この一語こそ修養の極致であり、人生終局の結論である。

凡そ吾々の生活中、最も迷ひ易く最も不安なるは行先の不明なる時である。人生の旅行に目的地の不明なる程心細く淋しきものはないであらう。「浮草や今日はあちらの岸に咲く」といふ如く社會の潮流に押し流されて右往左往する生活は、この確たる目的地を有せざる者の憫れな姿である。されば イエスは吾人の進むべき究極點をハッキリと明示せられたのである。人類に與へられた標的中かく迄完全無缺、最高至上のものは未だ嘗てない。我等はこの標的を知るべきである。そして之に向つて一歩〳〵近づきたい。この最高峰を知らずして山麓に、また中腹にさまよふ登山者は禍なる哉。されば神は我等に之を知らしめんとして種々の方法を用ひ給ふ。天地異然り、疾病然り、困難亦た然り、我等の執著せる一切を没收して艱難を與へんとするものである。かゝる災厄に直面して自暴自棄する者は最も憫むべき者である。かゝる時こそ我等は思をひそめて神の示す理想の高嶺を發見し得る時である。なほ且つ此の最高峰へ攀つるの道は平坦ではないであらふ。峻嶺聳え、谿谷横はり、急流奔馬の如く大河洋々として吾人の行く手を遮らんとすることを覺悟せねばならない。かゝる時こそ克己し忍耐し理想の峰へ一歩を攀ぢ登るべきの時である。本間先生は「私は失敗、困難に遭遇する時今迄氣づかなかつた人生の學科を學び得る。故に悲しみ、苦しみを喜んで受け得るのである」といつてゐる。吾等も亦た是の如くして人生の登山を續けたいものである。

六合に遍く放射する光も、遡れば遂に一個の光源たる大陽に達する。我等お互の人生の役目は夫々

異なるであらう。されど人生終局の目的は同一である。「天の父の完きが如く汝らも全かれ」の一語は萬人共通の理想であり、目的であらねばならない。この究極の到達點をわきまへずしてさ迷ふ者はやがて落膽の沼、誘惑の淵に陷るを免れ得ないであらふ。最後の目的地を知らずして右往左往する者は醉生夢死の徒輩であり、舵を失つて怒濤に搖られる孤舟に均しい。彼等の果ては遂に滅亡より他に道はない。

人生究極の目的を發見したる者は既に人生過半の事業を爲し遂げたものである。その後は日毎夜毎身邊に百出する一切の問題を唯此の目的成就の爲めにのみ活かして善用して行けばよいことになる。かくして初めて一切の生活が一糸亂れざる統一狀態に据へられ、自から安心立命の境地が開けてくる。

人生究極の目的の發見は卽ち人間が全宇宙に對する獨自の特殊使命の發見を意味する。而してこの人間の特殊使命は卽ち神を目がけて靈的進化の大道を驀進する一事に盡きる。

神は天地を創造し給ふて以來、夜もまどろみ給はず宇宙進化の道程を進ませられ、今や漸く人間界に至つて始めて靈的進化の第一歩を踏み出さしめられ、神の宇宙的計劃は地上の人間界より天上の靈界生活を創始せしめやうとしておられる。こゝに人間獨自の使命があり、人間價値最高の標的がありまた人生究極の目的がある。

「天の父の完きが如く、汝等も完かれ」とは言簡なれども、よくも至難なる人生究極の目的を明確に表言したる聖言である。

僞善を避けよ

汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば天にいます汝らの父より報を得じ。さらば施濟をなすとき、僞善者が人に崇められんとて會堂や街にて爲すごとく、己が前にラッパを鳴すな。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。汝は施濟をなすとき、右の手のなすことを左の手に知らすな。是はその施濟の隱れん爲なり。然らば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。（マタイ傳第六章一—四）

僞善を避けよ

既に與へられた八ヶ條を實行せんとする時先づ第一に戒むべきは僞善であるとイエスは敎へてゐ給ふ。我々に最も陷り易いのは僞善である。イエスは僞善を極端に憎んでおられた。「僞善なる學者、パリサイ人よ」と幾回となく叱咤してをられる。當時の所謂學者パリサイ人は習慣に束縛せられ、儀式に拘泥した全くの僞善者であつた。總ての心の中を知り給ふイエスには僞善は最も忌むべく、嫌ふべき

ものであつたことは當然である。「僞善者」とは英語で Hypocrite といひ、「旅俳優」との意味である。舞臺に於てのみの善、觀衆の前に於てのみの美、それが俳優の善である。我等の善は是の如きものであつてはならない。俳優のなす善は觀衆に見らるれば充分である。人に見られんための善は、人に見らるれば「彼らは既にその報を得た」ものである。鎌倉の或寺へ必要のために或人が百兩を献じた。然るにそこの僧侶は金を受取つて一言の禮も言はないので、彼は聊か立腹して「百兩と言へば少ない額でもありませんが」と謝禮を促すと、僧は答へて「あなたがそれだけの善事をなし得たといふことが即ち百兩に對する報酬です」と喩されたといふことがある。人に謝禮を求め、人に見られんためになした善事は人から禮を言はれ、人に見られたらば、目的は充分に達し、その報酬は完全に與へられたのである。最早天にて神より報を得べき餘裕も必要もない筈である。

我等は人に見られんための善人であつてはならない。己が善事をラッパを鳴らして吹聲すべき必要は斷じてない。更に右の手のなすことを左の手にも知らせざる程であり、また施濟を祿々記憶せぬ位でありたい。

神を見よ

抑々我等の僞善的行爲は「隱れたるに見たまふ神」を相手とせず人を對象とするが故に起るのである。人を見るが故に僞善が生れ、世を見るが故に躓きを生ずるのである。牧師を見、宣教師を見、先

輩を見、それのみに眼界が限られてゐる者は躓て躓かねばならない。目を上げて神を見よ、神を見、神を對象とする生活には僞善もなく、また躓きも行詰りも斷じてない。神の前に立つ者は人の缺點、弱所を發見する時却つて自己の存在の價値を發見する。何となれば彼はその缺點を補ふの責任が我であると感じ得るが故である。

人を標準とする者は世の批評をいたく憂ふる。されど神を標準とする者には世の毀譽褒貶は更に意とするに値しない。神のため眞理のためならば嘲笑可なり、讒誣可なり。迫害可なり、死も亦た可なりである。日蓮は首の座に於て側に泣き悲しむ弟子を顧みて「私のために涙を流してくれるな、天下始めて妙法のために身を捨てるのだから喜んでくれ」と彼等を勵ました。ルーテルは火刑を宣せらるゝも、なほ猛然と神の正義を擁護して立つたではないか！　神を仰ぎ神を望んで生くる我等は世の風評などに心を動かし、罵言嘲笑などに耳を借す餘裕も必要もない筈である。

善は善なるが故に

一休和尚が道傍の乞食に持ち合せた若干の金を惠んだが乞食は歡ぶ色も見せない。和尚は「お前さんは人から金を貰つて嬉しくないかね」と尋ねると彼は答へて「お前さんは人に金をくれて嬉しくないかね」と反問したといふ話がある。我等の乞食に金や食物を惠むは乞食に同情するが故である。乞食より喜びの感謝を受けんがためではない。かくすることが善と知るが故に善をなす迄である。善は

善なるが故に行ふのである。善をなす努力と犧牲とそして其報酬とを差引計算して其報酬の方が大なるために善をなすのでは決してない。結果を見ず、唯善は善なるが故に之を實行するのである。若し之をなさざれば「善を行ふ事を知りて之を行はぬは罪なり」との責めを聞かねばならぬ。Honest is the best policy との諺がある。之等は正直が最上の政略なるが故に正直をなさんとする者である。若しも不正が更によき政策である事を知れば彼等は不正に從ふであらう。是の如き正直は眞に神に嘉せらるべき正直ではない。正直は正直故に斷行すべきものでなければならぬ。況んや、利益の方便に神を信仰するが如きは誤れるも甚しい哉。神の祝福を望むべき資格は彼等には毛頭ない。善は善なるが故に之を敢行すべきである。よしそれは全財産を失ふ結果を招致しやうとも斷然之をなさねばならない。

カントをして彼の哲學思想の大系を完ふせしめたものは、實にこのイエスの言葉であつた。萬事已が要求を滿足せんがための宗教哲學の時代に、彼は立つて New epoch を齎らした。汝ら偉大ならんとする者は學問せよ。繁榮を欲する者は正直なれとの思想が風靡してゐた時、彼は善に善なる故、無條件に之をなせと叫んだのである。

一切の報酬結果を論ずるのでなく、善は善なるが故に、正は正なるが故に、眞は眞なるが故に、聖は聖なるが故に、之を實行し貫徹せねばならない。孟子は「君子は獨りを愼む」と言つた一切の僞善的行爲を捨て、神を仰ぎ、神に從ひ神に嘉せられ、やがて「善且つ忠なる僕よ」と神よりの言葉を賜

り得る迄に至りたいものである。

靈　交

なんぢ祈るとき、僞善者の如くあらざれ。彼らは人に顯さんとて、會堂や大路の角に立ちて祈ることを好む。誠に汝らに告ぐ、かれらは既にその報を得たり。なんぢは祈るとき、己が部屋にいり、戸を閉ぢて隱れたるに在す汝の父に祈れ。さらば隱れたるに見給ふなんぢの父は報い給はん。また祈るとき、異邦人のごとく徒らに言を反復すな。彼らは言多きによりて聽かれんと思ふなり。さらば彼等に效ふな、汝らの父は求めぬ前に、なんぢらの必要なる物を知りたまふ。（マタイ傳第六章五―八）

祈　禱

子供は生るゝや否や呼吸を始める。魂は救はるゝや否や、祈りを始むべきである。長い流浪の旅を續けた放蕩兒が親の元に歸つた時、長い物語りに亟る如く、反逆の生活から一轉して神に從ふた魂は

神と打ち解けて語り合ふべき筈である。神との對話、それが即ち祈りである。それ故祈りとは美言麗句を一定の型に當てはめてアーメンで結ぶことではない。我々の僞らず、飾らざる感謝或は希願をそのまゝ神に訴へることである。そしてまた吾等に語り給ふ神の囁きを聽くことである。

凡そ我々人間にして溢るゝ喜びや、感謝を聞いてくれる人なく、また無限の悲痛を訴ふべき者のない程哀れにも淋しい者はないであらう。愛等の御褒美を貰つた子供は息をはずませてその喜びを親に傳へ、友達にいぢめられ、犬に吠えられては彼等は泣き乍ら親の許に馳せつけるではないか。若しも喜びを傳へ悲しみを訴ふべき親がないとしたら彼等は如何ばかり不幸悲慘であらうか。喜憂を共にする兩親なく、共に語るべき兄弟なく、眞實を吐露して談ずべき友のない程不幸な者が他にあらうか。「孤獨を欲する者は神に非ざれば野獸なり」と或人が言つた。神に非ず野獸に非ざる我等人間にして天上天下唯一人なる孤獨程淋しく哀れなる者はあり得ないであらう。それに反し呼べば答ふる者のある者は他に何物をも有せずとも失望落膽することがない。母の膝下は子供にとつては天國である。如何なる金殿玉樓も與へ得ない喜びと平和を其處に有してゐる。呼べば「オー」と答へらるゝ者は幸福である。喜びを告げ悲しみを訴ふべき者を有する者は幸福である。呼べば「オー」と答へる神を識れる者はご幸福なものはない。如何なる逆境不遇のドン底に墮落さるゝも神を有する者は再び起つて勇敢に戰ふ元氣を與へらるゝ。我等の神は呼べば答へる神である。呼べば應ずる神である。この神を我が神と

せる我等には行き詰りがない、失望落膽がない筈である。狂瀾怒濤のガリラヤ湖に「主よ、救ひたまへ、我等は亡ぶ」と泣き叫んだ時、「何故臆するか、信仰うすき者よ」といひつゝ浪風を靜め給ふたイエスは彼等同船の使徒たちには千萬の援軍よりも力强かつたであらう。世界を我物とするより全能なる神を我が神とし「アバ父よ」と叫び得る者には不斷の平和が保たるゝ。岡山孤兒院を起した石井十次先生は「孤兒は兩親のない者だけかと思つたら日本人の大部分が孤兒だよ」と語つたことがある。父なる神を知らざる者は孤兒である。天下にさすらふ魂の孤兒である。吾等は生ける神を我が神とし喜びに悲しみに「アバ父よ」と訴へて感謝と平和の生活を送りたいものである。

密室の祈り

喜びに悲しみに神に訴ふるはその哀情を披歴して神の慰さめを受け、勵ましを得、導きを與へられんがためである。されば僞善者の如く「會堂や大路の角に立ちて」わざとらしく祈るなどは人には見られようが、神の前には兒戲に等しい。我等は隱れたるに在す神に訴ふるため部屋に入り戸を閉ぢて密室の祈禱を特別に重ぜねばならない。幼かりしウィリアム・ブースが日曜學校の一室に心をこめて祈つた祈りは聽き屆けられ二十世紀の奇蹟とまで言はれた救世軍を生んだのである。「私は片肺で米國人四千人に話した、兩肺あつたら八千人に話すのだが」と言つた江原素六翁があの事業をなし得たのは饑食を忘れて朝まだきから祈つたその祈りの賜である。その外宗教界の偉業を完ふした者は數ふに

遑もないが、彼等にしてこの密室の祈禱を缺いた者を未だ嘗て聞かない。

天にます、父は聽くらん小夜ふけて
ひとり衾のかげに祈るを

と奥野昌綱氏は詠んだ。我等は常に己が部屋に入り戸を閉ぢて隱れたるに在す父なる神に祈らねばならぬ。されど眞の密室とは必ずしも戸を廻らし、障子を立てこめた室のみの謂ではない。思をひそめて心ゆくばかり神と交はり得る所こそ至上の密室である。パウロの密室は牢獄であり、ペテロの密室は屋上であり、またイエスの密室は靜けき山中であつた。

又言葉多きを以て聽かるゝが如く徒らに言葉を繰り返すが如きはまた愼まねばならぬ。眞實を缺いだ言葉を何萬遍繰り返さうとも神は聽き給ふ道理もない。併しまた必要あらば同じ言葉を繰り返すことそのものゝ惡からう筈もない。イエス御自身もゲツセマネの園に血の汗を流して祈れる時は「三たび同じ言葉にて祈り給ふ」とマタイは記してゐる。

畢竟祈りは場所や言葉の問題ではなく直接に神に達するほどの眞心の發露にある。神への信賴の有無に存する。絶えずこの隱れたるに在す神に祈りの生活をなすのでなくては、爭で「獨りを愼む」君子たるを得るであらうか。神より直接の力を受け得ない者は、「遂に不善改むる能はず」との嘆聲を發しつゝ、弱い力無き人生を辿らねばならないであらう。

靈と眞とをもて拜すべし

「神は靈なれば拜する者も靈と眞とをもて拜すべきなり」とキリストは言はれた。天地の主たる神が靈で在し給ふ以上我等は靈と眞とをもて拜さねばならないのは當然である。眞心のない祈り、信仰のこもらざる祈禱を神は聽き給はぬであらう。「祈りても驗し無きことしるしなれ祈る心にまことなければ」と古人も歌つたではないか。祈りは世界を動かす挺子の置き所である。眞實をこめた祈りには今もなほ奇蹟が伴ふ。ルーテルが火刑を宣告されて全く失望し切つて歸ると妻は喪服を着て現はれた。ルーテルは驚いてその故を問へば「あなたの心にキリストがもはや死んでしまつたからキリストの葬式に行くのです」と答へた妻の言葉に、彼は再び信仰を以て祈り求めた結果、遂にあの宗教改革の大業を成就した。げに眞實の祈りは世界を動かす挺子の置き處である。

ある時私は祈の中に靈感に打たれ一種異樣な靈界に引き上げられ「この地上とは天國の引き續きである。今私は天國の一端を歩いてゐるのだ」と強く〳〵感じた。その瞬間死の蔭が取り去られた如く感じ、今迄にない強い力と廣い靈界の光とを見出したのである。それ以來私は内的生活に大きな力が與へられ、眞劍に神に祈り得るに至つた。私は眞心を以て神に祈る時、神が「オヽ」とそれに應へ給ふ體驗を屢々味はされてゐる。お互に熱心と眞心とをこめて生ける眞の神に願ひ訴へたいものである。

地上にありて神の御胸を喜ばすべき業を成し遂げ得るか否かは、この活ける神への眞實の祈りの有無の一事に存する。眞に力ある生活を營み、人生をして有意義幸福ならしめるか否かの分岐點は、祈りの有無によつて分かれる。約言すれば、祈りの有無こそ人生に於ける All or Nothing の分水嶺である。祈りに答へ給ふ神に眞劍に祈り縋りつゝ神の御業を完うしたいものである。

主の祈り

「天に在す我らの父よ、願くは御名の崇められんことを。御國の來らんことを。御意の天のごとく、地にも行はれん事を。我らの日用の糧を今日も與へ給へ、我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを嘗試に過はせず、惡より救ひ出し給へ。」（マタイ傳第六章九―十三）

私共はこの「主の祈り」を多年か繰り返して來たが、その都度常に新しい力に接する。深くこの祈りの眞髓に觸れるとき憂は消え、悲しみは慰められ、惱みは失せる事を幾度か經驗せしめられる。失望落膽のどん底から一躍して輝く希望を前途に抱いて邁進するの勇氣をこの短い祈りの中に發見した先達聖徒は數限りもないことであらう。げに「主の祈り」は神と人とを連絡する電線であり、誘惑を征服

し、煩悶に打ち克つ力の源である。

（一） 天にいます我らの父よ。

祈りを知らない弟子達にイエスの敎へた祈りの最初の一句は「天にいます我らの父よ」であつた。この一句を今學んで見たい。

一、天にいます

イエスの敎ふる神は「天にいます」神である。地上の神ではない。されば人間の細工によつて作り上げられた偶像ではない。乃至は人間の思索と默想とが產んだ空想的、假設的の概念の神でもない。天地間に實在する活ける神である。宇宙を創造し、之を主宰する靈なる神である。

「天にいます」とは自ら高きを意味し、崇高を意味する。さればイエスの述ぶる神は聖の聖なる尊い父なる神である。一切の不義を喜ばざる正義の神である。

吾らの信ずる神は先づ天にいます全智全能なる而かも神聖なる正しい父なる神である。

二、我らの

イエスは神を「我らの父よ」と呼んだ。單に我のみの父とは呼ばない。我ら全人類の父である。我ら一人殘らずの神である。七千萬同胞一人一人の神であると同時に十六億の世界人類一人殘らずの神である。「全人類は一人の神を父と仰ぐ一家族である」この偉大な敎が先づイエスの口を衝いて溢れ

出た。如何に偉大なる言葉であらう。我らは思はずイエスの大思想を讃歎せざるを得ない。當時のユダヤ人は異邦人を嫌ふこと蛇蝎の如くであつた。それのみならず同國人と雖も學者パリサイ人らは律法を知らざる無學の徒を愚人、罪人と蔑視してゐた。その中にイエスは立つて「我等の神よ」と叫んだ。イエスの前には異邦人なく、罪人なく、無學者なく、將亦た學者なく、富豪なく、王侯貴人もなかつた。貴賤貧富老若男女の差なく人類は一人の父の前に一家族であらねばならない」この一事を解せざるが故に戰爭は各國民を常に脅かし、社會問題は片時も爭鬪の跡を絕ち得ないのである。

「四海兄弟」この言葉は古くから傳へられてゐる。然しながら世界人類が兄弟であるならば全人類が一人の父を戴かねばならない筈だ。Fatherhood のない處に Brotherhood はあり得ない。先づ我々は產みの親、育ての親たる一人の神を知らねばならない。而してその下に全人類は握手すべきである。それは單に空なる理想論ではない。必要切にして而かも實現可能なる焦眉の問題である。平和條約を締結するよりも、軍備を制限するよりも遙かに重大且必須の問題である。國民お互は上は一天萬乘の大君より下は賤が伏屋の赤子に至るまで「天にいます我らの父よ」と神を仰いで相睦み、更に世界の各人は唯一人の父なる神の心を心として融和せる一大家族を形成すべきである。それ無きが故に

四方の海みな同胞と思ふ世に
なぞ浪風の立ち騷ぐべき。

と明治大帝は御詠歌あらせられたではないか。我々は何よりも先づ自ら「天にいます我らの父よ」と神を仰ぎ更に進んで全世界の同胞をして斯く一人の父なる神の膝下に統率さるゝ子供となりたい。この一事が實現さるゝ時こそ、愛と平和の王國が建設さるゝ時であらう。げに「墓の下と十字架の下には人間の區別がない」とは誤りのなき事實である。

三、父よ

イスライル民族に懐かしかりし往時のエホバは何時しか畏ろしい王と化した。イエス出現の時代のユダヤ民にとつては神は王であつた。專制君主であつた。義しき審判と偉大なる力とを以て彼等に君臨するいかめしき王者として考へられてゐた。この時代にイエスはその神を「父よ」と呼んだ。なんと、いふ懐かしい、慕はしい言葉であらう。我らの神は「父よ」と呼べば「オー」と答へ給ふ活ける神である。我らは神に物を申すに堅苦るしい形式や儀式に拘泥する必要はない。唯「父よ」と叫んで衷情を訴へれば神は之を聽き給ふ。親に物を乞ふ幼兒その儘に神に願へば充分である。

マホメット教に神を呼ぶに九十九の呼び方があるが「父」との呼び方は無いさうである。我らの神は我らの父であり。親である。絶えず我らを守り導き給ふ父である。我らはさうした父なる神に逆いて可いであらうか？　我らは何を措いても父なる神に歸らねばならない。信仰とは人並外れた特別な生活を營むことではない。歸るべき親に歸り、從ふべき父に從ふことである。親に從ふのが自然で從

はざるが不自然である。神に從ふのが自然で、從はざるが不自然である。親不孝である。神を知らずして長い間反逆の生活に沈みし者は神に歸らねばならない。父なる神を離れて放浪の旅にさすらふてゐる者はかの放蕩息子と共に「我起ちて父に往かん」と歸らうではないか！　今直ちに神の膝下に戻らうではないか！

律法は神の意志の表示であり、神は律法によつてのみ解さるべきものとして學者パリサイによつて律法の中に幽閉せしめられ來つた神は、今やイエスによつて「天にいます我らの父」として崇められ仰がるゝに至つたのである。ソクラテス・プラトーを經てアリストテレスに至り宇宙の支配者なる神は概念によつて知り得るこの當時の思想界に對し、活ける人格神としてイエスによつて紹介さるゝに至つた。實に神は活ける實在の神である。かゝる神を「我らの父よ」と呼ぶを許されし我等は如何はかり大いなる感謝であらうか。我等お互一人殘らずが「天にいます我らの父よ」と神を呼び奉り、父なる神の聖心に從ふ神の子とならねばなりたいものである。

（二）願はくば、御名の崇められんことを

一、神　第一

「御名」とは固より神の御名である。「御名の崇められんことを」とは神の榮光の顯はれんことである。神の榮光の顯はれんことを願ふ者はまたその如く行はねばならない。我々信徒の生活は神の御名

の崇められんがためである。自己の名を世に表はさんための生活であつてはならない。神の御名のため、神の榮光のための生活、換言すれば神第一の生活、之そキリストの弟子たる我等の眞實の生活である。神第一の生活を營まんには固より人々の嘲笑、迫害を受くることもあるであらう。儲かる金を見す〳〵損をせねばならない場合もあるであらう。けれども我らはよし恥づかしめらるゝとも、苦しめらるゝとも、損を蒙るとも斷乎として神第一の生活を營まねばならない。

「もし得べくば此の酒杯を我より過ぎ去らせ給へ、されど我が意の儘にとにはあらず、御意のまゝになし給へ」と血の汗を流しつゝゲツセマネの園に祈つたイエスは眞に神第一の生活の絶好の模範である。彼は今や死の前に直面しても、なほ且つ神の御意のまゝになし給へと神第一の態度に出づるに聊かも躊躇し給はなかつた。深く迄神の前に從順に而かも雄々しかりしイエスの姿を髣髴せしむる時、思はず襟を正さざるを得ない。我らは神第一の主義を貫徹せしめようではないか。まづ神の國とその義とを求めて生きようではないか。その時必要なる一切の物は與へらるゝとの約束は成就する。つまらぬ物と憂世の罪の重荷を持つほどなら、裸一貫で御名のために奮鬪する方が遙かに優つてゐる。唯御名のために一切を捨てゝ起ち上つたガリラヤ湖畔の「無學の凡人達」は大學者、大富豪のなす能はざりし大偉業を完成したではないか。「金銀は我になし、然れどもナザレのイエス●キリストの名により て歩め」と唯キリストの御名、神の榮光の爲に奮鬪して、始めて生れながらの罪者を這

し得たのである。

二、神の御名を中心に團結せよ

吾々一人一人の日毎の生活が神の御名の崇められんための生活である如く、信徒の集團はまた神の御名の崇められんための團結でなければならぬ。局外の未信者が信者の會議等を見る時屢々驚くのである。何となれば各自が唯自己の意見を通さんことを目的とするに非ずして、何れも神の御名の崇められんことゝ神の榮光の顯はれんことをのみ願ふが故に、議論は容易に一致して直ちに纏りがつくからである。それに反し世の多くの會議なるものは議論百出而もその何れもが皆自己本位の主張であり自己の利益を擁護し自己の立場を保持せんと圖るに汲々としてゐる。あるものは議論のための議論であり、主張のための主張にして唯徒らに自己の主張に執着するに過ぎない。されば彼等の論爭が喧々囂々として遂に纏まる處なきは固より怪しむに足りない。

我等は獨り會議の時のみならず、常に神の御名を第一に於て團體の行動を定めねばならぬ。神の御名のためには自己の名譽や利益は直ちに擲つの覺悟がなければならない。

細胞は一個の細胞としての存在に止まつては、何の意義も價値もない。互に統一調和し一大生命のもとに統御せらるゝ時その使命を完うし得るのである。我等は神の榮えを現はし、その聖心を成就する爲の共同目的の實現のために努力する時、始めてその意識を達し得るのである。救世軍がよく「二

十世紀の奇蹟と謂はるゝ様な大業を成し得たるもまた全くこの一點に努力を集中した爲に外ならない。彼らは同一目的のために自己を捧げるが故に富豪、政治家、教育家のなし能はざる處をよく成し遂げ得たのである。

一騎打ちの戰爭はもはや封建時代の遺物である。今や各人は同じ目的、同じ理想の下に打つて一丸となり、世の救のために力戰奮鬪すべきである。イエスは我は葡萄の樹、汝らはその枝なり」と言はれた。我らは同じ幹に連る一葉、一枝として御名の崇められんための共同目的に神第一の生活を營むべきではないか。

信仰生活とは自己中心の生活を捨てゝ、神中心の生活に生きることである。人は自らの力にて生くるにあらず、神人を生かしめ給ふを吾等は悟る、故に御互の生涯は、凡ての事神の榮えの爲めであり、神の聖名のあがめられん爲めであり、神の聖意成就の爲めである。

地上に据えられた望遠鏡は天の星晨の光を鮮かに示さん爲めである如く、吾等人間が地上に置かれてゐるのも、神の光とその姿とを明らかに表現せんためである。決して望遠鏡自身の莊麗さと微妙さとを誇るためでない。自らの姿を見せずして、天の光の姿を明示する爲めである。げに吾等人間の存在は、天の父なる神の愛の光を地に住む全人類に明示せんが爲めである。自己の名の爲めにあらずして神の聖名の崇められん爲めである。

主の祈り (二)

「天に在す我らの父よ、願くは御名の崇められんことを。御國の來らんことを。
御意の天のごとく、地にも行はれん事を。我らの日用の糧を今日も與へ給へ、
我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。我らを嘗
試に遇せず、惡より救ひ出し給へ。」(マタイ傳第六章九—十三)

(三) 御國の來らんことを。御意の天の如く、地にも行はれんことを。

一、人生の尊さ

日月懸り、山河横はる悠久たる宇宙——そは神の設計になる一大建築工場である。地球はその一分工場であり、我等はその一職工である。永遠より永遠に亘つて神の建築は續けられて行く。

傳ふる所によれば人間のなせる最も永い建築は伊太利ミラノにある有名な伽藍であり、既に三百年も經過し、なほ未完成であるといふ。其處に働く者は子々孫々同じ設計の下に働いてゐるのであるが神の設計になる宇宙の建築は固より比較にならない。悠久の昔より悠久の未來へ限りなく繼續する。我等銘々は、その一職工である。然らば如何にしてその職責を全うすべきか？　この問に答ふべくイエスは現れた。彼は宇宙建築の職工の代表者である。神より遣されたるモデルである。この神の設計が如何なる無教育な職工にも解し得らるゝ樣、はつきりとそれを敎へ示さるゝ指導者であり模範職工である。我等は彼に倣つて働くべきである。

永遠より永遠への宇宙建築の一職工――思へば我らの胸は躍るではないか。我等の人生はいと尊くも意義深いではないか。朝露の如く儚き五十年の人生も地上に天國を建設せんための建築工事にいそしむ者に於ては無限大の價値を有する。それを悟らずして、如何に榮耀榮華を極めた生活も根の無き草花に等しい。忽ち枯れて跡無きに至るであらう。それに反し「御國の來らんことを。御心の天に成る如く地にも行はれんことを」と祈り求めつゝ神の設計に從つて宇宙の建築工場にいそしむ者は如何に慘めに見ゆる生活なりとも、その價値は無限大である。

地上に天國を建設せんと努力する者は、一枚の煉瓦を積むにも、一本の柱を立てるにも、悉くその設計に從つてなさねばならない。神の建築場の職工は神の設計通りその仕樣書通りに服從し、監督者

たるイエスの命のまゝに從つて建築工事に勵むべきは當然なる義務である。

二、人間の價値

凡そ我々が遂ひ易い躓き勝ちな思想は「人間とはこんなものである。又こんなものであつたから之でよい」との考へ方である。「聖人君子がかくなしたから我等はこの程度でよいとか、或はまた惡人でもあんなに榮えてゐるのだから、少しは不正をしてもよい」といふのが我々凡人の屢々考へ易い點である。自然主義者に惑はされてこれ位の事はといふ樣に、現在と過去を標準として自己の行手を決する弊に陥り易い。

我々が地上に於て天の父の全きが如く全からんために如何なることをせねばならぬかを考ふる時、御國建設の目的に進むことが理想であり、それを成就せしめんとする所に人生の價値が現はるゝことを認めらるゝ。吾人の價値は學問地位財産によつて決せらるべきものでない、神の御心が地に行はれんために努力しつゝありや否やによつて左右さるゝのである。「御國の來らんことを、御心の天の如く地にも成らんことを」とはイエスが無學なる民衆に敎へた言葉であつた。然るに二千年後の今日我々はやつと學術の進歩によつてこの思想の進歩に到達するを得たのである。哲學の未だ達せざる遠く二千年前イエスによつて示されてゐた。

ガリレオ、ニュートン出でゝ科學界に新天地を開拓し、カント一度現はるゝや宗教界に革命を齎らし

る如く、今後の我等はイエスの言葉を體驗し實行する事によつて、科學界にも哲學界にも New epoch を示し得ることを信ずるものである。靜かに現代を觀察する時、今こそは實に冬より春への轉換期ではあるまいかと思ふ。寒梅綻びて春の近きを知り、無花果芽ぐんで夏の遠からざるを思ふ。現代社會の行詰りはこの New epoch の前兆としての、產みの苦しみでなくて何であらう。只この「主の祈り」が吾々の生活に織り込まるゝ時、哲學神學の如何に關せず、唯神の御心を地になす生き甲斐ある生活を營み得るに至るであらう。

「御國の來らんことを、御意の天の如く地に行はれんことを。」我らは不斷にかく祈りつゝ而かも實生活の中にこの理想の實現に向つて猛進すべきである。永からぬ地上生活を徹頭徹尾、神の御胸に添ひまつり、イエスの導きの儘に從ひつゝ眞に我々の人生を意義あらしめ、價値あらしめたいものである。

（四）我らの日用の糧を今日も與へ給へ

一、富とは何ぞや

凡そ普通人にとつては富は万人の望む所、貧は万人の忌む所。然らば富とは何か？　万人の望む富とは何か？　千万銀の寶を擁することか？　非ず。百万の財を蓄ふることか？　非ず。然らば富とは何ぞや？　眞の富とはそも一體何であらうか？

眞の富とは必要なる物を日毎々々與へらるゝ體驗を持ち續くることである。必要以上の寶、不要な

る財を如何に多く蓄ふるとも何の意義があるか。その日に必要なる物はその日に與へらるゝならばそれ以上のものは不要なるのみならず邪魔である。不必要なる重荷を負ふて思ひ煩らふ者が世の所謂「富豪」である。眞の富める人とはその日に必要なる物は、その日に與へらるゝ體驗の所有者である。「狐には穴あり、空の鳥には塒あり、されど人の子は枕する所なし」と自ら言はれたキリストも、その日の糧に事缺き給はなかつた。彼は實に最も富める人であつた。奴隷屋の大金持に生れて、その財產全部を父に返して文字通りに裸一貫となつて信者の恵んだ衣を身に纏ひ、獨身帶とし素足で東走西走神の道を傳へたアシジのフランシスも亦た最も富める者の一人であつた。ルーテル然り。ウイリアム、ブース亦た然り、サンダーシングも亦た今の世界の有する最も富める者の一人である。その他古來の聖人君子と稱さるゝ大部分、釋迦も孔子も日蓮も弘法も親鸞も何れも無一物にして而かも最も富める人々であつた。

「求めよ、さらば與へられん」とイエスは約束し給ふた。その約束を信じて而かもその事實を日毎に體驗する者は最も大なる富者である。

震災の時、ある富める罹災者の言ふに「命からがら逃げ出して全部燒け失せて了つた時、或種の心安さを感じた」とのことである。それは彼が着のみ着のまゝ逃げのびた時に直感された偽らざる告白であると思ふ。今迄多くの富を擁して人から羨まるゝ樣な生活にも、却てそれ故に種々の煩惱と不安

があつたに相違ない。世の所謂活める人々は自己の負へる重荷のために絶えず不安に脅かされつゝ悩む獨り者である。さても憐むべき富める人ではないか。

私は嘗て支那旅行中北京の宮城を參觀した。九重の城壁に圍まれ、その各々には夫々異なる階級の人々が護衛してゐる。皇帝の居室を見れば寢臺のあるのは僅かに一疊位、他に十二疊位の室があるのみであつた。これ位で足りるのに九重の固めをしてゐなければならないなら、皇帝はどんなに自由な生活をしてをられるであらう。こんな位なら野原に汗して働く百姓の方がどんなに自由で、のどやかであらうとつくづく感じさせられた。

我等は蟲喰ひ盗人穿たざる天に寶を蓄へて、その日に入用の糧をその日に與へられ、更に進んでパウロと共に「貧しきに似たれども多くの者を富ませ、無一物に似たれども凡てを持てる」生活に入りたきものである。

二、一切を神に委ねよ

我等は一切を神の御手に託して、而かも必要ならば隨時隨所にて與へらるべき確信を以て生活する時、眞に我が物は神の物、神の物は我が物との「神人合一」の境に入り得るのであらう。「今日も與へ給へ」と祈れと教へた。今日もと言ひ得るには昨日も一昨日も一ヶ月前も一年前も五年前も與へられたる體驗を有するが故である。されはこそ、また明日も明後日もまちがひなく與へらるべきを信じ

て一切を神の御手に委ね得るのである。

「神の國とその義とを求む」る者には無くて協はぬ一切のものは一の例外なしに與へらるゝのである。世の富に頼る者は愚である。虎の子の如き大事な寶も何時失はるべしとも限らぬではないか。げに「鼻より呼吸する者に頼るべからず」である。我らは今もいつまでも變らざる神の銀行に愛の貯金と信仰の預金を蓄へて天に寶を積むべきである。「朽つる糧のためならで永遠の生命にまで至る糧のために働け」とイエスは命じてゐ給ふではないか。永遠の生命に至る糧を得るために働くことは世の富を得るよりも困難の場合もあるであらう。よし困難と見ゆるとも神の御胸なりと信じてやり抜く時に、必ずその道は備へられてゐることを發見する。「神は眞實なれば、汝らを耐え忍ぶこと能はぬほどの試煉に遭はせ給はず。汝らが試煉を耐え忍ぶことを得んために之と共に遁るべき道を備へ給はん」とは信じて斷行する者の總てがパウロと共に經驗する事實である。

「我汝に居り、汝我に居らば、何事によらず祈つて求めよ、さらば成るべし」との主の御約束を信じてブース大將夫人は起ち上つたといふ。我らも亦た求むれば與へ給ふ神に「日用の糧を今日も與へ給へ」と祈りつゝ、日日の仕事に奮闘し、更に今日一日の肉體を支へる糧のみではない、「神の御用を爲すべき靈の糧、信仰の力、智力、健康、一切の力を與へ給へ」と祈るべきである。一日の糧とは斷じて衣食住の糧のみであつてはならぬ。心の糧、愛を斷行し得る糧をも意味すべきである。而して我れ

一人のみではないむ千萬の日本の一人殘らずが、更に十六億の世界の同胞が共に日用の糧に窮ささるやう祈りつゝ之がために精一杯の御奉仕を試みようではないか。

（五）我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ

一、他人の罪を赦せ

改譯の「負債」は從前譯にては「罪」と譯されてゐた。正に負債は罪である。借金をして返さないのが罪である如く、神と人とに對する負債をそのまゝにしてをくのは明かに罪である。

我等は自分の罪を棚に上げて他人の罪を裁き勝ちである。それ故幾多の不和爭鬪が釀されるのである。我々は他を責むる前に、先づ自らを責めねばならない。「何故兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木を認めぬか。視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや。僞善者よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて兄弟の目より塵を取り除き得ん」とイエスは仰せられた。我々は先づ何よりも自己を反省し自らの缺點短所を辨へ知らねばならぬ。

他人の長所を知るは難く、その短所を見るは易い。吾々が目を擧げて他人を見る時、先づ目に映ずるはその缺點短所である。それを發き、それを裁かんとするが故に、爭鬪の暗黑面を出現して紛糾は

その間に跳梁を恣にせんとするのである。

我らは自らの足らざるを思ふにつけ他の缺けたるを赦すの雅量がなければならない。古人の言へる如く「己を責むるに嚴に、他を責むるに寛なれ」とは正しく處世の要訓である。キリストは七度を七十倍して兄弟の罪を赦せと教へられたではないか。我らは一日に四百九十度兄弟の罪を赦すとも尚ほ一日に寛に失する度は決してない。思ひ切つて赦せ、遠慮なしに赦して、毫も差支はない筈である。眞に他人の罪を赦し得た時、始めて時我らの心には言ひ難い平和が宿るのである。かくして他人の罪を心から赦せる者のみが「我が罪をも赦し給へ」と神に祈り得る特權が與へられるのである。

二、神より赦さるゝ者

「我らの負債をも免し給へ」と祈る我らは「汝の罪赦されたり」との聲を聞く迄、私共の魂は容易に滿足し得ないものである。牽牛盛は數知れざる多くの人々をむごくも殺したがため、晩年になつて二階に登らんとするや殺された人々の白玉が己を睨んでゐるので、一度は彼も睨み返したがその多くの目玉は集つて一つの大目玉となり、なほも鋭く睨みつけてゐたのを見て、流石剛膽な清盛も辟易し重い病氣に犯され遂に死んだとのことである。彼は位人臣を極めて榮燿榮華の限りを盡したが、亦されざりし神への負債は遂に彼をしてかく苦しましめたのである。心に負債を有する程、苦しいことは復とあり得ない。それは巨万の富を持つとも、高い社會の地位を與へらるゝとも、斷じて償ひ得ざる苦し

みである。而して唯「凡ての罪より我らを潔むる」イエスの血によつての み我らの罪は贖はれ、赦さるゝを得るのである。

姦淫の現行犯を捕へられた女がイエスの所へ引き連れられて來た。「主よ、この女を石で打ち殺しませうか？」と尋ぬる群集に對して地面に靜かに字を書いてゐたイエスは、やをら身を起して「汝の中にて罪を犯せしこのなき者あらば、先づこの女を石にて打て」と言はれた。その一語は強く彼等の心を打ち、鋭くも彼らの胸を刺らずにはおかなかつた。「自分は果して罪を犯したことがないであらうか？　否、見えざる處にこの女よりも、更に甚しい幾多の罪を犯したではないか」との自らの良心の責めに耐え得なかつたのであらう。何時しか一人去り二人歸り、遂にその女を殘して姿を消してしまつた。自ら罪無しと暴言する者、よく僞らざる良心の前に果して罪無しと固執し得るであらうか？彼ら群集の何ら爲す所なくして散つて了つたのも宜なる哉である。イエスは群集悉く去つて彼女一人なるを知るや「我も汝の罪を定めじ、往いて再び罪を犯す勿れ」と言つて彼女を歸らしめた。彼女がイエスのこの雅量、この愛に感激せしこと如何ばかりであらうか？　後にイエスの十字架の最後を見屆けて、なほ復活のよき音づれの最初の使者となつて直弟子らも及ばざる忠勤を擔んでたマグダラのマリヤは即ち彼女である。

我らも亦た眞に罪赦されたりとの自覺を得る時、深い感謝の念に滿さるゝ。その感謝を有すればこ

そ又容易に人を赦し得るのである。心に恨みを抱いてゐる者を赦すことは容易ではない。けれども、更に〳〵大なる罪を神に犯した自分が何の功なく赦されたることを思ふ時、兄弟に對する恨みは流るゝ水跡に混濁を止めぬ如く跡を留めないであらう。

かくして眞に我罪赦されたりとの體驗に生き、友の罪を赦し得る者は眞に幸福なる者である。人を恨み友を呪ふて、許し得ざる人ほど最も不幸な者は他にあるまい。

罪の贖は到底理論を以て說明することは容易でない。私共は自分の體を自分の力で持ち上げ得ない如く自分の罪を自分で赦すは不可能である。キリストの贖の血潮に依つて罪赦されたりとの體驗に活き得て、始めて他人の罪をも免し得る愛の人となり得る。全く罪赦され、舊い自己に死して、神の愛に復活し、日毎に新生して永遠の神の御座より見て、やつて甲斐ある創造と奉仕の生活に入るべきではないか。

（六）我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出したまへ

一、君子危きに近寄らず

救の第一の條件として己が罪を悔ひ改め、更に他の罪を赦し得るやう心の改造をなさしめられた我等は、なほ外界の誘惑に對しては如何なる態度をとるべきかを此處に敎へられる。前者を內的救とすれば後者は外的の救の道である。短かい言葉の中にも行き屆いた論理整然たる處にイエスの偉大さが

覗ひ知らるゝ。

「水は方圓の器に從ひ、人は交はる友による」とは古來言ひ古びた諺である。凡そ外界の誘惑より避けよとは詳の東西を問はず共通の教訓である。釋迦も孔子もキリストもその點に於ては同一の教訓を垂れてゐる。遇はずして清み得る嘗試は努めて避くべきである。「我らを嘗試に遇せず、惡より救ひ出し給へ」とは一見極めて女々しい祈りの如くに見ゆるかなれども、決してそうではない。我らは避け得る試みは飽くまでも避け、免れ得る危險は努めて逃るべき筈である。「飛んで火に入る夏の蟲」の如く自ら進んで危險に近つく必要が何處にあらうか？

世には一種の冒險的興味から誘惑に近つく者が往々ある。それは田舍より上京せる不用意なる青年等に屢〻見受ける事實である。彼等は好奇心に驅られて誘惑に近づき、遂に生涯を誤る場合が少くない。單なる「物珍らしさ」から危險に接して「ミイラ取りがミイラになる」とは愚も亦た甚しいではないか。

この祈りを女々しき者となす者は屢〻山中鹿之助の剛勇を喜ぶ。尼子家を再興せんとして三ヶ月に向ひつゝ「願はくは我に七難八苦を與へ給へ」と祈れる彼の勇敢を賞する。固より七難八苦み物ともせざる彼の勇氣は敬するに充分である。されど我らは好んで七難八苦を自ら求むる理由は決して無い。

憂き事のなほこの上につもれかし

限りある身の力試さん

とは熊澤蕃山の詠歌である。固よりその雄々しきを壯とすと雖も、唯己が力を試みん爲に困苦の試煉に突入せんとするは智慮ある者の選ばざる所である。塚原卜傳は馬を放てる野を横切らねばならない時、彼は迂回してその野を横斷するを避けたといふ。彼には躍り狂へる悍馬を避くべき飛鳥の如き術を有した。而して彼は避け得る危險を回避した。吾人は彼を武藝の達人と呼ぶに躊躇しない。

我らは固より必要あらば山なす危險を物ともせず敢然起つて神の御旨に從ふべき勇氣を要する。眞珠を慾する者は水の深みにもぐるといふ。虎兒を得んには虎穴に入るの勇を要する。「勇ましかれ、怖るゝ勿れ、戰く勿れと舊約の諸勇士を鼓舞した万軍の主エホバは今なほ我らを同樣に激勵する。我らは必要あらば猛然起つて死を決して主の命に應ぜんのみ。されど避け得る危險は心して避くべきである。眞に「嘗試に遭はせず、惡より救ひ出し給へ」とは實によくも人間味に透徹した祈であると私は感嘆を禁じ得ない。

二、社會改善の要

人間は平素大言壯語しても、一度誘惑に遭へば極めて弱き者たることを發見する。私自身イエスの救を受け、その御助けを受けてゐないなら、どんなになつてしまつたであらうと思ふと怖しさを覺ゆる。それ故、私は世の失敗者や不良少年に會ふ時先づ彼等を責むるよりも彼等に心から同情せざるを

得ないのである。若しも自分も信仰を得てゐなかつたら、恐らく彼等の今の有樣はそのまゝ自分の姿であらうと思ふと、衷心同情すると同時に彼等に信仰を勸めざるを得ないのである。

人間は誘惑に遇へば極めて弱い者である。されば我らは世の失敗者、不良少年等に道を說いて再び誘惑に奧はれたる時之に耐え得る樣、奬勵すると共に大事なるは彼らの環境を改善することである。之をなさずして、單に彼等を惡より善に遷さんとするは片手落ちの暴舉と言はねばならぬ。三十年の長きを不良少年感化に身を捧げてゐる留岡先生の採る方法の主要なるはその環境の改善であるといふ。北海道北見の大自然の懷に抱かれつゝ溫情溢るゝ先生に親しく接せる彼らがその非を悔ひて善良な人間になつたのはどれ程あつたか知れない。這種的に惡の素質を有する者を除いては、皆善人になり得ることは間違ひない事實である。我らは努めて彼等の境遇の改善に貢獻せねばならない。救世軍などで免囚保護、自由廢業などに努むるは又その所以に外ならない。而して救はんとして神と偕に起ち上る信仰の勇者に取つて誘惑の多い危險地域に出入して何等、その影響を受けざるは彼等を救はんとの心の强みが惡魔の誘惑に先手を打つからである。

誘惑は何時如何なる時、突如として我らを襲ふやも圖り知れない。我らはかゝる不意打ちに應ずる勇氣と覺悟をもて常に目を醒して『嘗試に遇はせず、惡より救ひ出し給へ』と祈りつゝ、生けるイエスを仰ぎ見、全能の神と偕に步むべきである。

（七）國と權と榮とは窮りなく爾の有なれはなり。アーメン

從前譯の聖書にあつたこの一句は改譯に於ては省かれた。イエスの弟子に敎へた祈りの言葉には無かつたからである。之は弟子達がイエスの敎へた祈りに加へて祈つた言葉であらう。我らも亦この意義深き一句を附加へて祈りたい。

一、神よりの委託物件

凡そ個人間の爭鬪、社會の騷亂乃至は國際間の戰爭は何故に起るか。その原因を一言にして約せば唯「慾」の一字に歸する。一切の不和鬪爭而して罪惡の根本理由が「慾」にその源を發すること古今東西に共通する事實である。されば聖人君子は之を憂ふること深く、その慾より免れんと努力したのである。それ故、解脫の道は釋迦によつて示された。徹底的禁慾主義を唱へ、何が何でも慾望を押さへつけ、その後に味ふ平和と法悅とに浸らんとする。解脫とは即ち之である。之を道德的言葉を以て敎へたるものが孔孟の說く所である。モーゼの傳へた十誡も同じく禁慾主義であり、之がイスライルの歷史を支配し來つた。かくして釋迦も、ゾロアスターも、マホメットも孔子も孟子もただ慾を征服すべきを力說した。併しイエスは更にその奧を掘り割つて、慾のよつて來る所を尋ね、各自の所有意識が慾望を產むことをつきとめて、一切を神に歸すべきことを敎へた。けだし國と權と榮とは窮りなく神の所有であらねばならぬ。

人間の所有する一切は――身體も智識も事業も財産も――神より託されたる委託物件である。此處にキリストによる人生觀の根本的改革が存する。銀行員の手元にある金はよし之を自由に使用し得るこ雖も、所有權は他人に屬する。それ故、もしそれを私用する時は刑法の問ふ所こなるは當然である。我らは委託物件たる所有物を私用盜用することなく、一切を擧げて神の榮光のために用ひねばならぬ。日本の現狀を眺むる時、政治界の醜態も、經濟界の不安も、教育界の混亂も、神よりの委託物件の濫用にその因を發する。パウロは言つた「凡ての人、上にある權威に服ふべし。そは神によらぬ權威なく、あらゆる權威は神によりて立てらる。この故に權威にさからふ者は神の定に悖るなり」こ。政治上の權威もそは神より與へられたる權威である。爲政者は此處に目醒めて國民、民族を指導せねばならない。

「信じたる者の群は、おなじ心おなじ思こなり、誰一人その所有を已が物こ謂はず、凡ての物を共にせり。彼らの中には一人の乏しき者もなかりき。これ地所、あるひは家屋を有てる者、これを賣り、その賣りたる物の價を持ち來りて、使徒たちの足下に置きしを、各人その用に隨ひて分け與へられたればなり。(使徒四〇三二―三五)」かくして初代基督教徒は一切を捧げて主の用に供した。世の富者なる者、また彼ら往時の使徒に倣はうではないか。

モーゼはエホバの命を蒙り祭壇を築かんこするや「凡て心の頴敏き人すなはちその心にエホバが智

慧をさづけたまひし者、凡そ來りてその工をなさん」こ叫んで同志を募つた(出埃及三六〇二)敏き者は即ちエホバが智慧を授け給へるものである。我らはこの智慧を以て神の榮こ人類の福祉こに用ふべきではないか。

斯く觀じ來る時、權威も財産も智識も一切は神のものにして「我」に屬する何物もない筈である。一見我が有に屬するかの如く見ゆる委託物件たる悉くを神の有に歸する時、我が物は神のもの、神の物は我がものこの妙諦に入る。「我汝にをり、汝我に居るこき、何事によらず祈つて求めよ、さらば成るべし」この御約束は彼に成就する。我らは神の力を傳ふる一本の電線に過ぎない。流るゝ電氣が働きをなすのみ。針金の與り知る所ではない。働き給ふは神にして我らに非ず、されば一切の榮光は神の受くる所であらねばならぬ。健康も才能も物質も地位も已が有するあらゆる物を神よりの委託物件こして、その御手に歸し奉る時、我らはパウロこ共に「最小さき者よりも小き者なるにキリストの測るべからざる富」を與へらるゝのである。その時、我らの生活は一變し、我らの人生の價値は有限の「我」より神こ偕なる無限大に擴大し得るであらう。

「若い時には非常に病弱なりし貴下が世にも稀なる大成功をなした祕訣は何か?」こ問はれたウィリアム、ブースは言下に「ウィリアム、ブースに屬ける一切を神の所有に歸したが故である」こ言つたこいふ。二十世紀の奇蹟、救世軍は自己の所有の一切を神に捧げて起つた貧弱なる青年によつて成さ

れた。「國と權と榮は窮りなく汝の有なり」と祈つてなす所に、神は絶えず不思議を行ひ給ふ。

二、アーメンの意義

「アーメン」とは「まことに」の意味である。眞實間違ひのないとの謂である、我らの祈りの最後は形式として「アーメン」を以て結ぶのでない。自らの祈り乃至は共に祈る者の祈りが眞實誤りのないことを確信するが故にその眞實さを告白するまでである。

神は靈なれば拜する者もまた靈と眞とを以て拜さねばならない。我らは誠と眞實をこめて祈らねばならないのは當然過ぐる程の當然ではないか。されば我らの祈りが「アーメン」であると共に、我らの日常生活が常に「アーメン」であらねばならない。

「汝い祈に先づ汝自ら答へよ」とウイリアム・ブースは言つた。祈は單なる口先きだけの言葉でない。眞心からの止むに止まれぬ祈願である故に、願ふ處、聽かるゝと信じて、先づその實行に着手しなければならぬ。而もその祈は人間側だけの願望でなしに、同時に神御自身の願望であり、神の聖靈をして自らの心にて祈らしむる眞實の祈でなければならない。この事こそ、今神が求めてゐ給ふことであるに違ひないと確信せしめられる祈こそ「アーメン」であり、眞實であり、その祈こそ神に聽かるる祈である。祈の極致は實に自らが祈るにあらずして、神の聖靈をして吾が内に於て祈らしめることである。

過失を赦せ

汝等もし人の過失を免さば、汝らの天の父も汝らを免し給はん。もし人を免さずば、汝らの父も汝らの過失を免し給はじ。（マタイ傳第六章一四——一五）

（一）マタイの今昔

『我らの負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ』と祈るべきを教へたイエスは更に他人の過失を免すべきを繰り返して居られる。かく重ねて之を說かねばならない程他人の過失を免すことは困難な業にして而かも重大な事である。

この記事を書きつゝマタイは己が前半生を顧みて感謝に胸を躍らしたことであらう。何故ならば、彼の過去は貧民弱者を惱ます取稅人であつたからである。取稅人とはローマ政府のために稅金を集める人にして、屢々不當な金額を要求した。稅そのものが大いにユダヤ人を困憊せしめた。是の如き稅官の下級吏としての彼は幾度か人を苦るしめ泣かしめたことであらう。『なんぢら己を愛する者を愛する

とも何の報をか得べき、取税人も然かす事に非ずや』（マタイ五・四六）とのイエスの言の如く取税人とは惡人の典型であつた。さればマタイは己が過去の罪深さを思ふには常に慚愧に耐えざるものがあつたであらう。自ら記したマタイ傳に於てのみはマタイの名を記すには常に『取税人マタイ』と記してゐる。彼は曾ては人の過失を免し得ざるのみか、財産差押に貧民の涙を流さしめたこともあつたであらう。不當な徴税に人々の恨みを買つたことも少くなかつたであらう。然るにその彼が今や『山上の垂訓』に聖筆を揮ふ神の僕と化した。顧みて隔世の感と感謝の思ひに溢れたことであらう。彼は凡ての者の過失を心から免した時、神も亦た彼の罪の總てを赦してかくも榮光の聖業にたづさはらしめたのであらう。

（二）赦す者の歡喜

吾ら自ら顧みて人を赦し得ぬ時程苦しいことはない。折でもあらば仕返しをしてやらう、彼がする事々に惡くなればよいがと心の中に願ふ時位私共の心の暗く、冷く、淋しくそして苦しい事は他にないであらう。私自身嘗てさうした經驗を嘗めたこともあるが、種々不快な感に襲はるゝ時、常に十字架上のイエスを仰ぎ見ては、自らを責むるその人のためにさへ祝福を祈り得るに至つた。その時暗雲忽ち去つて碧空の下に明月を仰ぐ喜びを體驗させられる。

『我汝らを愛せし如く汝らも相愛せよ』と教へたイエスの愛を實行する第一歩は人の過失を免すことである。人の過失を責むるは易く、之を赦すは難い。併し之が困難であればあるだけ、之を赦した時は言ひ知れない心安きを覺ゆるものである。

グラッドストンは英國首相として全國民の衆望を集むる識德共に秀でたる大政治家であつた。然るに或時食事の際下女の一寸した失策に小言を言つた處が、後に下女が悲しさうな顏をしてゐるのを見て慚愧に耐えず、一週間ばかりは食事する元氣もなく悄然としてゐた。周圍の者がその態度に不審を抱き、その故を問へば『自分は一人の下女の過失を免す事が出來ず、神の前に罪を犯した可弱い者である。こんな有様では自分には到底大英國を統率して行く資格がないと感じて悲しんでゐるのである』と答へたといふ。此の偉人にして而かもこの擧あり、味はうべき物語ではないか。

私の知る一人の救世軍の士官は自由廢業の一婦人を助け來つて、その途中暴漢の襲ふ所となり、遂に人事不省に陥つた。我に歸つて見ると暴漢達はその婦人を拉し去つた後であることを知つて『神よあの憐れな婦人を助け給へ、あの迫害する人々を憫み給へ』と祈つた。そしてその時から『死』といふ事が少しも怖しくなくなつたといふ。數年前幾百人もの佛教徒が救世軍に押し寄せ山室先生を侮蔑せんとして騒ぐや、その士官はにつこりと笑つて壇上に立ち、『皆さん祈りませふ』と言つて皆のために祈つたことのあるのを私は記憶してゐる。私は彼の士官の態度に甚く感動させられたのである。

『若し汝の仇飢えなば之に食はせ、渴かば之に飲ませよ』とパウロは言つた。人を赦すのみでなく、その

仇人を愛する程大きな愛はないであらう。此處に經驗せざる者には味ひ知らざる大いなる喜びがあり感謝がある。人は何故自ら苦んで世を呪ひ人を恨みつゝ、我と我身を磨り減らしてゐるのであらうか。

僞善的行爲を慎め

なんぢら斷食するとき、僞善者のごとく、悲しき面容をするな。彼らは斷食することを人に顯はさんとて、その顏色を害ふなり。誠に汝らに告ぐ、彼らは既にその報を得たり。なんぢは斷食するとき、頭に油をぬり、顏をあらへ。これ斷食することの人に顯れずして、隱れたるに在す汝の父にあらはれん爲なり。さらば隱れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。（マタイ傳第六章一六——一八）

（一）大賢愚に近し

『汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ』と誡めて施濟の時、祈禱の際のとるべき態度を敎へたイエスは更に語を重ねて斷食もまた人に見られん爲にせざらんことを述べてゐられる

斷食とは現在では胃病治療の一方法たるに過ぎないが、昔は修養せんとする者が斷食して祈つたことは洋の東西に共通する所であつた。斷食して祈るはよい、併し殊更に悲しき面容を粧ふて人に知ら

しめんとする必要が何處にあるか？『坊主の坊主臭きは坊主に非ず』と昔から言へる如く坊主らしい風をしてゐる坊主は善智識ではない。クリスチャンが如何にもクリスヤチンらしくバタ臭いのはほんとうのクリスチャンではない。『大賢愚に近し』である。一見愚者の如く見ゆる者が案外大賢碩學である場合が少くない。人の見て氣づかぬ所に眞の偉大さがひそんでゐるのである。ほんとうの偉い人は偉く見えない。會社、官廳等に於ても多く下級の者が威張つてゐるに反して、その上席の者は偉いと思つたのはこの人かと意外の感に打たれる程頭の低いものである。『稔る程首を垂る丶稻穗かな』である充實してゐる者はいよ〳〵益々謙遜である。眞に己に克つて修養せんとする者は斷食するとも悲しき表情を以て人に廣告せんとする如きことのあらう道理がないではないか。

（二）神の見る善事

その顏色を害ふて斷食せることを人に知らしめんとする者は人が知ればそれで目的は足りたのである。『既にその報を得た』故、彼らには更に神の報を期待すべき資格はない。我らは人間を對象としその態度批評を標準とする生活を捨て丶神をのみ見あぐる生活に進まねばならぬ。萬古不易の神の御顏を仰ぎつ丶生くる時にこそ、眞の安心立命は發見せらるゝのである。世の毀譽褒貶を他所に見て眞理に直面して生くる時、百萬人と雖も我往かんとの勇氣が湧き出づるゝのである。

澤瀉は少しの水が注ぎ込んでも直ぐ音を立てるが、深淵は水が流れ込んでも絶えず沈默を續けてゐる

る。斷食しても人に知らせんなどと思はざるのみが之を隱して克己してゆく所に人格の奥ゆかしさがあるではないか。クリスマスの夜、サンタクロースか、深夜煙突から忍び込んで子供の靴下に種々のプレゼントを入れておいてくれるとの物語は人の見ぬ所に善事を行ふことを敎へるためであらう。昔セントエコラスといふ聖者があり或日途上で一軒の茅屋の前を通ると金に窮して苦しんでゐる親子の悲しい聲が洩れ聞えた。彼はその夜早速その家に到り人知れず黄金の棒をおいて歸つた。それによつて貧しい一家は救はれたといふ。このセントニコラスなる名が轉じてサンタクロースになつたのであらうといふ。暗示に富んだ物語である。我らは何人も氣づかざる所に善事をいそしみ、隱れたる見給ふ神と偕に生きたいものである。

天に財寶を積め

なんぢら己が　に財寶を地に積むな、こゝは蟲と錆とが損ひ、盜人うがちて盜むなり。なんぢら己がために財寶を天に積め、かしこは蟲と錆とが損はず、盜人うがちて盜まぬなり。なんぢの財寶のある所には、汝の心もあるべし。

（マタイ傳第六章一九——二一）

（一）イエスと生活問題

『我らの日用の糧を今日も與へ給へ』と祈るべきことを敎へたイエスは此處に復た財産問題及び生活問題に關する敎を垂れ給ふた。イエスの宗敎は頭を剃つて山に逃げ込むことを說く厭世主義に非ずして、目まぐるしい現實の社會に生きながら潔く正しく强く生活せんとする生ける宗敎である。イエスが幾度も生活問題を口にせるはそれがためである。我らの地上の生活は天國の生活の延長である。我らはこの地上に生き乍ら神と偕なる生活を營まねばならぬ。『大隱は街にかくれ、小隱は山にかくる』である。然らば雜沓の巷に身を處し乍ら、或は冷たい物質の研究に、學理の探索に身を委ね、學窓にありながらも神と交はる仙人の生活をこの地上で營みつゝ信仰を毎日の地上生活に織り込まねばならぬ。かく觀じ來る時我らの當然直面する問題は生活問題である。

水と草とを追ふて、今日は東に明日は西にと家畜を伴ふて彷徨ふた遊牧時代の人間には働きさへすれば肉體の糧は與へられてゐた。併し、それも今は原始人類の昔を偲ぶ語草と化した。今や世界の全人類は生活問題に直面して呻いてゐる。貧民は富豪に、勞働者は資本家に、小作人は地主にと、弱き者貧しき者の凡ては呪ひの叫びを放ちつゝ藻掻いてゐるのである。今や當に世界の全人類は生きんとして苦しんでゐる。生存せんとしてあせつてゐる。然り現代人は唯生存せんために汲々として働き、却て眞の人間本來の生活を忘れてゐる者が甚だ多い。我らお互に生活問題に於て物質方面のみを見るとき居ても立つてもゐられない程現代は逼迫を告げて居る。此處に至つて我らは他の一切を差し措い

ても何が何でも、先づ第一にパンの問題を解決せねばならない――若しも人間がパンのみによつて生きるものであるとするならば……

『人の生くるはパンのみに由るに非ず』。物質のみによつて生くるに非ざる人間は、よし物質に於て巨萬の富を擁するとも見るもみじめなる貧しき生涯を送る者がある。又赤貧洗ふが如き者にして王侯貴人も及ばざる富める生活を營める者も少くない。歴史あつて以來幾百萬圓の富を積んだ者は數知れないであらう。けれども時の經過は彼らの總ての名を忘れしめた。然るに洗ふが如き赤貧の中に生き乍らもキリスト、釋迦、孔子、日蓮、親鸞は爾來今日迄幾百幾千萬の人心に力强く生きてゐることであらうか。驕れる平家は久しからずして槿花一朝の榮と消えた。而して地上生活者の敗殘者の好モデルたるべきキリストは實は最も富める高貴の人、永遠の生くる人であつたではないか。我らは咲き誇つて軈て凋む花瓶の麗はしき花よりも、よし小さく見すぼらしくとも大地に根を張る草花たらん事を望む。知る人もなく谷間の岩蔭に微笑む草花は春來れば花咲き、秋訪れては實を結ぶのである。我らは花瓶の根のない美しき花を捨て、大空目がけて伸びゆく大地の草花たらうではないか。

（二）朽ちざる寶

財産を持つことが罪ではない。唯己がために、地に積むなとイエスは誡め給ふ。金錢も肉體も事業も智識も一切のもの神より與へられたる委託物件である。故に之を神の命じ給ふまゝに用ふるに於て

も多々益々榮ゆ。舞ずるのである。己がために用ひんとする事が罪である。凡ての財産、凡ての智識は神の御榮えのため、人類福祉のために用ひる爲に與へられてゐるのである。

『此處は蟲と銹とが損ひ、盗人うがちて盗むなり』とはイエスの比喩であつたが、若しもイエスが日本にゐ給ふたなら『地震で瞬く間に失ふ財寶を地に積むな』と教へられたかも知れない。五十年の文化と人智の傾注を以て築いた東都は大地一度揺ぐ時、一夜にして一塊の灰と化した。我等は何故朝に榮えて夕に朽つる物質を追ふに日もなほ之れ足らずと齷齪してゐるのであらうか。不滅不朽の財を天に積むため不斷の努力を捧げようではないか。

あの震災後種々の人々の語る所は『あの時最も切實に感じられた嬉しかつたものは人間の眞心である』との一言であつた。一個の握飯、薄い衣の一枚でも惠んだ者の愛は永遠に彼らの魂に刻まれてゐる。神の心を心とする眞心の愛ほど强く大きな寶はない。聖人君子とはこの愛に生きた者を呼ぶのである。『愛はいつまでも絶ゆることなし』とパウロは言つた。神の心に生きて勵んだ愛の業は神の國の續く限りは永遠無限に殘るべき筈である。神なく愛なき生活は百年の長生も神の前にその價値は零である。一日可し、半日可し、神の前に眞心もて愛にいそしむその時こそ無限の價値を有するのである。朝顔の榮花一時も、千年ふる松にかはらぬ心ともがなと室鳩巣は歌つた。一瞬間の生命でも天に向つてはゝえむ者はしき花は如何に餘きことか。『朝に道を聞き夕に死すとも可なり』と古人は言つた。

我らも地上生活は天國よりの出張所なりとの自覺のもとに、永遠に不滅不朽の寶を天高く積むべく夜を日についで奮鬪しようではないか。

光明の人生

身の燈火は目なり、この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん、然れど、なんぢの目あしくば、全身くらからん。もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや。

（マタイ傳第六章二二）

（一）人生明暗の分岐路

白扇倒に懸る東海の富士も、千顆萬顆の珠玉天に散らして激流白銀の吹雪を吐く天龍の峽も見えざる盲者には解し得ず、味はひ得ざる唯暗黑その物である。靈の目閉ぢたる盲者には美はしく喜ばしき靈界の消息を感ずる能はざる空の空なるものに過ぎない。心の眼暗き者は靈界の樂しき樣を知り得ざるのみか、己が住む地上の美も味はひ知らずして世を厭ひ生を呪ふて悶々たる暗黑の世を過して了ふ。『身の燈火は目なり、この故に汝の目ただしくば全身あかるからん』である。正しき目を持つ者は正しく自己を反省し、捨つべき短所も伸ばすべき長所も之を見究むるは容易である。更に進んで世を批判するに誤りなく、社會の濁流中に竿させども前かも行く可き彼岸に碇を下し得るのである。さればこの

浮世となげき嘆かれし現實の世も、確固不拔の信仰さへあらばエデンの樂園を偲びつゝ、無限の歡喜と感謝となつて人生を辿り得るのである。

哲學者デカルトは言つた『我考ふる故に我れ在り』と。考へ得る者は存在せる證據である。然らば考ふる能力を有せざる者は存在せざるに等しい。即ち心の目の塞ける者は脚は大地に接し、鼻は呼吸し、心臟は鼓動を續くると雖も、早や生ける人間としての存在を認むることは不可能となる。『なんぢの目あしくば、全身くらからん、もし汝の内の光、闇ならば、その闇いかばかりぞや』とイエスの叫んのはそれである。

この心の目の開くと否とは人生の幸不幸、成功不成功の分水嶺である。

イエスの手一度觸るゝ時、幾多の盲人は立ち所に癒された。二千年前の肉のイエスは肉の盲人を癒した。今や靈のイエスは靈の目を立ち所に開かしめ給ふ。エリコの盲人バルテマイはイエスの通過を知つてその憐みを求むるや『立て、汝をよび給ふ』とイエスの彼を叫ぶを告げれば彼は「うはぎを脱ぎ捨て、躍り上りてイエスの許に到つた」とある。今や血潮の流るゝ御手を擴げて招き給ふイエスの聲に躍り上り、走り來つてその心眼の開かれるをイエスに願ひ求むる者は誰ぞ！

生れながらの盲目にして『ゆきてシロアムの池にて洗へ』とのイエスの言葉に『乃ち、ゆきて洗ひたれば見ゆることを得て歸れり』とヨハネ傳は他の盲人開目の事實を記してゐる。心の目の開かなら

んためにイエスの言を信じ、その命のまゝに從はんをする者はなきか！

心の目開けたる者は明るき人生を濶歩し、心の目閉ぢたる者は暗黑の人生を彷徨す。

右せんか左せんか？　選擇は諸君の手中に托されてゐる。そも諸君は何れを選はんとする？

（二）　光を求めよ

釋迦は衆生に佛性あり、悟入すれば凡夫も佛となると敎へた。風雨烈しき夜の深山に小道を分くる如き難行苦行の後、菩提樹の下に豁然悟入した彼には心眼開けて靑空に懸る太陽を仰いだ如きであつたであらう。達磨大師の面壁九年も暗夜に光を求むるためであつた。古來暗黑にあつて光りを求むるに眞劍なる者はあらゆる難行苦行をも厭はなかつた。

この光こそ他の何物を以ても購ひ得ざる眞實の寶たることを彼らは知つたが故である『天國は畑に隱れたる寶の如し。人、見出さば之を隱しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく賣りてその畑を買ふなり。また天國は良き眞珠を求むる商人のごとし。價たかき眞珠一つを見出さば、往きて有てる物をことごとく賣りて、之を買ふなり』とのイエスの言葉は彼らの心境を說明せるものであらう。我らも亦た光を求むるに躊躇してはならない。『光りの中を歩め』とイエスは敎へ給ふた。先づ心の目を開いて光の中を歩み全身明るく世も亦た明るく光り輝く人生を辿らうではないか。

二人の主に兼仕へ得ず

『人は二人の主に兼事あること能はず、或は、これを憎み、かれを愛し、或は、これに親しみ、かれを輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼事なること能はず、』

（マタイ傳第六章二四）

（一）　二兎を追ふ者

『二物質は同時に同所を占有する能はず』とは物理學の法則である。併し、それはそのまゝ精神界にも適用し得る原理である。

我らは二人の主に兼ね事へて平等の忠勤を捧ぐることが不可能である如く、神と惡鬼に對等に事へんとする如きは又同じく不可能であるは云ふまでもない。我らの心に惡魔に所を得させつゝ神を迎へんとするは木によつて魚を求むるに等し。我らは一切を捧げて神に從ふか、然らずんば白旗を翻して惡魔に降參するか、二者何れか一つである。諸君はこの二者の何れを選ばんとするか？　斷然その何れかに決せねばならない。徒らに躊躇逡巡する所に、惡魔は蹤梁を恣にするが故である。

ヨハネ傳に『光りは暗黑に照り、暗黑は之を悟らざりき』とある。暗黑にのみ住む者は光來れども之を悟り得ないのである。惡魔に降參しその虜となれる者には眞理の光照れども之を悟らざるのみか、